

# 小出詞子先生と日本語教育・教員養成

2020





# 『小出詞子先生と日本語教育・教員養成』

## 目 次

はじめに	鮎澤 孝子	• 149
小出詞子先生の略歴		• 151
第 1 章 小出詞子先生とご尊父小出満二氏	鮎澤 孝子	• 153
第 2 章 フィリピンでの小出詞子先生	鮎澤 孝子	• 159
第 3 章 小出詞子先生と日本語教科書	北條 淳子	• 167
第 4 章 小出詞子先生とICUの日本語教育	中村 妙子	• 181
第 5 章 ICU 初期における日本語教師養成	上野田鶴子	• 191
第 6 章 日本語教師の職場	鮎澤 孝子	• 195
第 7 章 小出詞子先生と日本語教育学会	上野田鶴子	• 201
第 8 章 朝日カルチャーセンター日本語教師養成講座	佐々木倫子	• 205
第 9 章 姫路獨協大学外国語学部日本語学科	古藤 友子・福岡寿美子・金澤 協子	• 215
第 10 章 小出記念日本語教育研究会	西原 鈴子	• 225
執筆者略歴		• 233
おわりに	上野田鶴子	• 243



## はじめに

小出詞子先生は『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』（1997、凡人社）に「ある日本語教師のルーツ」という文章を書いていらっしゃる。

小出詞子先生がシドニー大学を訪問した折に、お父様がシドニー大学にいたことがあるというのは知っていたが、何をしていたのか知らない。それを知りたいとシドニー大学の先生にお話ししたところ、お父様の辞令のコピーを渡された。そこには1918年の日付で「シドニー大学日本学科のReaderに任ず」とあった。小出詞子先生は「私の日本語教育のルーツはここにあったのではないか!」とお書きになっている。

小出詞子先生は1939年4月に東京女子大学に入学、大学卒業が半年短縮されて、1942年9月に卒業、文部省による南方派遣日本語教師として1943年1月にフィリピンに派遣された。1944年戦時状況が悪化し帰国。1948年に長沼直兄の日本語学校で宣教師のための日本語教育に従事。

1953年からは国際基督教大学で日本語教育及び日本語教師養成に携わり、1987年に定年退職。新設の姫路獨協大学に移られ、1997年3月に姫路獨協大学を退職なさるまで、日本語教育・日本語教員養成に関わって来られた。

「日本語教育」という全く新しい分野のために半世紀にわたって尽力なさった小出詞子先生の功績を記したこの冊子が刊行されることになり心から嬉しく思っている。

鮎澤孝子



## 小出詞子先生の略歴

- 1921年 6月23日 鹿児島高等農林学校教授（農業経済）の小出満二氏と貞子氏の四女として鹿児島市に生まれた。半年後東京東中野に移る。
- 1922年 11月 満二氏 東京帝国大学農学部講師に就任。
- 1928年 4月 満二氏 九州帝国大学教授となり福岡に転居。福岡女子師範附属小学校に転入。
- 1934年 4月 私立福岡女学院に入学。
- 1939年 4月 東京女子大学文学部（英語専攻）入学。
- 1942年 9月 大学教育が半年短縮され9月卒業となる。
- 1942年 11月 第1回文部省南方日本語教員養成講座受講。受講応募者約6千人のうち約60名が選ばれ、全員フィリピンに派遣される。
- 1943年 1月 任陸軍判任官としてフィリピンに派遣される。
- 1944年 12月 戦時状況が悪化、女性は帰国を命ぜられる。帰国後文部省教学局非常勤。
- 1945年 12月 鯉淵学園で英語教育を担当。
- 1947年 4月 連合軍総司令部民間情報教育部顧問として通訳や雑誌の検閲などを行う。
- 1948年 9月 財団法人言語文化研究所日本語学校が長沼直兄によって創設され、同校講師として宣教師のための日本語教育に従事。
- 1950年 6月 ガリオア奨学金でミシガン大学に留学。ミシガン大学大学院研究生として約1年間外国人のための英語教育を勉強。
- 1952年 4月 国際基督教大学（ICU）が創設され、英語研修所助手として英語教育に従事。
- 1953年 4月 国際基督教大学が正式に開学、教養学部講師に就任。留学生受け入れに伴い日本語教育に従事。日本語集中教育を開始。
- 1955年 9月 ICU、日本初のJunior Year Abroad Program（1年間留学制度）を実施。
- 1959年 4月 国際基督教大学教養学部助教授に昇任。
- 1959年 6月 ミシガン大学の奨学金を支給され、ミシガン大学大学院に留学。言語学専攻。英語の分析方法で日本語を分析。米国内務省主催日本語教育専門家会議に出席。日本語教師養成、日本語教科書作成を本格的に行うことを決意。
- 1960年 8月 ミシガン大学大学院修了。M. A. in Linguistics 取得。
- 1961年 4月 国際基督教大学で「日本語教師養成講座」設立が認められ、日本語教育専攻が可能となる。「日本語教授法」は開講されていた。「日本語学概論」その他の科目を増設し、非常勤講師に著名な先生方を迎えた。
- 1961年 11月 「外国人のための日本語教育研究会」発足。
- 1962年 6月 「外国人のための日本語教育学会」創立、理事となる。

- 1963年 短波放送（ラジオ短波）の番組“Let's Learn Japanese”を担当。1回15分、月曜日から金曜日まで放送。再放送が20年近く続いた。1971年にこの番組・テキスト作成に対し文部大臣賞が授与された。
- 1965年8月 文化庁・国立国語研究所主催 日本語教師養成講座講師。
- 1966年4月から1985年3月 文化庁日本語対策委員を務める。
- 1967年1月から1969年9月 フルブライト奨学金を得て、マサチューセッツ工科大学研究生、後にハーバード大学研究員として滞在。
- 1970年4月 国際基督教大学教学養部準教授（日本語）。
- 1971年1月 オーストラリアのモナッシュ大学、在日日本センター主任。
- 1971年4月 日本語教育学会の会誌『日本語教育』の編集委員となる。
- 1971年7月から8月 外務省の助成を受け、オーストラリアおよび東南アジア諸国における日本語教育の現状および問題点把握のための調査を行う。
- 1972年8月から9月 外務省の助成を受け、ヨーロッパ諸国・ソ連における日本語教育の現状および問題点把握のための調査を行う。
- 1974年 朝日カルチャーセンター日本語教師養成講座コーディネイター。
- 1976年4月から8月 国際交流基金の助成を受け、大洋州における日本語教育の現状および問題点の把握のための調査を行う。その後、中国・シンガポール・マレーシア・フィリピン・オーストラリア・ニュージーランド・米国・カナダなどの日本語教育の現状・問題点把握のための調査を春期・夏期休暇中に継続。
- 1977年3月 「社団法人日本語教育学会」設立。理事となる。
- 1981年4月 国際基督教大学教養学部教授に昇任。
- 1987年3月 国際基督教大学を定年退職。
- 1987年4月 新設の姫路獨協大学外国語学部日本語学科長として赴任。
- 1988年 国際基督教大学名誉教授の称号を受ける。
- 1993年11月 永年の日本語教育における功績に対し勲四等瑞宝章を授与される。
- 1997年3月 姫路獨協大学を定年退職。
- 1997年4月 姫路獨協大学名誉教授の称号を受ける。
- 1998年11月 東京吉祥寺の森本病院に入院。
- 2002年3月1日 同病院にて逝去。80歳。
- 2002年3月17日 国際基督教大学大学教会において古屋安雄国際基督教大学名誉教授・大学教会名誉牧師によって小出詞子先生追悼記念礼拝が行われた。

ここに記載した略歴は追悼記念礼拝の記録『小出詞子先生追悼記念記録集—追悼記念礼拝および先生を偲ぶお茶の会』（2005年6月、記録集編集委員会編）の「小出詞子略歴」に『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』（1997年、凡入社、15-29）を参照し、いくつかの項目を選択追加し、最後の3行を書き加えたものである。



## 第 1 章

---

# 小出詞子先生とご尊父小出満二氏

鮎澤孝子

キーワード シドニー大学 鹿児島高等農林学校 小北文庫 鯉淵学園

---

### 1. はじめに

小出詞子先生の「父を語る」というエッセイが『日本語教育とともに 小出詞子著作集』にある。これは『肥料研究界』49巻12号（1955）から再録されたもので、1955年5月29日に80歳で亡くなった小出満二氏を追悼する文章の一部分である。

小出詞子先生が大学を卒業してある雑誌の編集の仕事を志望し、ほぼ決まってから事後報告のつもりで父に相談したところ、駄目だとの一言。その父が比島派遣日本語教師募集に応募したときには二つ返事で許してくれたとのこと。「当時は分からなかったが、後でその理由がわかった。」と詞子先生は述べている。

小出詞子先生が1972年に初めてシドニー大学を訪ねたとき、大学の図書館で「小出満二」の辞令をみつけてもらった。その辞令を見ると、確かに満二氏は日本研究のReader（教授に次ぐ位置）として1920年までシドニー大学に滞在したことが判明した。「父は私が生まれる前、マードック（シドニー大学に日本語講座を開設）に呼ばれて初の交換教授として教えていた。明治に生まれた父として何も家族に説明してなかったので、何を教えたのかははっきりしないが、専門の農業経済のほか、日本語も教えた可能性も考えられる。そうだとすると、まさに親子で同じ仕事に関わることを考えたとしても無理でない。」

満二氏がシドニー大学にいたのは鹿児島高等農林学校教授の頃で、満二氏の年譜には「1918年－1920年シドニー大学出張」とあり、満二氏の著作目録にシドニーでの講演タイトルとして、1918年に「Agriculture in Japan」と「豪州雑録」、1919年に「豪州の人口につきて」がある。

1909年には「シドニー日本人会」が設立されており、日本語での講演は「シドニー日本人会」での講演ではないかと思われる。1904年には日本郵船が日豪間に定期航路を開設し、三井物産、三菱商事、日本綿花、岩井商店など大手商社がオーストラリアに支店を設けていた。満二氏はシドニー在留の実業家北村寅之助の援助を受けて、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋諸島、東南アジア関係の研究に重要な学術文献を収集している。

小出満二・北村寅之助の姓名の第1字をとり「小北文庫」と称され、現在は「小北文庫目録」（1970年2月）が鹿児島大学附属図書館に保存されている（石渡茂、2003）。

## 2. 満二氏の学生時代

満二氏は1879年（明治12年）8月13日、兵庫県養父郡八鹿町伊佐に6人兄弟の二男として生まれた。生家は9代にわたる医家で、父や祖父は村の長老的存在で村人に尊敬されていた。満二氏は1892年に学制尋常4年を卒業し、中学に入学するために上京して、13歳で都文館中学に入学、1898年に第一高等学校理科に首席で合格する。海軍を目指したが中学校末期から近視が進み、海軍兵学校進学を断念。第一高等学校に首席で入学したものの、一学期は落第。人生に悩み、思想上の救いを求めて、本をむさぼり読んだ。内村鑑三と接する機会に恵まれ、キリスト教と出会う。満二は隣に住んでいたクリスチャンの村田勤のピューリタンの生活、蔵書に関心を抱き親しくしていた。

1903年（明治36年）に東京帝国大学農科大学に入学。1906年に卒業、卒業論文は「但馬牛産論」で、1907年（明治40年）1月4日に東京帝国大学農科大学助手に採用される。1907年7月号から10月号の『中央農事報』に4回に分けて、「但馬國に於ける牛産に就いて」が発表され、これを内村鑑三が新渡戸稲造に紹介したのが、満二氏が新渡戸稲造と知遇を得たきっかけと言われている。

なお、新渡戸稲造の1898年に出版された『農業本論』は農業に関してだけでなく、哲学から小説にも及ぶ内容で、農学の書としてはベストセラーであったが、1908年に改定されている。この改定を手伝ったのは満二氏であり、新渡戸は改定版の序に「此改版に就きては、農学士小出満二君を労したること甚だ大なり。特に記して、深く同君の労を謝す。」とある。この改定版で満二氏は200頁余増訂し、文体が変わらないよう苦心したと貞子夫人への手紙に述べている（『鯉淵研報』第23号、2007年、22）。

内村鑑三と新渡戸稲造はともに札幌農学校の2期生で、クラーク博士の直接の教えは受けてはいないが、1期生を通じその精神や教えを引き継いだクリスチャンである。満二氏はこの二人の感化を受けたクリスチャンだった。

## 3. 満二氏と貞子氏の結婚

満二氏と貞子氏の結婚については貞子氏の手記「娘たちに父を語る」（『風竹』私家本から『満二著作集』419-423に収載）によって記す。満二氏と貞子氏はそれぞれ次男・次女で、出身地は異なるが、二人とも東京での生活がいちばん長い。満二氏は内村鑑三・新渡戸稲造からキリスト教の感化を受け、貞子氏は日本女子大学に在学中、学長で元牧師の成瀬仁蔵からキリスト教の感化を受けた。

1901年（明治33年）、貞子氏が11歳のときに日本女子大学が設立された。母から「結婚なんかつまらないからこの女子大学に入りなさい」と言われ、姉も貞子氏も日本女子大学に入学した。母は貞子氏の弟を生んだあと亡くなった。貞子氏は日本女子大学卒業後、

二人目の母の病氣看護のために岐阜の実家に帰った。

満二氏は兵庫県養父郡八鹿町伊佐の父の病床を見舞った帰りに岐阜に立寄り、そこで二人は顔を合わせた。これが貞子氏の手記にある「変わったお見合い」だったのであろう。その後、満二氏の父が逝去したため、結婚式は翌年1910年2月10日に東京の満二氏宅で村田勤によるキリスト教式の司会で、新渡戸稲造も同席して行われた。満二氏30歳、貞子氏21歳での結婚だった。

満二氏は、結婚の前年1909年12月21日付けで文部省から鹿児島高等農林学校要員として農業経済及び植民政策の研究のため、ドイツ、イギリスへ3年間留学することが決まっていた。そのため、貞子氏は1910年5月14日に満二氏が神戸から出航するのを見送って東京の満二氏宅に戻るが、妊娠がわかり、岐阜の実家に戻って1911年2月5日に長女を出産する。

満二氏は留学中には貞子氏宛に珍しい本を送ってきていた。農業、文学、科学、宗教、哲学、美術の漢文、英仏独語の本、聖書はギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語などのものだったと、六女の吉村証子氏のエッセイ「子供たちは皆本好きに」（『満二著作集』、435-436）に書かれている。

#### 4. 鹿児島高等農林学校での満二氏

満二氏がアメリカ経由でヨーロッパ留学から帰国したのは1913年12月23日。帰国した満二氏はすぐに妻子を連れて鹿児島に赴いた。1914年1月23日に鹿児島高等農林学校教授に任命されている。同年1914年に第一次世界大戦が開戦、日英同盟により日本はドイツに宣戦布告。10月にマーシャル、マリアナ、カロリン諸島を占領し、臨時的治安維持のために軍政が敷かれ、1914年12月に臨時南洋群島防備隊条令が發布される。満二氏は軍政下の1914年12月にマーシャル諸島のヤルト島に出張し、豊富な資料や標本を持ち帰っている。

1921年6月に詞子先生が誕生した直後、1921年9月20日付けで満二氏は文部省督学官に任命される。督学官というのは1913年に視学官を改称した教育行政官で学事の視察・監督を行う。このため、満二氏は1921年に鹿児島から東京に移った。

満二氏は1928年に文部省督学官として地方出張の際、名古屋の徳川文庫で稀覯版の『斎民要術』を見つけ、数日間耽読にふけり、行方不明と騒がれたことがある。『斎民要術』は東洋の総合農書として最古のもので、日本の伝統農業に最も大きな影響をもつ古典である。戦後、東畑精一がこれを復刊し、邦訳は1959年度日経経済図書文化賞の最優秀賞を受賞している。

満二氏は1928年には督学官を辞め、九州帝国大学農学部教授に赴任し福岡に引越す。1936年から1938年まで九州帝国大学教授と鹿児島高等農林学校長を兼任で務めたが、1938年からは九州帝国大学教授と東京高等農林学校長の兼任となる。

#### 5. 東京高等農林学校での満二氏

以下は大西伍一の「自由と自治を守り抜かれた戦時中」（『満二著作集』、449-460）に

よって記す。

東京高等農林学校は東京帝国大学農学部の実科が1935年に独立したもので、「学理に偏せず実際に即して勤労することを重んじる」実学の校風が維持されていた。1939年には拓殖学科が創設され、外国語には英語、ドイツ語の他、中国語、ポルトガル語が加わり、満二氏の講義科目は、農業史、農業経済学、植民政策、農業汎論、農業教育、農村社会学と多岐にわたり、世界的な視野での講義は学生に好評だった。

校内において満二氏は夜間に郷土研究講話を開き、教養人としての学生育成に心をくだいた。講話筆記の校訂版が1943年に『農村史話』として刊行されている。また、灯火管制下でも上野図書館から借りだした本草書の写本に熱中し、『農家集成』、『有毒草木図説』、『草木奇品家種見』などを残している。

学生には「時事の報道に一喜一憂せずに勉強に熱中していればよい、文芸に親しむのもよい」と述べ、時には多摩川での水泳、山でのウサギ狩りなどに学生を連れ出したりもした。終戦近いころには学生・教職員を集め「どんな事態が起こっても軽挙妄動をしてはならぬ」と述べ、終戦当日は講堂で終戦の詔勅を拝聴、その後約2時間、新生日本の再発足のため青年学徒の任の重大さを説いた。

## 6. 鯉淵学園での満二氏

以下は渡辺善雄の『小出満二と農業教育』及び『満二著作集』によって記す。

満二氏は1945年12月5日に文部省に辞表を提出し、6日に茨城県内原町鯉淵の「全国農業会高等農事講習所」所長となる。この講習所は戦争によって荒廃した日本農業再建のために優れた中堅指導者を育成することを目的とした民間初の教育機関である。1946年（昭和21年）8月発行の『むら』の「鯉淵だより」によると、1946年度の本科（中等学校卒業程度の者に対し、3年間高等専門学校程度の教育を施す）の新入生は沖縄を除く全国からの応募者3,000名余から選抜された約200名であった。

詞子先生は1946年1月から1948年9月まで鯉淵学園で英語教育を担当し、月刊誌『むら』の編集に携わった。『むら』は農村文化向上に寄与する目的で刊行された月刊誌で、満二氏は1946年から1948年2月まで「戦争放棄」、「国際連合」など、その後は『鯉淵学園通信』の1949年7月の第1号の「創刊に」から「デモクラシーの神髄をつかめ」、「一陽来復」、第31号の「自己の行為に責任を持って」までの20編を寄稿している。

詞子先生も「さんばぎたの思ひ出」を『むら』の創刊号（1946年8月号）、『『猫』誕生記』を『むら』（1947年3月号）に寄稿している。

満二氏は鯉淵学園時代も水戸、下館、東京の古書店に機会あるごとに立寄り、大風呂敷いっぱいの本を持たされたと、西村典夫は「小出先生読書論（『満二著作集』、464-466）に述べている。

満二氏は1954年に体調を崩し、5月に胃の手術を受けたが、6月下旬には退院し、11月には喜寿祝賀会が行われ、1955年3月の卒業式、4月の入学式には滋味あふれる訓辞を述

べた。その後、胃癌再発のため容体が悪化し、5月29日に75歳で逝去。キリスト教式での鯉淵学園葬が行われ、勲二等旭日重光章が授与された。

1周忌に多摩墓地で埋葬式、続いて国際基督教大学で追悼式が行われた。なお、1985年6月2日には満二氏の30年忌の墓参会が催され、鯉淵学園の卒業生を中心に墓参の後、詞子先生宅で小出満二氏の偲ぶ会が開かれた。2005年5月29日には多磨霊園で50年忌の墓参と偲ぶ会が催され、鯉淵学園の卒業生20名、親族12名、九州大学で小出満二氏の講座を引き継いだ上野重義が出席している。

## 7. おわりに

小出満二氏の鯉淵学園葬の後、学長宿舍の留守番役を頼まれた元鯉淵学園学生の加藤整は満二氏の2万冊を超える蔵書の整理にあたった。

蔵書整理中に満二氏の卒業論文「但馬牛産論」のコピーが見つかり、執筆からほぼ100年ぶりに活字版（A5判、242頁、200部限定）が世に出た。

『農学・農業・教育論・小出満二著作集』は満二氏没後26年の1982年3月に刊行計画趣意書が回され、同年12月10日に出版された。

満二氏の蔵書は満二氏と縁の深かった以下の大学等に保存・管理されている。

- ・ 鹿児島大学「小北文庫」（洋書716冊）
- ・ 九州大学農学部「小出文庫」（654冊）
- ・ 東京農工大学府中図書館（1,451冊、洋書56%、和書44%）
- ・ 鯉淵学園（2,999冊）
- ・ 農学総合研究所（現農林水産政策研究所）（冊数不明）

## 参考文献

- 石渡 茂（2003）「小北文庫：オーストラリア・ニュージーランド・その他太平洋地域の研究の宝庫」（123-137）『アジア文化研究 Asian Cultural Studies』国際基督教大学報3-A International Christian University 3-A、29
- 大西伍一（1982）「自由と自治を守り抜かれた戦時中」、小出満二『農学・農業・教育論 小出満二著作集』（449-460）、農山漁村文化協会
- 小出満二（1982）『農学・農業・教育論 小出満二著作集』農山漁村文化協会
- 小出詞子（1991）『日本語教育とともに 小出詞子著作集』凡人社
- 加藤 整（2014）『日本農業教育の碩学 小出満二—その業績と追憶—』交友プランニングセンター、友月書房
- 加藤 整（2015）『日本農業教育の碩学 小出満二—その業績と追憶 補遺Ⅱ—』交友プランニングセンター、友月書房
- 加藤 整（2016）『日本農業教育の碩学 小出満二—その業績と追憶 補遺Ⅲ—』交友プランニングセンター、友月書房



## 第 2 章

---

# フィリピンでの小出詞子先生

鮎澤孝子

キーワード フィリピン 日本語教育 木村宗男 鯉淵学園 ミシガン大学

---

### 1. 小出詞子先生の誕生から大学卒業まで

小出詞子先生は1921年6月23日に鹿児島で誕生している。小出満二氏は1920年3月にシドニー大学から戻り、鹿児島高等農林学校に復職したが、1921年12月には文部省督学官に任命され東京・東中野に移り、1925年に双子の妹が誕生する。

1928年4月に詞子先生は東中野の桃園第二小学校に入学したが、満二氏が九州帝国大学教授に赴任して、福岡に転居したので、福岡女子師範附属小学校に転入、1934年4月に私立福岡女学院に入学した。しかし、4年後の1938年4月には満二氏が東京高等農林学校校長兼九州帝国大学教授に就任し、一家は再び東京に転居する。

福岡女学院で詞子先生と同級生だった岩永邦歌氏は詞子先生について「すばらしく頭がよく、包容力のある豊かな感性で私たち友人を包み込んでくれる人でした。遅刻の名人でしたが、あまり先生には叱られる様子はなかったように思います。1938年の秋の修学旅行で日光に行った帰りに東京駅で別れることになり、別れは涙でした。」と述べている。

詞子先生は1938年には日本女子大学附属女学校に転入し、1939年4月に東京女子大学に入学している。東京女子大学での同級生、村田千恵子氏は「入学式の式辞は二代目学長安井哲、卒業式の式辞は三代目学長石原謙から頂いたが、初代学長、新渡戸稲造の『犠牲と奉仕』の建学の精神が常に学内で意識されていた」と「告別の辞」『小出詞子先生追悼記念記録集』（2005年6月、22）で述べている。

詞子先生は東京女子大学では英語を専攻し、教員資格もとった。英語学、シェークスピア文学、神保格の「言語学概論」などを受講し、「言語学概論」を受講したことがきっかけで日本語にも興味を抱いた。1941年10月から大学の在学年限が半年短縮されていたため、1942年9月に大学を卒業する。

「太平洋戦争が始まって数ヵ月後であり、英語は敵国の言葉だからという理由で教えることも習うことも禁じられ、カタカナ語（外来語）も使えない状態だった。そんなときに、文部省の海外派遣日本語教師募集が大きく新聞に出た。そこでためらうことなく、文部省の募集に応じ、思いがけなく合格した」と詞子先生は記している（「日本語教師養成」遍歴）（『日本語教育』63号、42）。

## 2. 比島派遣日本語教師に応募

詞子先生は父が文部省の比島派遣日本語教師に応募することを二つ返事で許してくれたと述べているが、満二氏は当時、東京高等農業学校長であり、文部省の派遣日本語教師応募者を推薦する立場にあったようだ。

木村宗男氏は第2回海外派遣日本語教師としてフィリピンに行っているが、英語教師として勤務していた東京府立機械工業学校（現在の都立小金井工業高校）の校長に派遣前研修のために学校を休む許可をもらおうとしたところ、校長からは「もし教職員が志願してきたら、許可してほしいと通牒が来ているんだよ。あなたも言ってくれば推薦にしたのに。」と言われたと述べている（「木村宗男先生インタビュー」『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』2000年、233-282）。

1942年8月19日に「南方諸地域日本語教育並日本語普及に関する件」の閣議決定が発表され、文部省が「南方派遣日本語教育要員養成所」を開設し、日本語教育要員募集を開始した。「南方派遣日本語教育要員」は陸軍属、陸軍司令官として、発令された後はすべて軍の命令に従う。

講習は南方派遣日本語教育要員養成所で行われた。詞子先生らが受講した講習は1942年11月14日から12月21日まで、及び、その後5日間の国民錬成所での合宿錬成を含めて、計6週間の講習であった。この第一期修了者は計69名、そのうちの22名が女性で、詞子先生もその一人だった。

第1期修了者は日本語教育要員の第1陣として陸軍省の発令で1943年1月にフィリピンに派遣された。木村宗男氏は第1期の修了者である学生時代の友人から南方派遣日本語教師の話聞いて第2期の募集に応募した。第1期・第2期のフィリピン派遣日本語教師総数は約150名である。

詞子先生は最年少の女性初の陸軍属判任官で月俸60円だった。木村宗男氏は派遣前に公立学校の英語教諭の経験が4年あり、英語教諭としての月給は95円だった。陸軍の発令では月俸110円で、公立学校からの月給95円は家族に送られた（木村宗男「戦時南方占領地における日本語教育」『講座日本語と日本語教育15』1991年）。

## 3. 南方派遣日本語教育要員養成所における養成講習

南方派遣日本語教育要員の1期生、詞子先生らが受講した講習は5日間の合宿錬成を含めて6週間だった。木村宗男氏ら第2期生は3週間、第8回まで行われた講習の期間は長くて6週間、短くて2週間だった。派遣された者は半数が現職の小・中・高校の教員、半分が一般人だった。

松本典子（『日本語』第3巻12号1943：69）によると「表1：第6回日本語教育要員の養成講習の講義題目及び講師」はp.18の表1の通りである。なお、この第6回の講習は25日間だった。



詞子先生は派遣前講習について「長沼先生との出会い」『日本語教育』19号（1973年5月、8）で以下のように述べている。「文部省が東南アジアに派遣する日本語教師を公募した時、私は日本語教育の問題点も分からず飛びついた。三十年近く前のことで、私は愛国心にもえるうらわかい乙女(?)だった。その時の試験官の一人の長沼先生は、ダブルのよく似合う潇洒な紳士として印象に残った。「『まどがあけてある』と『まどがあいている』の違いは?」と聞かれてマゴマゴしたことは今でも忘れられない。それが先生との最初の出会いで、それがその後の私の進路をきめたと言っても言い過ぎではない。…長沼先生から「小出さんは鼻濁音がでませんね。気を付けたほうがいいでしょう。」と指摘され、それまで自分の発音は標準だと信じていた私はびっくりして直そうと努力した。(後年、鼻濁音は東京でも消える傾向があると知って、損したような気がした。)」

#### 4. フィリピン到着

以下は主に「木村宗男先生インタビュー」(『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』2000年、233-282)によって記す。

木村氏らは文部省の派遣前講習が3月に終了してから9月の渡航までの6か月は国内待機だった。そのため、フィリピンに到着したのは1943年10月で、第1陣の日本語教師がすでに小学校やハイスクールで日本語を教えており、木村氏は前任者がバギオに転任になった後のマニラの市役所で教えることになった。

現地での教育方針は、文部省の教育課長と総務部長との相談で、まず、小学校から開き、実業系のハイスクール、高等専門学校、大学という計画であった。閉鎖されている小学校を開くのに、教育は全て国語、つまり、タガログ語をもってするとし、タガログ語と日本語を公用語とすることと決められた。しかし、英語を当分の間許すという軍からの許可も出されていた。

小学校を開くには週に2時間以上日本語を教えることが条件となっており、日本語を教えられる教師がいないと学校が開けない。日本語教員養成が急務であり、地方でも1942年の終わりごろには教員訓練所を設けていた。すでに、日本軍兵士による散発的な日本語教育も行われていた。

また、日本から日本語教員が派遣される前に「カトリック女子部隊」というカトリック修道女と信者19名が徴用され、フィリピンに派遣されていた。一行は1942年12月末にフィリピンに到着し、カトリック教会、カトリック修道院、カトリック系の学校、小学校、ハイスクール、名門ミッションスクールに配置されていた。フィリピンにはカトリック教徒が多いので、修道女を通して日本を理解させ、日本語教育を円滑に進めようという教育課長の企画であった。派遣前に文部省による錬成講習はあったが、日本語についての講習は受けていない。主にフィリピン人シスターたちに日本語を教えたが、中には政府高官の家庭教師をした人もいた(「日本軍占領下のフィリピンにおける日本語教育—『さむばぎいた』を通して」『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』2000年、171-181)。

表1：松本典子（2008）『総力戦』下の人材養成と日本語教育』82

講義題目	講師肩書	講師名
大東亜文化建設/理念	文部省総務局長	藤野 恵
興 亜 精 神	文部省数学局長	近藤寿春
日本文化史要説	司法省嘱託	渡辺 保
日 本 語 要 説	第一高等学校講師	岩淵悦太郎
日 本 文 法 概 説	東京帝国大学講師	東条 操
標 準 語 演 習	東京帝国大学講師	神保 格
日本語教育概説	文部省数学局国語課長	大岡保三
日本語普及史概説	文部省図書監修官	釘本久春
日本語教師論	東京女子大学教授	西尾 實
日本語教授法概説	日本語教育振興会総主事	長沼直兄
日本語の諸問題	(元・奉天大出日本語研究所所長)	大出正篤
大東亜諸言語要説	元帝国大学教授	小倉信平
大東亜近世史要説	民族研究所員	岩村 忍
大東亜文教政策	大東亜事務官	相良惟一
南方民族要説	民族研究所員	岡 正雄
南 方 衛 生	陸軍軍属中佐	深田益雄
南 方 事 情	陸軍司政長官	郡司喜一
同	陸 軍 少 佐	松尾次郎
同	大使館調査官	関野房夫
同	東京帝国大学講師	中島健蔵
訓 話	文部省総務局渉外課長	高木 覚

1943年には文部省の日本語教師が派遣されて、1944年3月までにはシスターたちは帰国したが、木村氏はまずシスターたちを配置したことは、非常に効果的な中継ぎであったと記している。

## 5. フィリピンでの日本語教育

「小出詞子年譜」(『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』1997年、15-24)によると、詞子先生は1943年1月の判任官発令と同時にフィリピンに派遣された第1陣の69名の一人だった。第1陣の半数がマニラで仕事をし、他の半数はバギオ、ダバオなど各地の大きい都市に送り込まれた。マニラの女性教師は当初はアテネオ大学付属小学校を改造した宿舎にいたが、後にセントルイス・ホテルに移った。

詞子先生はまずマニラのサンアンドレス師範学校付属小学校で現地の日本語教師のため半年モデル授業を担当し、その後、ラコンソラシオン大学、ホーリーゴースト大学で日本語教育に従事した。師範学校での授業の内容については以下のように記している。

「師範学校では、小学生に日本語のモデル授業をし、それについて先生たちと質疑応答をするという形をとった。また、授業を見学した現地の先生たちにも小学生に与えたのと

同じ教科書を使って日本語を教えた。教科書は片仮名書きの『ハナシコトバ』、漢字仮名まじりの『日本語讀本』（巻一）を用いた。先生たちは日本の軍関係の人たちや日本から来ていたカトリックの宣教師たちに教わり多少は日本語の知識をもっていた。…小出のクラスは小学生約30名で、毎日1時間教えた。日本語を習う先生たちのクラスも約30名であった。…フィリピンの童話のなかに『猿蟹合戦』に似た話があり、日本語学習者の合同発表会のとき、タガログ語から日本語に訳したフィリピンの話と日本の話の両方を学生に演じさせた。」

多仁安代は「日本軍占領下のフィリピンにおける日本語教育—『さむばぎいた』を通して—」（『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』2000年、171-181）に『サムバギタ』シリーズや日本語教育要員へのインタビューを通して得た当時の日本語教育の様子を以下のように記している。

「日本軍は日本語普及策の一環として1943年8月に『日本語週間』を設けた。ヴァルガス行政長官は「全フィリピン人はぜひ日本語を学ばなければならない。…これによって日本が大東亜の盟主であることを認識することは、単に官吏ばかりでなく一般市民にとっても必要である」と述べ、『トリビューン』と『サンデー・ニュース』はカナ文字新聞を発行、マニラ放送局は20日から日本語講座を放送することになった。日本語週間の行事として、各学校で日本語学芸会を開催したり、日本語教育課の主催でメトロポリタン劇場において子供から成人にいたるまでの日本語大会を開催したりした。」

日本語が各学校で必修となり、日本語学習者は公私立の小学生から大学生にまで広がり、その他に教員訓練所、日本語専門学校、公官吏訓練所、警察官訓練所、市役所の職員も日本語教育を受けた。現地の日本商社も進んで雇用者を日本語学校に行かせた。日本語ができる者が優遇されたので、学習態度は必ずしも受け身とは言えなかった。現地人教員は教員訓練所で4か月の講習を受けただけで、教壇に立った。日本語教員検定試験も実施され、初級に合格すると小学校、中級に合格すると中学校の教員資格が与えられた。短期間の講習を受けただけで教壇に立てたのは、すでに英語教育の経験を持っていたためだろう。詞子先生も「一般的に言って、フィリピン人日本語学習者の発音はよい。これは外国語に慣れているからであろう。」と述べている。

詞子先生は日本語教科書として『ハナシコトバ』を使用したと述べているが、木村氏も市役所での成人教育としての日本語教育で『ハナシコトバ』を使用していた。「上・中・下」の3冊があり、片仮名の分かち書きで、延ばすところは長音記号、「コレワ」の「wa」はワ行の「ワ」で書かれていた。『ハナシコトバ』の教授者用マニュアルも作成されており、「上・中」は1941年、「下」は1942年に日本語教育振興会から刊行されている。文型教育を目標とした教科書で、西尾實と長沼直兄がマニュアルを執筆している。

木村氏はマニラ放送局の日本語講座についても触れている。詞子先生と同年の女性教員がラジオの日本語講座を受け持っており、英語で解説する。毎回15分ぐらいから20分ぐらいの日本語講座の原稿を読むのを担当の司政官が聞きながらオーケーを与えていたと木

村氏は述べている。

木村氏は市役所では1クラス30名ぐらいで教えていた。フィリピン人は語学が好きで、「英語、スペイン語、タガログ語、ビサヤ語ができるので、日本語は5つ目だ」と自慢をする学習者もいた。市役所では助手をつけてくれたが、すば抜けてよくできる女性で、出席をとったり、タガログ語で注意を与えたり、説明が徹底しないところはタガログ語での説明を加えたりもしていた。

木村氏は、教室外でもできるだけ日本語を使うようにしていた。学習者たちは日本語教師たちに友好的で、ピクニックをしたり、海でボートに乗って遊んだり、誕生日のプレゼントをくれたりし、どの教師も授業は和気あいあいと楽しかったと述べている。

## 6. 戦況の悪化・終戦・帰国

1944年9月21日にマニラ市は大空襲を受ける。木村氏によると、それまでに、日本語教員、そのほか各省庁からの軍属が動員されて、司令部の飛行場の飛行機をカバーする壕を作りに行っており、状況が悪いことは分かっていたが、9月21日には何十機も編隊でマニラ市上空を通過し、港の方に行くと回って戻ってくる。木村氏が「終わりです！」という教室にいた官吏たちは階段を駆け下り、地下室に逃げ込んだ。木村氏は市庁舎の玄関に潜んで空襲の止むのを待ち、教育課に戻った。

9月21日以降連日マニラの空襲が続き、日本語教育要員は全面的に編成替えされて、木村氏はマニラから東北部ルソン地方パヨンボン出張所に転出となった。パヨンボンは穀倉地帯であり、まだ、空襲もなかったが、その後、山中での敗走生活となり、1945年8月15日に空からビラが降ってきて終戦を知る。捕虜収容所で1年3か月過ごし、1946年12月に広島に戻った。疎開していた家族も罹災して子供二人を亡くし、母親を被爆で亡くしたが、1947年には東京の新制中学の英語教師の職についた。

詞子先生は1944年10月に比島政務班附となり、日本大使館文化部で文化活動に従事。11月末には教育課長の「内地勤務を命ずる」という命令により、女性教員は全員急遽帰国することになり、男性教員は荷物運びで駅まで女性教員を見送り、女性宿舎の後片づけを行った。

帰国した詞子先生は1945年1月に文部省教学局の非常勤、5月に文部省教学局事務嘱託（給月手当金75円）となり、中国向けの日本語テキストをフィリピン向けに変えるため地名や人名をフィリピンのものに変える仕事を担当した。

1945年10月に文部省教科書局事務嘱託となったが、1946年1月30日に辞任し、茨城県水戸市郊外に満二氏が創設した「鯉淵学園」の講師になり、英語を教えながら、満二氏が刊行した雑誌『むら』の編集に携わった。1946年8月1日発行の創刊号に詞子先生は「さんばきたの思ひ出」を投稿している。詞子先生がマニラで親しく交際していた学生宛の手紙の形で、その学生の家族と過ごした楽しい思い出、急に帰国を命じられて、爆音、空襲警報の下、涙を流しながら別れを告げたことなどが綴られており、アジアの国々を戦

争に巻き込んだ日本の責任の罪を反省し、これからは世界平和のために尽くす覚悟であると述べている。

詞子先生は1947年4月からは連合軍総司令部民間情報教育部顧問として、通訳や雑誌の検閲なども行った。1948年9月に戦時中文部省内にあった日本語教育振興会を引き継いだ財団法人言語文化研究所附属東京日本語学校が創設された。理事長・校長は長沼直兄で、詞子先生は講師として招かれて日本語教育に従事することになった。学習者のほとんどが中国全土から引き揚げてきたキリスト教宣教師で、そのうち多くが日本に留まることにしたため学習者が急増していた。なかには家族ぐるみで日本語を学ぶものもいた。

しかし、詞子先生に1950年6月に第1回ガリオア奨学金によるアメリカ留学の機会が与えられ、東京日本語学校を退職。8月までイリノイ大学でオリエンテーションを受け、その後、ミシガン大学大学院研究生として約1年間 外国人のための英語教育を勉強した。ラドーの『外国語としての英語教育』を受講し、チャールズ・C・フリーズ、ケネス・L・パイクの指導も受けた。

1952年4月に詞子先生はICUキャンパス内のロバート・H・ゲルハルト先生のお宅で面接を受け、ICUの英語研修所の助手に採用された。1953年4月にICUが正式に開学し、詞子先生は教養学部講師に就任。留学生受け入れに伴い、日本語教育に従事することになり、日本語集中講座 Intensive Course を開始する。

1955年9月にICUが日本初の Junior Year Abroad Program (1年間留学制度) を実施する。1959年4月詞子先生はICU 教養学部助教授に昇任。1959年6月ミシガン大学の奨学金を支給され、ミシガン大学大学院に留学、言語学専攻。英語の分析方法で日本語を分析。米国内務省主催日本語教育専門家会議に出席。日本語教師養成、日本語教科書作成を本格的に行うことを決意した。

1960年8月ミシガン大学大学院修了。M.A.in Linguistics 取得。

1961年4月ICUで「日本語教員養成講座」設立が認められ、日本語教育専攻が認められた。

## 参考文献

- 『日本語教育 19号』(1973) 日本語教育学会
- 『講座日本語と日本語教育 15』(1991) 明治書院
- 『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』(1997) 凡人社
- 『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』(2000) 凡人社
- 『オーストラリアの日本語教育と日本の対オーストラリア日本語普及—その「政策」の戦間期における動向—』(2004) 嶋津拓、ひつじ書房
- 『小出詞子先生追悼記念記録集』(2005) 記録集編集委員会編
- 『「総力戦」下の人材養成と日本語教育』(2008) 松永典子、花書院



## 第 3 章

---

# 小出詞子先生と日本語教科書

北 條 淳 子

キーワード 松宮弥平 長沼直兄 ハロルド・E・パーマー A. P. マッケンジー  
『Modern Japanese for University Students Part I、II、III』

---

### はじめに

こんもりと繁る深い緑のなかに点在する白い学び舎、静かな風景の佇まいは、半世紀を経た今日でもそのままである。国際基督教大学（以下ICUとする）出身でない私が今回『小出詞子先生と日本語教育・教員養成』執筆の一員として参加できたのは、ICU創設の翌年から11年間日本語教育に携わっていたことによる。大学設立当初、大学生向けの日本語教科書作成は急務であった。当時ICUの日本語教員は自分の授業が終わった後、教科書作成に参加した。小出先生を中心としてほとんどが助手の若い教員によって進められるその仕事は、和気あいあいの雰囲気であった。全体の構成、企画は小出先生がお持ちだった。当時を知る人も少なくなり、結局私が初期のICUの日本語教科書についてお引き受けすることになったが、なにせ半世紀以上前のことなので、一か月に一回の小さな集まりが、上野田鶴子さん、中村妙子さんとともに続けられ、みなさんの記憶を繋ぎ合わせ、いろいろな資料に当たって、まとめ上げるという形になった。

### 1. 明治初期に来日した欧米人の日本語教育についての活動

今回第二次世界大戦後に創設されたICUに日本語・日本語教育コースを創設された小出先生の足跡をたどろうとしたが、日本の日本語教育を遡っていくと、まずは明治期以後基督教普及と日本語教育との関わりに直面することになった。近年日本国内の日本語教育において、キリスト教宣教師の果たした役割には大きいものがある。

1853年のペリー来航に始まった開国日本に多くの欧米人が来日し、19世紀後半から20世紀前半にかけて非常に多くの日本語関係の著書が出版された。著者の多くが宣教師であったため、その多くは、実際に布教に役立つもの、口語を教材とした教科書、口語の文法書などであった。布教地によっては、方言に関するものなどもあって、いかに宣教師が日本人の日常言語を研究していたかがわかって興味深い。

特に、ジェームス・カーティス・ヘボン（1815～1911）著『和英語林書林』第3版に出現した「ヘボン式ローマ字綴り」は、修正ヘボン式ローマ字の形で、現在でも日本国

内で一般に使用されている。ICUで最初日本語教科書作成を始めるときに、小出先生は、ローマ字の部分で「修正ヘボン式ローマ字」にするか「訓令式ローマ字」にするかで検討を重ねられたが、結局一般に使われている「修正ヘボン式ローマ字」ではなく「訓令式ローマ字」を選択するという決断をされた。それは一重に、日本語の発音の表示を分かりやすくしたいという学習者重視の視点からの選択であった。それまで日本の外国語学習では一般に、音声教育はあまり重視されていなかった。それは、それまでの文法・翻訳法での学習が外国語学習の中心にあったことによる。しかし、そのころに始まった音声学、音韻論の急速な台頭を感じ取られた小出先生は、新しく作られるICUの日本語教科書では、音声教育、会話教育に重点をあて、その他の面でも日本語をいかに簡潔にわかりやすく表示するかについて心を砕かれたのだと思われる。

20世紀初頭、それまで日本各地で主としてキリスト教宣教師を対象として個人教授の形で行われていた日本語教育が、学校組織の形へと変わっていった。その最初が、東京外国語学校などの英語講師であった松田一橋（1869～1908）が東京銀座のメソジスト教会の中に開校した日本語学校である。松田は、言語教育研究者フランス人フランソワ・グワン（1831～1896）やドイツのマキシミリアン・ベルリッツ（1852～1921）の提唱するナチュラル・メソッドを自らの教育に取り入れた。ナチュラル・メソッドは、外国語学習は幼児が母語を修得するときのように簡単な言葉を繰り返すことにより自然に学ぶことができるという考え方に基づいている。それは、以前の「文法・翻訳法」といわれる、文章語を対象とした文法・語彙学習と母語翻訳を中心とする外国語教育とは異なる実践的な教授法であり、そこには、次の世紀に出現する新しい外国語教授法に向かう発展、変化の兆しが見られるのである。

## 2. 松宮弥平

19世紀後半から20世紀前半にかけて、日本国内の日本語教育の第一人者であった松宮弥平と小出先生との直接の関わりはないが、小出先生と関わりの深い長沼直兄（後述）が、松宮弥平の跡をたどるという形で、日本語教育の場で活躍したという点、また、松宮が自らの教授経験から作り上げた独自の教え方を考案し、学習者の母語を使用しないことを特徴とする教授法を守り続けたという点、また大々的に日本語教師の育成を行い、日本語教授法の研究を行った先人であるということなどから、ここに取り上げることにする。彼の教授法は、ナチュラル・メソッドから発展した、学習者の母語を使用しないで当該言語だけで教えるという直接法に近いものであった。

松宮弥平（1871～1946）は松田一橋と同時代の人であった。キリスト者であり、若くして外国人宣教師に日本語を個人教授で教えた経験をもつという点は共通している。関西生まれの松宮は、同志社大学で神学を学ぶつもりであったが、志を変え、遠く離れた前橋の旅館の婿養子となり、そこで、外国人宣教師などに日本語を教えはじめた。前橋の近くには、前橋教会、安中教会があり、そこではキリスト教の布教が活発に行われており、また、ほど近い富岡の製糸工場に外国人技術者がおり、日本語を学びたい外国人が多いた



と思われる。松宮は、日本語学習入門期に取り上げる簡単な日本語を、文字を通さずに音声だけで導入した。そして、復習を重視し、模倣を繰り返し、そのあとで、語彙や表現の他の語による代入、転換などを繰り返し行うという方法をとった。また、カードを多く使い、その日の学習事項、注意事項などを細かくカードにして、学習者一人一人に渡すという丁寧な指導を行った。松宮の教授法は評判を呼び、遠方からの参加者もあった。松宮は、自らの教授経験から独自の教授法を作り出しそれが評判を呼んだのだが、一方で、学習期間の長さ比べて語彙や文法項目の習得が少ない、学習速度が遅いという不満が出ることもあった。それでも松宮自身は自らの方法を変えることはなかった。

松宮は、1912年宣教師団の要請により上京、その翌年神田錦町の東京外国語学校内に新設された「日語学校」の教師となった。日清、日露の戦争に勝ち、勝利に沸き立っている日本の中で、在日宣教師同盟は「日本における平和運動の促進を希求し、平和と仲裁に対する国家的、世界的な組織の運動に関わる」という決議を第6回総会（1907）で行っている。「日語学校」は、当初3年間の課程であり、次第にその規模を広げていった。松宮弥平の独自の細やかで丁寧な教授法は、規模が大きくなってゆく「日語学校」では適合しにくくなり、彼自身教務主任の地位にあったにもかかわらず、1921年に「日語学校」を辞し、東京神田に自分自身の学校「松宮日本語学校」を設立した。50歳であった。

一方「日語学校」は関東大震災の影響も受けながら、単に日本語を教えるだけでなく、日本事情、日本文化をも伝える、総合的な日本研究センターの様相を呈するようになり、また内村鑑三なども講師として迎えるようになって、校名を「日語文化学校」と変更した。松宮が辞したあと、「日語文化学校」は、ほとんどの学習者が理解できる英語を媒介語として日本語を使用するという教授法の変更を行い、学習者は欧米人が中心となっていった。

「松宮日本語学校」が設立されたころ、A. P. マッケンジー（後のICU教授、後述）がミッション活動のために三重に来日し、その2年後に関東大震災が起こっている。

松宮弥平のもう一つの功績として、1914年33歳から始め、その後毎年続けられた日本語教授法講習会の開催がある。松宮弥平の子息松宮一也によると、受講者は総じて1,000名になったという。また、松宮弥平は、『日本語会話教本巻1』や新約聖書の物語に基づいた数多くの日本語教科書も著しており、その功績は大きい。

### 3. 長沼直兄とハロルド・E・パーマー

第二次大戦後日本語教育の場で「ナガヌマ」の本といえば、あの分厚い表紙の『改訂標準日本語讀本』を思い浮かべるほど著名であった教科書の著者である長沼直兄（1894～1974）は、群馬県伊勢崎市近郊に生まれ、1915年東京高等商業学校（現在の一橋大学）を卒業後貿易会社に勤務、その後、1921年たまたま日本語教師の代行を頼まれたことがきっかけで、神田三崎町の「日語学校」の臨時講師となった。それは、松宮弥平が教務主任として勤務していた「日語学校」を辞すのと入れ替わるような形であった。長沼は「日語学校」の松宮の授業を見学しているが、教授法を異にしている2人が親しくすることは

なかったようである。長沼は「日語学校」の講師となった翌年、文部省の英語教育顧問としてイギリスから来日したハロルド・E・パーマー（1877～1949）の連続講演を聴講、講演のためのデモンストレーションの手伝いなどを行っている間に、パーマーの理論に大きな影響を受けた。その時、長沼27歳、パーマー45歳であった。1923年にはパーマーを所長とする英語教授研究所が文部省内に設立され、翌年長沼はその研究員となり、数多く出版されるパーマーの英語教科書、教材の作成に協力した。長沼にとってパーマーとの出会いは、その後の長沼の日本語教育者としてのたどる道を決定づけるものであった。

ロンドン生まれのパーマーは、世界的な英語教育学者、応用英語学者、音声学学者であり、10年以上日本の文部省に所属し、日本の英語教育界の指導的存在となった。そして、彼の理論は当時の日本語教育界にも少なからぬ影響を与えた。

オーラル・メソッドと言われるパーマーの理論は、スイス、ジュネーブ大学のフェルディナン・ド・ソシュール（1857～1913）のラングとパロールの理論の影響を受けたもので、音声や文字の連続である「語」とその意味とを直接的に結びつけることを目指す。言語には2つの面があるという。その一つは、言語は社会的規則・慣習として体系化された規範であるという面であり、もう一つは、その体系の上に立って実際の場面で個々人が言語を運用するという言語活動の面である。パーマーの外国語教授法理論によると、言語活動には、次の3つの段階があるという。1) 言語記号の意味を知ること、2) その言語記号とその意味との融合を図ること、3) 実際の場面でその言語記号が適用できるようにすること、その3つであり、そして学習は音声言語によることを先行し、次の5つの順序、1) 耳による観察、2) 口まね、3) 口ならし、4) 意味づけ、5) 類推—応用、この順序で行われるべきであるとしている。この明快で実用的な教授法が、当時の文法・翻訳法に終始していた日本の外国語教授法分野に、大きく影響を与えたことは想像に難くない。

一方、長沼は、パーマーの勧めで米国大使館の日本語教官となり、本国から日本語を学習するために派遣されてくるアメリカ軍人に日本語教育を行うかたわら、彼自身の日本語教科書『改訂標準日本語讀本』を作成した。それまでそこで使われていた教科書は小学生向けのもので、アメリカ軍人を対象とする教科書としては適さなかったからである。『改訂標準日本語讀本』巻一～巻七は1931年から1934年の間に開拓社から非売品の形で出版された。その時日本の米国大使館で学んだアメリカ軍人によってアメリカに持ち帰られた『改訂標準日本語讀本』は、第二次大戦中には米国陸、海軍日本語学校で教科書として用いられ、敵国である日本で作成されたものでありながら優れた教科書として絶賛された。

終戦後日本に来たアメリカ進駐軍が、戦時中米国などで著者の了解を得ずに使用したそのお返しとして紙などを提供してくれて、あのような立派な体裁の『標準日本語讀本』が、戦後間もない物資の少ない日本に存在することになったそうである。

第二次大戦中長沼は、文部省の臨時日本語教科書編集委員となり、また文部省の外郭団体である言語教育振興会の理事もつとめている。1942年には東京女子大学で「日本語講座」の講座をもち、当時当大学の学生であった小出先生が聴講している。また、長沼が文

部省主催の南方派遣日本語教員養成講座の講師になったとき、大学卒業直後の小出先生は、その講座を受講している。長沼48歳、小出先生20歳であった。日本は、戦時体制がますます色濃くなりつつある時期であり、また、戦いで勝ったアジアの土地に日本語を根付かせようとしていた時期でもあった。

長沼は、戦後1948年、財団法人言語文化研究所附属日本語学校を東京神田の日本キリスト教団三崎町教会内に開校し、その後1952年には渋谷南平台に移転した。その間に『Basic Japanese』、『改定標準日本語讀本』の巻一から巻八まで、その他の付属教材、『改訂読本 Word Book』、『改訂読本漢字ブック』、『Grammar and Glossary』などを次々に出版、いわゆる「長沼読本」とその付属教材の最盛期をつくりだした。その付属教材の豊かさは当時目を見張るものがあった。パーマーの理論を基盤とし、英語を媒介語とした多様な付属教材をもつ『標準日本語讀本』は、欧米系学習者には便利で優れた日本語教材として、高い評価を得ていた。

#### 4. A. P. マッケンジー

在日宣教師D. R. マッケンジーの子息として三重で生まれたA. P. マッケンジー(1889～1960)は、カナダ、トロントのヴィクトリア大学を卒業、イギリス、ケンブリッジ大学でM.Aを取得、再来日した。その後東京、愛知、三重などでミッション活動を行うかたわら、関西学院大学で商業英語、産業心理学、心理学特殊講義などの講義を担当していたが、その後国際情勢の悪化に伴い、カナダに帰国する。

戦時中は、カナダの陸軍中佐として、ハーバード大学の米国海軍言語学校で、アメリカとカナダの軍人に日本語を教授、また、バンクーバーのカナダ陸軍言語学校ではその責任者に任命されている。

戦後、関西学院大学に帰任、日本における新制大学発足後、経済学部を中心に教鞭をとる。みずから「浅間健児」と署名し、江戸っ子ばりの巧みな日本語を操り、新制中学の英語テキストの編纂に参加、朝日放送「英会話」の講師もつとめた。

そして、1952年カナダ・ミッション・ボードの代表として、ICU設立委員会からの招へいを受け、東京三鷹に居を移し、ICU創立の重要なメンバーの一人となった。ICUの日本語コースが設立された初めの時期に、日本語コースの責任者としてマッケンジー教授の名前が小出先生と併記されている。戦時中カナダの陸軍中佐であり、陸軍語学学校の責任者であったマッケンジーが、過去の経験を生かしてICUの日本語コースのプログラム作成に関わったことは想像に難くない。戦時中のアメリカ、カナダの陸、海軍の語学学校のプログラムは、ICUの日本語インテンシブ・コースのプログラム作成に大きく役立ったといえるのではないかと思われる。

それにしても、ICUでは、マッケンジー教授の巧みな日本語を聞いた人はいなかったのではないか、だれも彼がたくみな日本語を話すなどは、想像だにできなかったのではないかと思われ、病のため早くにICUを去られたことは、まことに残念である。

## 5. ICU創立以前の小出先生と日本語教育

小出先生は、1921年キリスト教者小出満二氏夫妻を両親として、鹿児島市に生まれ、そこで育った。そして父満二氏は、30歳でヨーロッパに留学し、38歳で2年間オーストラリアのシドニー大学に交換教員として赴任している。ヨーロッパ留学では特にデンマークの農業教育、子女教育の研究に専念し、またシドニー大学では、マードックによる日本語講座の創設に協力、貢献している。このような父満二氏の仕事ぶりや生き方は、その後の小出先生の生き方にいろいろな形で影響を与えていたのではないかと思う。やがて17歳で東京女子大学文学部英文学科に入学、そこで東京文理大学教授で東京女子大学に出講していた神保格の「言語学概論」を受講、また当大学の非常勤講師であった長沼直兄の「日本語講座」を聴講している。当時世の中は、日清、日露戦争の勝利に沸き立ったまま日中戦争に突入していた。戦時中ということで、大学は半年の繰り上げ卒業を行い、小出先生は20歳で大学を卒業した。そして、希望者600名の中から選ばれた60名の受講者の一人として、第一回文部省開催南方派遣日本語教員養成講座を受講、長沼直兄はその講座の講師の一人であった。小出先生は、翌年には陸軍省管轄の女性初の判任官としてフィリピンに派遣され、フィリピンの小学校で直接小学生に日本語教育を行ったり、現地の日本語教師のためのモデル授業を担当したり、いくつかの大学で日本語教育を行ったりしている。当時戦勝国であった日本国がフィリピンで行った日本語教育の教科書は、日本政府指定の『ハナシコトバ』『日本語讀本卷一』など、また「さるかに合戦」のように現地でも同じような内容の話のあるものなどであった。このような南方アジア諸国に対する仕事は、当時は国家的事業であったので、日本から、東条英機、山田耕筰、東畑精一、三木清、蠟山正道などが視察に訪れた。新渡戸稲造も台湾を訪れている。しかし2年後には戦時情勢は悪化し、女性教師たちは日本への帰国を余儀なくされた。帰国後小出先生は、文部省教学局の事務嘱託として、アジアの国々のための日本語教科書の編集などを行い、1945年終戦になってからは、英語の知識を生かした検閲という仕事にも携わっていた。先生の日本語の幅広い研究はこの頃に始まったようである。先生は日本語（当時は「国語」と呼ばれていた）研究の歴史、日本語教育の歴史、音声、文法、方言などの分野で研究を重ね、学会発表などを行っている。

日本が終戦を迎えた1945年の翌年に国際基督教大学建設委員会がアメリカに発足、1947年にはJ. A. マックリーン牧師、P. デイッフエンドルファー博士の呼びかけで米国に北米教会連盟協議会、北米外国宣教師協議会合同の「日本基督教大学設立委員会」が発足、1948年には国際基督教大学建設後援会ができ、募金運動が日本国内外で開始され、ニューヨークには「日本国際基督教大学財団」が設立された。そして、建設委員会発足7年後、1953年に学校法人国際基督教大学設置が認可され、初代学長湯浅八郎を迎えて、国際基督教大学教養学部が開学した。本大学開校は、米国および日本の基督教関係者の甚大な協力があってのことであった。

その頃、戦時中アジア地域の日本語教育を行っていた日本語教育振興会は解体され、その事業を引き継ぐ形で長沼直兄が、1948年財団法人言語文化研究所とそれに附属する日本語学校を設立した。そしてそこの講師の一人として小出先生を迎えている。26歳から2年間小出先生は「東京日本語学校」の講師であり、その間に教科書として『改訂標準日本語讀本』を使っておられたと思われる。ICU日本語コース発足当初まだ独自の教科書が作られていなかった時、小出先生が長沼の『改訂標準日本語讀本』をメインに使うことに決められたのは、先生がこの教科書についてよくご存じだったことにもよるのではないかと推察される。そして2年後、小出先生は第一回ガリオア奨学金の給付を受けて、東京日本語学校を辞し渡米、ミシガン大学の大学院生として、外国人のための英語教育、教授法を研究された。研究生の中にはのちの東京大学言語学教授服部四郎もいた。当時のミシガン大学は、戦時中からすでに外国語教授法理論のメッカの様相を呈し、チャールズ・C・フリーズ、ケネス・L・パイク、ロバート・ラドーなどの最高の言語研究者、言語教育・言語教授法研究者が名を連ねていた。小出先生は、その時フリーズやラドーの講義を聴講し、指導を受け、当時最先端の語学教育の理論に接するという貴重な経験をされた。

当時アメリカでは、インディアンの言語の解明、研究をきっかけに、構造言語学と行動心理学を背景とするオーディオ・リンガル・アプローチが言語教育の主流となっていた。言語は構造であり、本質的に音声であり、型があり、対立からなるという構造言語学と、言語習得は習慣形成の過程であるという行動心理学の考え方は、そのまま言語教育に応用され、口頭言語の重視はもちろんのこと、文型練習、ミム・メモ練習すなわち模倣暗記が教育現場で実行され、教師の発声やテープのモデルを復唱するランゲージ・ラボが必須のものとなっていた。

この留学の2年間は小出先生にとって、その後のICUでの教育の大きな糧となったにちがいない。そして、2年間のミシガン大学での研究生生活を終え、ただちに1952年30歳で国際基督教大学創立直前の「英語研修所」の助手として仕事をされることになった。

同年、長沼直兄は財団法人言語文化研究所附属日本語学校を東京渋谷の南平台に移転し、戦後の日本での日本語教育の歴史が大きく花開くことになる。しかし、一般には、当時日本語教育の仕事はあまり知られておらず、生涯を託する仕事とは考えられていなかった。いつかは消えてしまう仕事かもしれなかった。当時の日本語教師は、いつか他の仕事を見つけなければならないと思いながら仕事をしていた。にもかかわらず、日本語を教える仕事はまことに楽しいものであった。授業現場で起こった様々な問題の解決や学習者からの質問に対する答えにすぐに役立つような文献はほとんどなく、教師自身で手早く解決しなければならず暗中模索の連続であったが、その度に新しい発見が生まれ、それが教師を勇気づけた。

## 6. ICU創立当初の小出先生と日本語教育

ICUでは、創立以前から日本語教育のコースを設置することは計画されていたことだろ

う。そのころ小出先生は、カナダのミッション・ボードの代表として三鷹に移り住んだICU創立メンバーのひとりであるA. P. マッケンジーと初めて出会う。ミシガン大学で2年間新しい語学教授法を研究して帰国したばかりの30歳の小出先生と長い間関西学院で教鞭をとり、戦時中はカナダ陸軍言語学校の責任者であり、戦後は関西の朝日放送で「英会話」の講師をつとめたりしていた63歳のマッケンジー教授のお2人から、ICUの日本語教育、インテンシブ・コースの構想が生まれたことは、想像に難くない。ICUの当初の日本語コースのプログラムは、戦時中米国やカナダの陸・海軍日本語学校で行われていた日本語教育のそれと、よく似た部分を持つ。

ICUでは、日本人学生には高度の英語力が求められ、そのためにフレッシュマン・イングリッシュ・コースが作られた。同様に、外国人学生には、日本語による一般教養の講義が理解できる日本語力を最初の1年間に持つことが求められた。アメリカ、カナダ、オーストラリアばかりでなく、ヨーロッパや香港からも優秀な学生がインテンシブ・コースを取りにやってきた。香港の学生には奨学金の給付もあった。創立当初はインテンシブ・コースだけであったが、数年後には進度の緩やかなセミ・インテンシブ・コースも設置され、その後は、多様化する学生に合わせて様々なコースの設定が行われるようになる。

## 7. ICU初期の日本語教科書

### 『Modern Japanese for University Students Part I, II, III』

新たに始まったICUの日本語コースにとって大きな問題の一つに教科書があった。戦後間もない当時の日本には、日本語教科書といっても、戦時中使われた国定の日本語教科書、国際学友会の『日本語教科書』、そして長沼の『改訂標準日本語讀本』くらいしかなかった。

国際学友会の『日本語教科書』は1935年外務省の文化事業の一環として発足した国際学友会のために、岡本千万太郎、松本明（ともに国語学者）らによって作成され、5巻からなり、非漢字系学習者のための配慮もなされている。学習者が世界各地から集まる国際学友会では、学習の場で共通に理解できる言語が得られないため、教え方は媒介語を使わない直接法を取らざるを得なかったであろう。

ICUでは、学習者の共通言語を英語とすることができたため、最初の数年は長沼の『改訂標準日本語讀本』が使用された。ローマ字書きの『Basic Japanese』が『改訂標準日本語讀本』に入る前の予備段階のものとしてあったが、1年間で初、中、上級段階をカバーするという到達目標を考えると、ローマ字読みに長い時間をかけることは避けたかった。『改訂標準日本語讀本』は、漢字かな交じり文の縦書きの読み教材で、教材の内容は、社会人向けに日本文化、社会、文学を紹介するように様々な領域からの文章が盛り込まれていた。そして、その付属教材として、英語による語彙リスト、漢字の提示、文法説明、練習帳などがきめ細やかに準備されていた。『改訂標準日本語讀本』に使用されている紙も印刷も、当時の日本の本としては破格の立派さであった。そして、当時ICUの日本語担当の教師も学生も、あの分厚い教科書とテープレコーダーを抱えて本館3階の教室から教室

へ移動していたのであった。

『改訂標準日本語讀本』は宣教師、社会人を対象として作成されていたため、文章の内容には、大学の一般教養科目の講義を聞くことを目指している大学生には適さない面があった。ICUの日本語コースが始まると同時に、小出先生以下助手まで日本語担当の教員全員が、大学生向けの日本語教科書作成に全力を注ぐことになった。授業が終わって教員の手のあく午後から夕方にかけてほとんど全員が、日本語初級教科書作成のための語彙、漢字、文型の基礎調査や収集に関わった。資料としたのは、国立国語研究所の『総合雑誌の用語・用字』『現代雑誌90種の用語・用字』、文部省発行の『当用漢字・送りがな・筆順』、三省堂の『国語辞典』（アクセントつき）などである。これらを参照し、教科書に取り入れる要素が選択された。この間に起こったいろいろな問題についての議論は、まことに興味深いものであった。

小出先生のそれまでの知識や経験から、教科書全体の構想をはじめ様々な問題が提示された。日本語の音声やアクセントの表示方法、文を構造的に見る視点、文型としての取り上げ方、日・英語の比較による問題点の扱い方などである。

ICU 創立10年後1963年にPart I が出版された。10年の間ひたすら教科書作成は続けられ、試行版が使い続けられた。ICUは年間3期制で日本語教育では1年間に初級から上級までをカバーしなければならなかったもので、学期毎に、1学期は初級Part I、2学期は中級Part II、3学期は上級Part IIIの3教科書が考えられた。

### 1) 『Modern Japanese for University Students Part I』

Part I には、初めに予備教材の部分がある。そこには、日本語のローマ字、ひらがなの五十音図、日本語の発音の詳しい説明、簡単な挨拶表現、教室内での簡単な会話表現がおかれている。そのあとに主教材が続く。主教材は、全体として漢字400、語彙1,250を盛り込み、各課平均10の漢字、30の語彙を新出することとし、それらについては、当教科書の中で少なくとも2回は繰り返して表示するようにした。各課は5つのセクションからなり、まず①新しい文法の提示があって、その説明（英語）にいくつかの日本語が登場する。そして②そこに使われている新出の語彙とその英語説明があり、それから、③新出文法を含む文を集めて文型とし、既出の文を応用した会話文、④短い読解文と新出漢字の筆順の提示、そして⑤英文和訳・和文英訳という形で続く。

文法の提示は、易しいものから難しいものへと課ごとに順序づけられ、先ず、名詞、動詞、形容詞、形容動詞との関わりで助詞の用法が示され、中間には、動詞のte-formという学習者の難関があり、終わりには、学習者にとって難しい敬語表現が並べられている。

文法説明に使われる文は文型として提示され、語彙の置き換えや動詞の変化を交えた文型の集まりは、ラボでのリピート練習や補助教材の練習帳で学習される。当時、語学学習には、ランゲージ・ラボが欠かせないものと考えられていた。

新出語彙には英語訳が置かれ、漢字は意味の説明とともに筆順も示される。新出漢字が

提示された翌日には、教師が読み上げる日本語を、漢字をまじえて書くディクテーションの時間があり、ここでは漢字の書き順もチェックされた。

会話文は、普通体と友人同士や家庭内で使うような非丁寧体の2つが提示されている。外国人学生が、寮で丁寧なデス・マス体を使っているのは日本人学生と親しくなれないというようなことも、2つの形の提示の理由の一つであった。これにも英語訳がついているが、学生は、提示された翌日の朝のクラスで、英語訳の文を頼りに2人ペアになって短い日本語の会話文をテープレコーダーに吹き込む。吹き込んでいる間に教師は、アクセント、イントネーション、語彙・文法の間違い、全体の滑らかさなどをチェックし、学生に指摘する。その結果は毎日数字化されて廊下に張り出されることになっていたから、学習者は毎日気を抜く暇がなかったに違いない。

英文での詳しい説明のついた文法、英訳のついた語彙の部分は、学習者が予習してくるようになっており、新しい課はL.L. (ランゲージ・ラボ) で35分のテープ (会話10分、文型練習25分) を聞くことから始まる。それから教室で教師により文型の口頭練習が行われ、次に構文練習のクラスで補助教材の練習帳を使って文法と構文の習得が確かめられる。

次の表現のクラスでは、日本語文から英語文へ、英語文から日本語文への翻訳の授業が行われ、担当の教師は、時として学生の読みづらい曲がりくねった英語の文を添削のために家まで持ち帰らなければならないこともあった。翌日の会話文の暗唱のクラスでは、特にアクセントや長母音、促音などの誤りの指摘に対して、学習者が納得しないというようなことがしばしば起こった。それは日本語が、英語などのように強弱アクセントではなく高低アクセントを持つこと、母音や子音の長短によって意味に違いをもたらす言語であることによる。学習者が、母語とは全く異なった音やアクセントを理解し習得するには時間がかかるということであった。

このようにPart Iは、実際のICUの日本語コースの授業の進め方に従って作られているので、実際のICUの授業の進め方を理解した上でないと使いにくい教科書ということであったのかもしれない。しかし当時、このように初級で教授する内容を網羅しているコンパクトな日本語教科書は他になく、欧米の国々でも使用された。

特に、小出先生による日本語の音声、アクセント教育の資料は細かく丁寧なもので、それはPart Iのはじめの予備的資料の中に十分に示されている。たとえば、発音の表示に便利なようにローマ字表記にはヘボン式でなく訓令式を選択した。「し」はshiと表示するよりsiとするほうが日本語の基本的音素「子音+母音」の形に添っており、学習者が理解しやすいと思われたからである。そして例えば、「きし」kisiの「き」の/i/、「月」tukiの「つ」の/u/のように無声子音に挟まれる母音/i/,u/は「/」をつけて無声化を示し、多くの異音をもつ「ん」は、文末では大文字の「N」で示すことなどが行われた。

Part Iは、初めの部分は日本語をローマ字表記にしているが、11課からは基本的に漢字かな交じり文とし、21課からは横書き文ばかりでなく縦書き文も登場させている。縦書き文は欧米系の言語には存在せず、学習者が、当時まだ多かった日本語の縦書き文を読



むことに慣れさせるために組み込まれた。最後の40課の本文は、短いながら朝日新聞の朝刊から取った縦書きの生教材である。

## 2) 『Modern Japanese for University Students Part II、III』

Part IIは、Part I出版から2年後1965年に出版された。Part Iとは違い、生の日本語の文章が、読解教材として、構文、語彙の難易度を考慮して段階的に導入されている。大学の教養課程で学生が受講することになる人文科学、社会科学、自然科学の分野の日本語の文章を、著者の承諾を得て、教育的見地から多少の変更を加えたものである。それには2,700弱の語彙と600の漢字が含まれ、Part Iと合わせると約4,000の語彙と1,000の漢字を提示したことになる。全28課は授業の40回分に当たり、本文と新出漢字、新出語彙とその読み替え、そして、複文文型を中心とした文型提示とその英語説明、語彙とその英語説明で構成されており、巻末には、ていねいな漢字と語彙の索引、語彙と文型についてのノートがある。本文は縦書きの形が主流だが、自然科学系の内容のものには横書きの形が取られている。全体的に生の日本語文を使用するようにしたが、日本語教育の中級段階に適した、短い文章で学習者にとって興味深い内容のものを見つけるのは非常に難しく、さらに、著者から部分的な変更の許可を得ることも難しいことだった。出版後時を経ていて著者の許可が必要ないものの中には、現代の若者たちにはあまり興味をそそられない内容のものもあり、本文選択にはかなりの時間がかかった。そして、自然科学系の文章は一般的に、平易な語や構文を用い短い文のものが多く、中級段階の日本語教材としては適しているように見えるが、短い分だけ内容の理解は難しく、中級段階の日本語教育にはあまり適さないのではないかということが実際に使ってみてはじめて分かった。自然科学専攻の学生も、彼らを取り巻く社会科学系の環境に大きな興味を持っているということのようである。そしてその後、それらに差し替える補助教材として、いくつかの文章を加えることになった。

Part IIの特徴として、文章の内容とは別に2つが挙げられる。ひとつは、学習させる文型が単純な文構成のものから複文を構成するものになり、微妙な意味を表す、あるいは類似する慣用語句の形などになったこと、もうひとつは、提示漢字の数が多い場合、学習者の負担を考慮して、学習者に書くことまでを求める漢字と、読めるだけで書けなくてもいい漢字とを分けて提示するようにしたことなどがある。

Part IIIは、全体の形としてはPart IIと同じであり、学習者の日本語レベルが上がった分、本文選択の幅は広がって、教材作成はより楽になった。1964年に作成され試行した謄写版刷りのものを1968年に改めて出版した。2,500の新出語彙と約400の新出漢字を含んでおり、Part I、IIと合わせると6,500の語彙と約1,400の漢字を提示していることになる。Part IIIにも何年か後、補助教材としていくつかの文章が加えられ、当時日本人によく読まれた小説の一部などが組み込まれた。学習者は、日本人に多く読まれているものに非常に興味をもち、多少難しくても熱心に学習しようとした。教科書より新聞などの生のコピー

教材のほうが喜ばれたりもした。それに合わせて、教員の新しい教材探しはいつまでも続いた。教材作成も宿題の訂正も試験問題作成も、いつも教師に求められる仕事であるが、そこには常に、現場で生まれる新しい問題の発見と解決が要求され、そこには学習者の真剣なまなざしを見ることができた。

その他、小出先生は、短波ラジオ放送の「日本語」のテキストとして『Let's Learn Japanese』シリーズ、一般人向けの『Easy Japanese』シリーズを作成している。また、『Modern Japanese for University Students Part I, II, III』は出版当初は、その充実した内容やコンパクトな運び良さから海外でも広く使用されたが、その後国内でもさまざまな日本語教科書が出版されるようになり、小出先生は、改訂も含めて大学生ばかりでなく一般人の学習者も対象とした『日本語（にほんご／にっぽんご）』を出版されている。

## 8. 終わりに

当時、他大学の大学院の学生であった私は、1957年に非常勤助手としてICUで日本語を教え始めた。それは、その時にICUで日本語を教えることになっていた1期生の方が急にアメリカに行くことが決まり、空きができたという偶然からはじまった。私は、長沼の東京日本語学校主催の日本語教師養成講座をその2年前に受けており、たまたま東京日本語学校から発行されていた小冊子『たより』に私のことが紹介された。当時、私は『たより』の編集の手伝いをしており、それをご覧になった小出先生からICU日本語の非常勤助手のお話をいただいたのである。そして、1957年から1968年まで、私はICUの日本語教育の洗礼を受け続けた。私は自分の日本語教育の原点はICUであり、小出先生であり、当時の日本語担当の先生方だと思っている。また、助手の身分で教壇に立つことが許されたという幸運に、感謝の気持ちは強い。1970年にフランスのパリ第7大学で日本語初級のクラスを担当した時、私はICUの初級テキストを使用した。英語の説明書きに学生からの多少の抵抗はあったが、教えるべきことが網羅されており、まことに重宝した。

## 参考文献

- 有田佳代子（2009）「パーマーのオーラル・メソッド受容についての一考察「実用」の語学教育をめぐって」『一橋大学機関リポジトリ』HERMES-IR グーグル
- 上野田鶴子（2002）「追悼のことば」『小出記念日本語教育研究会 論文集10』
- 大庭定男（1988）『戦中ロンドン日本語学校』中公新書
- 関西学院事典増補改訂版（2014）「マッケンジー、A. P.」学院史編纂室
- 河路由佳（2006）『国際学友会「日本語教科書」全7冊 1940～1943』港の人発行
- 河路由佳（2011）『日本語教育と戦争』新曜社
- 河路由佳（2016）『日本語学習・教育の歴史 越境することばと人々』東大出版
- 小出詞子（1973）「長沼先生との出会い」『日本語教育19号』日本語教育学会

- 小出詞子 (1974) 「日本語教育の専門家」『前掲誌 25号』
- 小出詞子 (1975) 「動いている日本語—日本語教育でどう扱うか」『前掲誌 28号』
- 小出詞子 (1987) 「日本語教師養成遍歴」『前掲誌 63号』
- 小出詞子 (1985) 『日本語 (にはんご／にっぽんご)』 開拓社
- 小出満二 (1982) 「農学、農業教育論」『小出満二著作集』 小出満二著作刊行会、社団法人農山漁村文化協会
- 国際基督教大学語学科 (1962) 「日本語教育のために」『日本語教育セミナー報告』
- 嶋津拓編 石田敏子・鮎澤孝子監修 (2015) 『1960年代海外派遣日本語教師の記録』
- 関 正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』 スリーエーネットワーク
- 関 正昭・平嵩文也 (2015) 「教科書を作る」『日本語教育叢書』 スリーエーネットワーク
- 竹本英代 (2004) 「日語学校創設が果たした在日宣教師の役割」『キリスト教社会問題研究第53号』 同志社大学人文科学研究所
- 竹本英代 (2007) 「初代校長フランク・ミュラーと日語学校の教育」『福岡教育大学紀要第56号 第4分冊』
- 竹本英代 (2010) 「戦前日本における宣教師に対する日本語教育—松宮弥平を中心に」『キリスト教社会問題研究第59号』 同志社大学人文科学研究所
- 中川裕子 (2001) 「長沼直兄著『改訂(再訂)標準日本語讀本』の補助教材の成立と背景—The Reader System との関係から—」『日本語教育史論考第2編』 冬至書房
- 中村妙子 (1995) 「日本語教育における読解について」『国際基督教大学日本語センター』 東京堂出版
- 中村妙子 (2001) 「国際基督教大学における日本語教師—日本語教師の立場から—」『ICU 日本語教育センター紀要 11』
- 中村妙子 (2004) 「ICU 日本語教育の変遷—1984年4月から2004年3月—」『同掲紀要 13』
- 長沼直兄 (1948) 『改定標準日本語讀本 卷一～卷八』
- 長沼直兄 (1952) 『Basic Japanese』
- 森 清 (1986) 「太平洋戦争前後における米軍将校に対する日本語教育—長沼直兄を中心に—」学会誌『日本語教育 60号』 日本語教育学会
- 吉岡英幸 (2001) 「松宮弥平の『日本語会話』と日本語教授法観」『日本語研究教育センター紀要 14』 早稲田大学日本語教育研究センター
- 和田敦彦 (2007) 『書物の日米関係 リテラシー史に向けて』 新曜社
- 「あすの日本語教育の道を求めて」(1989) 『ICU 日本語教育 30周年紀要』 凡人社
- 「日本語教育の課題」(1995) 『ICU 日本語教育 40周年記念論集』 国際基督教大学日本語教育プログラム 日本語教育センター編 東京堂出版
- 『日本語教育研究センター紀要 11号』(2001) 国際基督教大学センター
- 『同紀要 13号』(2003)



## 第 4 章

---

# 小出詞子先生と ICU の日本語教育

中村 妙子

**キーワード** 大学の日本語教育 集中日本語教育 学生の多様化  
A. P. マッケンジー 草創期の ICU 日本語教育

---

### 1. ICU 創立と日本語教育

国際基督教大学（以下 ICU）は 1953 年 4 月開学した。入学者数 198 名で 1952 年から始まっていた語学研修所の修了生 75 名を含む。その中で外国からの学生はどのように位置付けられていたのだろうか。C. W. アイグルハート『国際基督教大学創立史』pp.156-157 に「学生の構成も他の面と同様に国際的であることが、設立当初からの ICU の方針であったので、ノンジャパニーズに対しても入学の枠が設けられた。」と述べられている。さらに、次のように続く。「しかし、現実には渡航費、海外における PR 活動、キャンパス内の宿泊施設の不足で海外からの留学生は難しかった。」そのような状況の時、中国基督教大学連合委員会（後の UBCHEA The United Board for Christian Higher Education in Asia）から 5 名の学生が選考され、香港から ICU に留学した。これらの学生は 4 年間で ICU を卒業するのだが、大学の履修単位を習得していかなければならない。語学の単位については、日本人学生は英語集中教育 24 単位を履修する。それと同様に外国人学生は日本語を 48 単位履修しなければならない（『国際基督教大学教養学部要覧』以下要覧 1958 p.22）。また、この香港からの学生だけでなく日本に在住する外国人学生を含め 10 名の学生が 1953 年最初の Intensive Japanese I を履修している。

### 2. コース設計

ICU の日本語コースの単位は、日本の大学で最初に、大学の単位として認められた。（ICU 日本語研究室『あすの日本語教育の道を求めて』p.5）。コースの内容、枠組、時間数、教材などはどのようなコース設計のもとで設定されたのであろうか。ここで考えられるのは小出詞子先生の日本語教育に関する背景である。第 3 章ですでに記述されているように、戦時中のフィリピンでの日本語教育、この派遣の前に受けた研修、戦後長沼直兄が創設した東京日本語学校での日本語教育の経験があげられる。また、米国留学（1950～1952）で、ミシガン大学大学院研究生としてフリーズ、パイク、ラドーなどに学んだことも関係しているものと思われる。

また、ICU 創立当初から ICU 設立にかかわった A. P. マッケンジー先生とともにコースの組み立てを考えたことは十分考えられる。要覧にはマッケンジー先生と名前を並べてコースを出している。集中日本語教育はマッケンジー先生の携わった戦時中の欧米で行われた集中日本語教育の流れを持っていることを、この論考をまとめるにあたって強く認識した。小出先生も ICU 日本語教育 30 周年の講演の中で、「集中日本語教育は戦争中は非常時なのでできるけれども、平和な時にできるのか一つの実験であった。」と述べている。(ICU 日本語研究室『あすの日本語教育の道を求めて』 p. 5)。さらに、「学生の不平は相当なものであった。ただ何とか終わると大学でかつかつやっ行って行けるといことが一つの実証となった。」と述べている。

筆者が ICU 入学 1 年次に受けた英語教育も、マッケンジー先生達によって開発されたものである。モデル会話を暗記し、口頭で発話して録音し、再生して発音、構文などの間違いを訂正するなど、ICU の日本語教育と共通する事項が多く、欧米戦時中の日本語教育と共通点をもっている。マッケンジー先生は 1960 年にカナダで亡くなり、その資料はとほしい。浅間健児と名乗り流暢な日本語を話したといわれている。筆者の大学入学試験の時には、面接試験があった。数人の受験生が 3、4 人の面接官に会う形だった。その中にマッケンジー先生がいた。ももごと話す英語は聞き取りにくく、1955 年当時、外国人の英語を聞いたことのない受験生たちには、まったく歯が立たず、日本人教員が助け舟を出してくれていた。また、マッケンジー先生の流暢な日本語を聞く機会は一度もなかった。

小出先生の古いファイルが見つかった。その中にマッケンジー先生が語学科長であった R. H. ゲルハルド先生に宛てた手紙のコピーが含まれていた。1955 年 4 月 14 日の日付で、NHK で行われるセッションについてである。3 月から 6 月まで連日、朝から夕方まで行われるものである。権威ある学者たちが日本語学の講義をする。その年の 9 月から始める「日本語教育実習」の授業にも役立つと述べている。参加費用は無料だが、交通費は小出先生に出してほしい、すぐ出ないのであれば自分が出し、小出先生に負担をかけたくないとも述べている。この NHK のセッションは、NHK に関係の深い西本三十二教授から情報を得たものだと書かれている。初期のころマッケンジー先生は日本語教育関係のコース、プログラムに深い関心を寄せ、その充実に力を注いでいたことが推察できる。

このような背景で始まった集中日本語教育は次のようになる。

### 3. 集中日本語教育 (Intensive Japanese)

『国際基督教大学 日本語教育 50 周年記念特集号』には次のように述べられている。

「1953 年-1955 年 日本語の集中的教育 1-4 (Intensive Japanese I-IV)、週 27 コマで 1 学期は 12 週間。夏学期 (夏休みの期間) も含めて 1 年に 4 学期が行われた。」(国際基督教大学日本語教育研究センター『ICU 日本語教育研究センター紀要 13』 p.31)。コースは最初、春学期から始まっていたが、留学生の受け入れが秋学期となり 1955 年からは、集中日本語教育 1-5 は秋学期の開始となる。「集中コースを 3 学期とし、その修了者のため

の2年目の上級コース（週9コマ）2学期を設けた。」（前掲p.31）。2年目のコースは1965年に上級日本語1-2となる。

後に集中日本語コースのコマ数が減るが、小出先生退職の1987年まで大きな組み立ては変わらなかった。コースは四つに分かれている。理解（Comprehension）、表現（Expression）、構文（Structure）、書方（Writing）である。この組み立てはどのような考えだろうか。全体的な理解をし、それを表現することができ、文の構造を学び、漢字を含めて表現することを習得するということであろうか。読み、書き、聞き、話すの4技能はこれで習得できた。

また、授業で使われた教科書は最初は何であったのであろうか。週27コマに及ぶ授業なので、教材を作成しながら授業を行うといった授業形態は考えにくい。使われた教科書についての記述は見つからない。しかし、いくつかの理由から長沼直兄『標準日本語讀本』であろうと推測される。それは小出先生が長沼直兄先生と交流があったこと、当時副教材がこれほど完備した教材はなかったこと、また、現在たどれるICU初期の日本語教育に携わった人々が、長沼を使ったと証言していること、筆者が1960年に語学科の日本語教育に携わったときも長沼の教科書を使用したことなどからの推測である。ICUで毎学期授業登録のために出るCourse Offeringsがある。First Semester 1953-54版を見ると101 Intensive Course for Foreign Studentsの担当教員はKoide、Terasawaとなっている。担当者として名前が出ている寺澤芳雄先生にも問い合わせてみた。ご病気にもかかわらず電話に出てください、また丁寧なお手紙もいただいた。寺澤先生は自由会話の時間を担当し、主教材の教科書は何を使っていたか覚えていないとのことだった。そして2016年3月に他界された。病床でのご協力には感謝のほかはない。

その後、前述の小出先生のファイルからIntensive Japanese Course、Schedule for the First Termという表が見つかった。4月20日（月）から始まり6月25日（金）までのものである。この年は調べると1953年であり、これはインテンシブコースの最初の授業予定表といえる。Budget 1からBudget 5に分けられ、それぞれのBudgetの終わりにはReview Testがある。

学習する課はPart I 1課-50課、Part II 1課-27課である。1日に学習する課のページの量も書いてある。これを長沼直兄著『改定標準日本語讀本 卷一』の昭和33年1月25日版と照合してみた。教科書の課の数、ページの分量も合う。Part IIは30課までであるが、インテンシブコースは27課までしかカバーしていない。日数の関係で省いたことが考えられる。

また、長沼のすべての教材の値段を記した資料も同じファイルにあった。出版社長風社代表アントネット・ナガヌマの名前が出てきて、小切手の送り方なども記されている。A.P. McKenzieのサインもありその後にはfor ICUと書かれている。教科書1巻から8巻、漢字カード、Gramophone Recordsを入れてTotal 310,500と記されている。この二つの資料から、ICUの1953年に始まったIntensive Japaneseコースは長沼直兄著『改定標準日本語讀本』を使ったと見て、まず間違いはないであろう。

1953年から長沼直兄『改定標準日本語讀本』1-5を使用した後、1963年に国際基督教大学、小出詞子『Modern Japanese for University Students Part I』が出版され、授業で使いはじめた。Part IIは1965年に出版され、Part IIIは1964年の試行の謄写版刷りを1968年に出版した。Part II、IIIはいずれも生のままの日本語が読解教材に使われている。作成過程や内容は第3章に詳しい。これらの教科書が揃えられてくるとともに、教科書に沿っての副教材作成も行われた。語学ラボで聴く文型、会話、書き取りの音声テープ作成も、多くの時間と労力を要した。語学ラボにビデオが導入されてからは、漢字の読み書き用のビデオも作製した。Part II、Part IIIは読解内容が学生の興味に合わないなどの理由から、Supplementary Materialsという教材も作られた。同じ理由から読解教材も差し替えながら使われた。

次にIntensive Japanese Iで使用した小出詞子『日本語（にほんご/にっぽんご）』であるが、はしがきに次のように述べられている。『Modern Japanese for University Students』シリーズを発行して20余年となり、あまりにも古くなったので、一般向き集中日本語教育用にこの本を作成した。さらに、1978年に試用版を作り、ICU集中日本語講座で試験的に使ったとある。1978年にこの本が正式に発行され、1985年から使い始めた。

#### 4. 上級日本語

Intensive Japaneseの2年目のIV、Vは1965年から上級日本語となった。「基礎練習」、「講義講読」、「講義理解」、各2単位である。要覧1965年に「外国人学生が日本語でおこなわれる講義を受けられるようにする。」とある。まとまった文章や新書を読み、読解力を養い、テーマを見つけて自分で文章を書いたり、音声テープやビデオの視聴で聴解力を育成したりする。

この日本語集中教育I-VはICUの最初の日本語のクラスである。1年半で大学の日本語で行われる授業を何とか履修できるということで多くの学生が履修した。ICUで学位を得て卒業しようとする外国人学生への道を開いたし、大学におけるAcademic Japaneseを求めてきた。

#### 5. 初級日本語 (Elementary Japanese) I、II、III

このコースは1956年に始まり1966年まで続いた。アメリカからJYA (Junior Year Abroad) という1年間を海外で学ぶというプログラムでICUに来た学生のために始められた。週3日、6コマで、I-IIIでIntensive Iをカバーする。留学生のためのコースであったが、ICUの教員やキャンパスに住む夫人たちも加わった。筆者も授業に携わったが、学生だけを対象とした授業とは異なる雰囲気での楽しい授業であった。キャンパスに住む人々からの要望もあったが、次のSemi-Intensive Japaneseに学生が集まってスタッフ不足が生じ、終了した。



## 6. 日本語半集中教育 (Semi-Intensive Japanese) I、II、III

1960年から1972年まで実施。週10コマで教科書はIntensive Japaneseと共通で約半分のスピードで進む。このコースはアメリカなどでもっと外国語を学ばなければという機運が起こりこの動きの中で、単位数の少ないものは認めず、12単位以上ならば認めるということになったためこのコースを作ったのである。

1967年には2年目の日本語半集中教育I、II、IIIを開始し1972年まで開講した。これは2年目も日本語を学びたいという学生のためであった。このセミインテンシブの単位は卒業要件の日本語の単位にはならなかった。

1973年秋学期からこの二つのコースを統合しJapaneseシリーズとした。教科書もインテンシブとは異なった。単位は卒業単位に認められるようになった。

## 7. 日本語特別教育 (Special Japanese) I、II、III

1964年に始まったコースで、日本生まれの、日本育ちで話ができるが、書くことは学んでいないという外国人学生を対象にしていた。週3コマである。そのうち、帰国学生が増え、帰国学生が中心となってきた。日本の学校教育などで使う漢字の練習帳を使い、漢字の読み書きを徹底的に学び、さらにまとまったことを日本語で表現できる能力を育成した。最初このコースを作ると小出先生が言いだしたとき、教員たちは何を教えるコースなのか把握できずに成果をいぶかった。しかし予想に反し大勢の帰国学生が9月に入学した。帰国学生にとっては、日本の高等学校を卒業してきた学生たちとの接触などを通して、ICUで自分達の立ち位置を見分け、将来への道筋を考えるのに役立ったようだ。この日本語特別教育の授業を提供したことにより、ICUに帰国学生を多く受け入れる道が広がった。しかし、最初この「日本語」の単位を、文部省は規約により日本人には認めなかった。後に認めることとなった。

## 8. Placement Test

学生達にどのレベルの授業を受講させるかは大きな問題である。日本語学習の履歴や学生の希望により振り分けていたが、それだけでは問題が出てくる。学生に不満があったり、授業についていけなくなったりなどの問題である。日本語能力の基準が定まっていないからである。そのような中で1977年にはPlacement Testを実施した。教員達が試験問題を作成し、聴解、構文読解、読み書きのテストを行った。特別日本語教育もテストを行った。初日にこのテストを行い、テストの結果と日本語学習歴、学生の希望でクラス分けを行った。そこでまだ問題のある場合は個別に学生と話し合い、履修するクラスを決めた。ブレースメントテストの実施でクラス分けはかなり能率よくできるようになった。テストの採点の集計はICUの計算センターに依頼した。また、テスト問題の分析、妥当性などの検討のための資料も計算センターに依頼し、それを検討し改良に役立てた。

ここまでのICUの日本語教育についての記述は小出先生がICUを退職する1987年3月までである。この後日本語教育プログラムは改変をしていく。しかし、上記のコースは学生の変容、現代の教育理論などを踏まえて変化していくが、最初の種は残り成長しているように思える。

## 9. 草創期のICU日本語教育

日本語コースの出発点などを検討してきたが、その他の事象を挙げてみる。一つは教員であるが、現在のように日本語教育課程を修了した人はいなかった。それぞれ自分の研究分野を持っている教員ではあるが、日本語教育専門ではなかった。その教員たちとともに学生に日本語を教えていくことは難しかったと思うが、小出先生はそんな状況の中で指揮を執りプログラムを遂行していった。教員たちは日本語教育の難しさ、面白さを知り、次第に日本語教育に魅かれていったと言ってもいいかもしれない。メールなどない時代、連絡のため夜昼なく電話がかかってくるのも、今となっては懐かしく思うと当時の関係者は述べている。

## 10. 非常勤教員

語学教育は多くの時間を使う。特に初級のクラスは、クラスでの学習に時間がかかり、その分教員が必要となる。どこの日本語教育機関も同じような状態であるが、責任者は専任教員にあるが、80パーセントは非常勤教員であるところが多い。その資格だが、ICUではある時期まで、非常勤講師は本務校を持っている者となっていたので、ICUだけの非常勤勤務の教員に非常勤講師の資格で教えてもらうのは困難だった。また本務校を持っている人に週4時間とか8時間の授業を担当してもらうのは無理だった。1985年ごろ大学の理解を得て、他に専任を持たない人に非常勤講師の資格で教えてもらうことができ、人的環境が少し改善した。非常勤教員の中には大学院に在学中の学生もいた。日本語教育に関心を持っている院生には良い経験になったと思う。非常勤講師の場合、院生の場合を含めて熱心な非常勤教員に恵まれ授業を行うことができた。

人員のこのみならず、新しいプログラムを遂行していくためには、予算も必要で、ある。筆者は小出先生に、なぜ人員など必要なものについて要求しないのか聞いたことがある。先生は「よそ様にご迷惑をかけないで、自分たちでできることは、できるだけやりましょう。」という返事だった。他の学科などと予算の取り合いにならない考えだ。なるほどと思ってやってきたし、小出先生らしい慎ましさだと思うし、すばらしい考え方だと思う。けれども必要なものは獲得するのが当たり前という風潮の中で、この考え方はなかなか理解してもらえない。このずれによる困難も多かったと思う。

しかし、今回、鯉淵学園発行の雑誌『むら』創刊号1946年8月の中に小出先生の書かれたものを見つけた。先生は1946年6月から1947年4月までお父様の小出満二氏が創設した鯉淵学園（茨城県）で兼任講師として英語を担当した。鯉淵学園は農村の新しいリー

ダーを育成する学校である。この時期小出先生は『むら』の編集にも携わっていた。その創刊号の記事は「さんばきたの思ひ出」というものである。先生が1943年1月から1944年11月まで、フィリピンに派遣されていた時の仕事について書かれている。これまで目にした先生の書き物とは異なり、先生の心情があふれた書き物である。この記事には先生のマニラでの日本語教育の教え子アリナさんとの交流が述べられている。先生は派遣されたフィリピンで、その国との友好のために働いていたと書いている。1944年11月突然の帰国命令で日本に帰り、そのまま終戦となった。フィリピンに心を残しつつ、突然、別れてしまったフィリピンの友人に次のように書いている。「(前略) アリナさん、私は絶望の中にも夢を持ってゐます。(中略) 各國から許された暁には、私達は今度こそ、世界人類の幸福のためにつくせるのではないかしら、と。」p.30。先生は人が良いというだけでなく、強い願いを持って日本語教育に携わっていたことを改めて認識し、先生のバイタリティのもとにふれた思いである。

## 11. 教科書

1963年にできた『Modern Japanese for University Students Part I』の作成については第3章に詳しい。新聞の切り抜きに赤い線を引いて、使用語彙を集めるという基本的な作業もあった。また、教科書ができると付随教材として、語学ラボで使う、パタンプラクティス用のテープ、会話や書き取り用のテープの作成が必要となった。40課分ともなると相当の仕事量である。先生の作った教員を組み合わせたテープ作成の日程表を今回見つけ、こういう細かい仕事までなさっていて、さぞかし大変だったろうという思いを強くした。

教科書では1985年の小出詞子著『日本語(にほんご/こっほんご)』開拓社がある。1978年に試用版を作り、1年間Intensive Japanese Iで試験的に使ったことがある。「はしがき」によると『Modern Japanese for University Students』が古くなったので作成したとある。さらに、MJUSの流れをくむが、一般成人が短期に学ぶために配慮し、語彙、漢字の選択を行い、話しことばと書きことばを最初から出し、その差をあきらかにしたと述べてある。

この教科書の巻末に「あいうえおのうた」が記載されている。これは小出先生がフィリピンで戦時中仕事をしていた時に聞いた歌をおぼえていて、ICUの金澤正剛先生が作曲、福地純氏が編曲したものである。教員がピアノ伴奏をし、歌ったテープもあり、語学ラボの時間に流したりした。

この教科書作成の時も、お忙しい先生の原稿を待ち、使用する朝に学内に住んでいらしたコミュニケーション担当のカベツジ教授のお宅に持っていき、英語をチェックしてもらい、印刷室で印刷してもらって、教場にもっていった。スリリングな経験であったが、日本語教育はこんなものと思い、スタッフはよく協力したように思う。

## 12. 施設、教育機器

教育機器の発達には教育に大きな影響を与えるが、初期のころは使いやすい物はあまりな

かった。学生に渡す教材や試験問題は、初級の場合、手書きでは漢字などは読みにくく、試験問題などは和文タイプに頼った。スタッフの方に和文タイプを習ってもらって切り抜けた。試験問題など打ちあがった原紙を明るい方向にかざして、校正をしたのも懐かしい。デイトーといったか、原紙に手書で書き、輪転機で回す。自分でできるので、設置されたときは大変便利になり喜んだ。刷り上がったものは、確か湿っているので乾燥させなければならなかった。教材作成の印刷はワープロが出てくるまで大仕事であった。ワープロが出てきた時、小出先生はさっそく取入れ、教材をワープロで作りスタッフを驚かせた。コピーしたものを束ねる機能の付いたコピー機などなかった。教材を印刷しとじるのもひと仕事であった。教員室の机の上いっぱい資料を並べて綴じるのだが、教員同士見かねて、よく助け合って束ねたものだ。

初級の授業では会話の時間に、前日に学んだ文型を入れた会話文を暗唱してきて、復唱する。二人の学生が復唱した会話を録音し、間違いを訂正し、発音の矯正などをした。学生にとってもきつい授業だが、その録音に用いた録音機は重く、教員が教室に運ぶのはけっこうな力仕事だった。録音機は書き方の授業の書き取りにも使われた。書き取りは前日学んだ漢字を入れた文章を読み上げ、学生が書き取るものだ。通し読みのあと少しずつ区切って読みあげる。教員がクラスで読みあげると、学生の様子でスピードが遅くなったりしてばらつきが出るので、テープを使った。この時間も教室まで録音機を運ばなければならなかった。

### 13. 語学ラボ

最初の本館4階にあった。個人のブースになったラボだった。前日学んだ課の文型のテストと読み書きの授業で学んだ漢字などの書き取りテストをテープで行う。そのあと新しい課の文型練習、会話を聞いて練習し、新しい課の始まりとなる。

1981年に総合学習センターとして、新しい語学ラボが4室できた。1982年4月から授業で使いはじめた。この語学ラボは学生と教員の間で通話ができ、学生が練習をしているときの間違いなどを訂正でき、また学生も質問ができる設備が整っている。さらに、ビデオの設備もある。漢字の書き方の提示もビデオテープでできるので、漢字のビデオテープ作りが始まり、各課の漢字のビデオテープを作成した。また、聴解用のビデオテープも市販で作られるようになり、そのビデオテープも多く活用した。

語学ラボでは教室内にスピーカで音声が流せる。それを利用して、授業の始まりに音楽を流すこともできた。教員はいろいろな歌曲を集めて、日本事情の理解にも役立った。当時はやっていた曲もあったが、学生が気に入ったものに、さだまさしの『関白宣言』があったりした。もう一つは「飛んで、飛んで、まわって、まわって」という歌詞の入っている曲で、初級の難所、動詞の「-て形」を学ぶ時には大変役立った。

総合学習センターには録音室もスタジオの設備もある。それまでの録音室は本館3階西の端の窓のない部屋だった。新しいスタジオでは教員も学生もビデオとりができた。一つ

のテーマで学生同士が話し合う様子などを撮影し、後でそのテープを見て検討したり、また劇なども作って学生の活動に役立てるなどよく活用した。最近ではスマホなどの活躍でスタジオの出番はないようだ。これらの設備の活用にも小出先生は積極的にかかわった。機械の苦手な教員たちにセンターのスタッフは熱心に対応してくれた。

授業ではないが、毎日朝8時半から午後まで日本語を勉強し、2週おきにテストがある集中日本語教育は、学生にとって厳しいものである。不満も出てくるが何とか乗り越える努力をした。そんな中で、学生も教員もほっとするのは学期末の会だった。小出先生はいつも学期末に自宅に学生、教員を招いてくださった。初めのころはICUキャンパスにあり、先生が住んでいらした楓林荘1階のラウンジである。台所の大きなオープンでやきとりを作ろうと沢山の竹串をとり肉に刺したのもなつかしい。教員が用意するだけではない。時には、先生のお母さまであり、のちにはお手伝いさんが朝3時から用意したということもあった。楓林荘のあとは吉祥寺の井の頭公園を眼下に見下ろすマンションで行われた。

#### 14. ICUが歩んだ時代的背景

小出先生がICUで活動した期間はICUの歴史の流れの中のどのような時だったのかを見てみたい。先生の活動とICUの歴史の流れとは無関係ではないと思われる。

武田清子『未来を切り拓く大学—国際基督教大学五十年の理念と軌跡—』国際基督教大学出版局2000年 pp.357-359では五つの時代区分を行っている。

- 第一期 前史—準備期 1910年-1948年
- 第二期 大学基本構想確立期 1949年-1961年
- 第三期 激動の中の大学形成（大学紛争の季節） 1961年-1975年
- 第四期 紛争終息後の調整期 1975年-1992年
- 第五期 教学改革期 1992年-現在

小出詞子先生は第二期から第四期までICUで活動されている。第二期はICUが高い理想を掲げ、新しい大学設立を目指していた時代であり、第三期、第四期は大学紛争に大きくかかわっていた時代である。先生の活動もその影響を受けたことは確かである。

ICUが創立された初期のころ、先生方は新しい大学を作ることに夢を持って励んでいた。明日の大学、新しい大学、その実験ということで一体感があったのではないかと思う。筆者が入学した1955年ごろもそうであった。先に述べたマッケンジー先生も日本語教育に大きくかかわっていた。小出先生の書かれた物にも初期の語学科長ゲルハルド先生に英語をチェックしてもらうなど具体的に協力してもらったという記述がある。新しいものを作り出すのは大変だけれど、熱意や意欲は高かったと思う。ゲルハルド先生の研究室もわれわれ日本語教員の研究室も本館3階の西側にあった。ゲルハルド先生はよくわれわれの研究室にも来ていらした。教員の誕生日は覚えていて「おめでとう」と挨拶にきてくれた。

そんなほのほのとした空気もただよっていた。

ご自身でまかれた日本語教育の種が、ICUの発展とともにすくすくと成長するのが、小出先生の何よりの願いではないだろうか。

## 参考文献

- ICU 日本語研究室 (1987) 『あすの日本語教育の道を求めて—ICU 日本語教育 30 周年記念—』 凡人社
- 鯉淵学園 (1946) 『むら創刊號』
- 国際基督教大学教養学部要覧 1958 年版、1965 年版
- 国際基督教大学日本語教育研究センター (2003) 『ICU 日本語教育センター紀要 13』
- C. W. アイグルハート (1996) 『国際基督教大学創立史—明日の大学へのヴィジョン (1945 年—63 年)—』 国際基督教大学
- 国際基督教大学 Course Offerings First Semester 1953-54 年版
- 小出詞子 (1985) 『日本語 (にほんご/にっぽんご)』 開拓社
- 武田清子 (2000) 『未来を切り拓く大学—国際基督教大学五十年の理念と軌跡—』 国際基督教大学出版局
- 中村一郎 (1985) 「国際基督教大学「集中日本語講座」の現状と問題点」 “Annual Reports Volume 10” The Division of Languages, International Christian University
- 長沼直兄 (1958) 『改定 標準日本語讀本 卷一』 長風社
- 廣瀬正宜、中村一郎、小澤伊久美、丸山千歌、中川健司 (1996) 『ICU 帰国本科生に対する日本語教育プログラム開発に関する研究：スペシャル・ジャパニーズ カリキュラム検討報告』 国際基督教大学

# ICU 初期における日本語教師養成

上野 田鶴子

**キーワード** 小出詞子 国際基督教大学 日本語教師養成課目  
シニアフェロー 院生助手 (TA)

---

### 1. ICU初期の日本語教育担当者の問題

1953年に国際基督教大学の開学とともに一期生外国人留学生10名の集中日本語教育が始まった。教職員として教壇に立ったのは小出詞子先生他数名の専任助手であった。終戦後8年の当時、「一番困ったことは既成の教師が得られなかったことだった」(注1 小出詞子(1987))と述べられているように、ICUの集中日本語教育に必要な教師を得ることが極めて難しい時代であった。「日本語教育とか日本語学とかいう分野はなく、日本語教師は職業として認められていなかった。それでやむを得ず、自前でやろうということで、まず教授法(1単位)を始め、翌年からだんだん拡張して1961年には専攻分野として確立された。」(注2 小出詞子(1987))と述べられているように、ICUにおける日本語教師養成が始まり、学年進行と共に日本語教師養成課目が開講されていった。

当時の『学生要覧』によると、1962年度には「国語学」に加え、日本語教育関連の課目として「日本語学」、「日本語教授法」、「日本語教育実習」、「日本語学研究：構文論」、「日本語学研究：構文論の諸問題」、「日本語学研究：音韻論」、「日本語学研究：系統論」、「日本語学研究：日本語の歴史」、「日本語学研究：方言学」が開講されている。

### 2. ICUにおける日本語教育課程の開講課目

「国際基督教大学では、その日本語教育課程を最低必要なものだけで1年間のプログラムに組み、日本語教育専攻以外の学生(研究生)にも公開している。それを紹介すると、必要条件：(1)日本語教育に職業的熱意が感じられること。(2)英語ができること(学生も問題点を知り説明するため)(3)日本語についての知識。最低必要課目：言語学入門3単位、春(4月～6月)日本語学入門3単位、春(4月～6月)日本語史入門3単位、冬(12月～3月)日本語構文論3単位、冬(12月～3月)日本語の歴史Ⅰ、Ⅱ、orⅢ3単位、外国語としての日本語教授法Ⅰ～Ⅱ3～3単位、秋(9月～11月)冬(12月～3月)」(注3 小出詞子(1972))と記され、これらの課目担当に学外の著名な先生方(柴田武、金田一春彦、亀井孝、小林英雄、松村明、森岡建二、中村通夫)が講師として迎えられた。

### 3. “Senior Fellow” 学部二期生の初体験

小出先生のお薦めで、私は1957年の4年次にシニアフェロー（senior fellow）という立場で一年間教壇に立ち、初級日本語（Elementary Japanese）コースを担当することができた。学習者は交換留学生やICUの外国人教職員とその家族であった。教科書は長沼の初級教材を用いていた時代であり、初級日本語のカリキュラムは集中日本語コースの初級部分を学習するように組まれていた。集中日本語コースでは最初の一学期（3か月）に学ぶ内容である。教授法は集中日本語コースで用いられていた教え方に沿った内容であった。教案を作成し、小出先生に提出し、許可を得たのち、4技能にわたる指導を教室で行った。小出先生が教室に何度か参観に来られ、授業後には教室での指導、活動に関する評価を受け、初めての教壇経験を重ねた一年となった。

ICUの英語教授法履修においても4年次には教育実習があり、三鷹市の中学校で実習を行ったが、2週間程の期間であった。英語教育の場合にも教案を練り、教壇に立ち実習校の担当教員の評価を受けたが、英語教育の場合には自分自身が中学時代に経験した英語学習が常に参照可能な体験としてあった。

日本語教育の場合には母語話者として無意識のうちに身につけた日本語習得経験を参照することは不可能であり、学習者の母語、年齢や外国語学習経験も一様ではないので、どのような学習のプロセスを経るのかは予測も難しく、日本語教授法や集中日本語コースを参観することで学んだ教え方を試行錯誤で生かしていく日々であったように思う。

文法説明等には英語を仲介語として用いることができたので、英語を実用する場となり、この経験で初めて英語能力を一層高めていく必要性を痛感し、ICUの一年次に受けた集中英語教育の有難さも実感した一年間であった。

シニアフェローの教壇経験は、その後の進路決定に大きく影響し、入学当時から目指していた英語教育からの方向転換を促した。母語である日本語を他言語話者に教えることに目覚め、また、日本語を教えることを通じて日本の生活、文化を発信できることに深い興味を覚えるようになった。ICUでの学部の専攻は英語学、大学院修士課程は英語教育であったが、大学院進学においても日本語教育能力を深めることを中心に考える段階になっていた。ICUの大学院進学にも小出先生の助言があり、経済的支援も得られる院生助手の可能性を知り、院進学への決意ができたことを思い出す。

### 4. Teaching Assistant (TA) の2年——ICU大学院修士課程に在籍して

学年進行にそって大学院が設立され、二期生の英語教育研究専攻で進学が叶えられ、同時に修士課程の2年間、集中日本語教育課程の院生助手TAとして日本語教育の現場を経験することができた。初級日本語から中級、上級日本語へのステップを一年で経る学習者を2年間TAとして教壇に立ち、かなり多くの時間を担当する機会を与えられた。上級日本語を終えた学習者は新聞を読む能力があり、一年でこのような高い日本語力を身につけ



ることには驚きであったが、それには高度な学習力に加え、強靱な意志力と体力が必要なことも知った。また、教壇に立つ側も周知の準備での対応が不可欠であり、学習者の質問や、同僚と交わす授業上の問題点で学ぶことの極めて多いTA時代であった。

このTAの2年がその後の進路を更に決定的にしたことは言うまでもない。TAの経験により、言語の仕組みを一層広く深く学ぶ必要性があることを強く感じていた。ICUの修士課程2年目に入る前に、小出先生から「次は留学ね」と助言があった。まだ自由に外国に出る時代ではなく、巨額の学資も必要な留学のお薦めに呆然としていたら、「試験をうけるのよ、留学試験を」とあっさり述べられ、驚いた。このお陰で、修士2年目の秋にフルブライトの留学試験を受け、修士課程を終えた年の夏に米国ミシガン大学大学院の博士課程（言語学）に進学が実現した。学部生時代には思っても見なかった、当時は夢のような軌道が敷かれた訳である。大学の4年次と修士課程の2年間、日本語教育の教壇に立った3年、ICUで学んだことがどれほど大きな収穫であったかをその後に深く知ることになる。留学先で言語学を専攻しようと望んだことも、日本語教育の現場で異なる母語話者に教える中、言語の仕組みを広く深く学ばなければならないと思うようになったからである。

私のミシガン大学留学の一年前に、丁度、小出先生もミシガン大学に留学されていたので、ミシガン大学の所在地Ann Arborでは小出先生が滞在なさったアパートに住むことになり、台所用品も引き継ぎ、初めての海外生活がスタートした。住む場所も探しまわることなく備えられたことは思いがけぬ恵みであり、これも小出先生のご配慮であった。

フルブライトの全額支給奨学金はもともと日米友好のためであり、一年の留学支援のみであったが、博士課程の2年目からはミシガン大学大学院生TAとして極東言語・文学学科の教壇に立つことができ、学費免除の恩典も与えられた。ICUのTA時代に培った日本語教育能力が評価された結果であり、当時はこのような経験をもつ院生が他にはいない時代であった。

小出先生は私のICU入学時にアドバイザーとして与えられた師であるが、未知の世界「日本語教育」に目を開かせ、学部生・院生の6年間、常に次に導き、生涯の恩師とされた方である。

## 参考文献

- 小出詞子（1972）「日本語教育について」『日本語教授法の諸問題』（文化庁編）大蔵省印刷局  
小出詞子（1987）「『日本語教師養成』遍歴」『日本語教育63号』日本語教育学会



## 第 6 章

---

# 日本語教師の職場

鮎澤孝子

**キーワード** 海外技術協力事業団 青年海外協力隊 アーラム大学  
アイオワ大学 姫路獨協大学

---

### 1. はじめに

1952年にICUが創設されて、小出先生は英語研修所助手として採用され、ミシガン大学で学んだ教育理論に基づいて、会話能力の育成に力を入れた。1953年4月にはICUが正式に開学、留学生受け入れに伴って、日本語教育が始まった。

1955年9月にICUで日本初のJunior Year Abroad Program（1年留学制度）が始まると、アメリカの大学からの留学生が急増し、日本語を受講する留学生が増えた。ICUの「集中日本語」を履修すると、全く日本語を知らなかった学生が1年後には日本語の新聞記事が読めるようになる。まだ、米国でも一般の大学では日本語教育が行われていないころであり、ICUでの日本語教育は注目を浴び、ICUで日本語を履修する留学生が急増し、ICUでは日本語教師が不足する事態に陥った。当時、日本語教師を育成している機関はなかったので、ICUは自前で日本語教師を育成することになった。1956年度にすでに開講されていた「日本語学概論」、「日本語教授法」、「日本語教育実習」の他に学外の著名な先生方を非常勤講師として迎え、日本語、日本語教育関係の科目が次々と開講された。

小出先生ご自身は1959年4月にICU教養学部助教授に昇任した。ミシガン大学の奨学金が支給され、ミシガン大学大学院に留学し言語学を専攻し、英語の分析方法を使って日本語の分析を行い、1960年8月にはミシガン大学大学院を修了し、Linguisticsの修士号を取得して帰国なさった。

1961年4月にICUに「日本語教師養成講座」の設立が認められ、日本語教育を専攻とすることが可能となり、1964年3月にICU 8期生の女性8名が初めて日本語教育を専攻して卒業した。私もその一人だった。

### 2. 青年技術者としての日本語教師

日本語教育を専攻してICUを卒業し、最初に日本語教師の職についたのは、海外技術協力事業団による「青年技術者」としての日本語教師だった。海外技術協力事業団から日本語教師募集のお知らせが小出先生に届いたのは1963年12月11日で、12日には応募書

類提出、20日には面接と慌ただしかった。面接には20名ほどの応募者が集まっていたが、合格したのはICUの3名と津田塾大学の1名およびその他の機関からの男性3名の計7名だった。

外務省のこの計画はアメリカの平和部隊を真似たもので、海外の発展途上国に青年技術者を派遣する計画だった。日本語教師も青年技術者としてアジアの発展途上国に派遣することが計画されていたようで、予算がついたので急に年度内に派遣することになったようだった。

派遣前研修が12月18日から正月休みにかけて国際学友会日本語学校で実施された。国際学友会日本語学校のテキスト『NIHONGO NO HANASIKATA』(HOW TO SPEAK JAPANESE)、『よみかた』、『日本語讀本巻一～巻四』が派遣先で使用されることになっており、これらを使った研修だった。

1964年2月12日にICUからの2名がマレーシア、3月31日に1名がインドに派遣された。

### 3. 派遣の待遇

待遇は「青年技術者派遣基本要綱」によるもので、任期は1964年2月12日から1966年2月12日となっているが、日本国政府と受益国政府の合意によって変更も可能とされていた。待遇は「往復渡航費支給(2等)、滞在費月額200ドル、本俸は月額15,000円を国内で積み立てる、支度料77,000円、携帯機材一人当たり50,000円となっており、旅券は公用旅券、定期報告を行わしむる。」とされていた。

実際には、マレーシアでは「クアラルンプール日本大使館」の日本語教師ということで准大使館員という立場であり、任期は日本語授業の学期の切れ目まで延長され、帰国したのは1966年3月23日だった。

### 4. マレーシアでの日本語教師

最初に派遣されたのは私たちICUの2名 大曾美恵子・鮎澤孝子で、マレーシアに送り出された。羽田空港を2月12日に出発、香港経由でバンコクに1泊し、14日にクアラルンプール空港に到着。クアラルンプール空港に降り立った途端にインド系の新聞記者に写真を撮られ、英語でインタビューを受け、翌日の『Straight Times』に掲載された

空港に出迎えてくれた大使館員が私たちをYWCAの宿舎に送ってくださった。14日から17日までは祝日続きで、銀行、郵便局、官庁、大使館は休みなので、自由に過ごすようにとのこと。17日には中国語の新聞『南洋商報』の記者がYWCAにインタビューに来て、翌日の新聞に記事と写真が掲載された。そのおかげで、町を歩くと店の人たちから「先生！」と声がかかることもあった。

18日に大使館に出かけ大使にご挨拶をし、日本語学校の準備を始めた。私たちの任期は2年なので3月中旬から3か月ごとの4学期制とし、授業開始のお知らせを新聞に載せ

ると400名以上の応募があり、びっくりさせられた。さらに日本軍政下で日本語教育を受けたという人がいることが分かり驚かされた。マレーシアの日本軍政下での日本語教育というのは、松永典子（『日本軍政下のマラヤにおける日本語教育』2000）によると、1942-1945年ごろのことで、今回の日本語クラス開講のほぼ20年前ということになる。当時の教科書を持ってきて見せてくれた人もおり、中級クラスの受講希望者は20名ほどで、文部省の役人や郵便局長などもいた。

日本語クラスの教室としてYWCAのホールを借りることができたので、日本大使館がホールの衝立や机、椅子を発注した。2名の教師で8クラス担当、各クラス週3時間の授業とした。初級クラスは1クラス30名ほどで、学習者は中国系が80%、その他はインド系、マレー系、ヨーロッパ系で年齢もさまざまで、母と娘の学習者もいた。

国立マラヤ大学からも日本語クラス開講の依頼があり、1年目は1クラスだったが、2年目は1年目、2年目のクラスをそれぞれ週に3時間、年間25週間日本語クラスを開講した。中国語科の科目なので、インド系の学生も漢字ができた。学習者は1クラス10名以下だった。

「クアラルンプール日本大使館日本語学校」の1年目の修了式（1965年3月）には日本のテレビ局の取材があり、大使が修了証書を授与する様子、大使館でのパーティーの様子などが日本で放映された。なお、1965年12月には朝日新聞の特派員による取材があり、1966年のお正月の特集記事「アジアの日本人」での記事になった。1965年3月に私たちが帰国した日の翌朝には、テレビ番組「木島則夫モーニングショー」に呼ばれ、マレーシアの日本語クラスの紹介もした。

このように「海外で活躍する日本語教師」がメディアで取り上げられ「日本語教師」という職業が一般に広く知られるようになり、小出先生からはICUでも日本語教授法を履修する学生が増えたというお手紙をいただいた。

## 5. 青年海外協力隊員としての日本語教師

「青年技術者」としての日本語教師は私たちが最後で、後任は「青年海外協力隊」としての日本語教師でマラヤ大学に派遣されている。後任の二人はICUの日本語教育専攻の9期生、柿倉侑子と豊田淑子だった。

1965年の9月に協力隊の日本語教師採用試験が行われ、1966年12月まで訓練があり、1966年4月に派遣されている。マラヤ大学で1966年度は初級Ⅰの学生14名、初級Ⅱは6名、1967年度は初級Ⅰが26名、初級Ⅱが13名だった。テキストは66年度も67年度もICUのテキスト『Modern Japanese for University Students』PartⅠが使われた。66年度初級Ⅱのテキストは前年度の継続のため、国際学友会日本語学校の『日本語讀本 卷一』が使われた。

「クアラルンプール日本大使館日本語学校」もマラヤ大学の許可を得て再開されたが、新聞で再開の広告を出すと200名もの希望者があり、半年から1年間待たないとクラスに

参加できない状況で、教材は国際学友会のテキストを使用した、中・上級のマレーシアの学習者に適した内容の教材を選ぶことが難しかったとのことである。

## 6. アーラム大学の日本語教師

アメリカの大学でICUから日本語教師が派遣されたのは、インディアナ州のアーラム大学だった。アーラム大学の学長はGLCA (Great Lakes Colleges Association)、五大湖大学連盟の運営委員のリーダーであり、ジャパン・スタディ・プログラムを開講するため、アーラム大学の卒業生でハーバード大学のライシャワー教授のもとで博士号を取得したジャクソン・ベイリー教授がアーラム大学に呼び戻された。

ベイリー教授はライシャワー駐日アメリカ大使にアメリカの大学生のために日本でのプログラムを作りたいが、適切な大学はどこかと問い合わせたところ、早稲田大学の大濱信泉総長に紹介された。大濱総長は早稲田大学に国際教養学部を創設し、日本語・英語のバイリンガルで、大学運営の仕事やGLCAの学生のホームステイ先の相談相手になれる人材を配置し、GLCAからの客員教員を国際教養学部の運営委員会に迎えた。

1963年に早稲田大学とGLCAの間で1年間の学生交換留学・教員交流プログラム (Japan Study Program) が始まった。当時のGLCA 12校 (のちに13校) で日本語コースを常設していたのはアーラム大学だけだった。1964年に最初にアーラム大学に日本語教師として赴任したのは、ICUでは英語教育専攻だが、日本語教授法などを履修していた7期生の萩野美佐子だった。その後任として1965-66年に赴任したのは日本語教育専攻8期生の村上健子、その後任に派遣されたのは日本語教育専攻9期生の十日市健介だった。

1975年から1979年は、1972年からオハイオ州立大学大学院の言語学科博士課程で博士論文に取り組んでいたICU 8期生の大曾美恵子 (学部卒でマレーシアに派遣され、帰国してICUで言語学の修士号を取得しオハイオ州立大学博士課程に留学) が初めて常勤でアーラム大学の日本語を担当し、1976年には博士号を取得、助教授に昇進したが、その後、オーストラリアのアデレード大学に赴任した。

1970年代に入るとアメリカでも日本語を開講する大学が増えた。ハーバード大学やコロンビア大学ばかりではなく、州立大学やGLCAの大学でも日本語を教えるところが増え、日本語を教えられる教師が求められるようになった。

筆者は、ICUの大学院修士課程を1969年に修了し、ICUの日本語課で助手をしていたが、ICU教員の曾我松男先生からアイオワ大学で日本語を開講するので、助手としてアイオワ大学に行かないかとお誘いをいただいた。そのお誘いを受け、アイオワ大学に行くことにしたが、ICUの修士号が (当時は) 「英語教育」となっていたため日本語教育の助手として教えることは認められず、アイオワ大学でSpeech Pathology & Audiology (言語病理学・聴覚学) の修士課程の院生となり、日本語教育の非常勤助手になった。結局、博士課程までアイオワ大学で勉学を続けながら日本語を教え、1977年にはハワイ大学の東亜言語学科の客員助教授となり、1979年に日本語のイントネーションに関する博士論文を提出し

て1981年に日本に帰国し、鹿児島大学教養部の助教授に採用され、日本人学生の英語教育と留学生の日本語教育を担当した。鹿児島大学在職中に国際交流基金の派遣により、インドネシア大学で1年間日本語を教える機会を得ることができた。帰国後は、国立国語研究所、東京外国語大学、国際教養大学において、日本語教育、日本語音声研究、日本語音声教授法を専門領域として日本語教師養成にかかわってきた。

## 7. 国内外の日本語教師の就職先

ICUの日本語教育専攻プログラムは1961年に始まったが、他大学では日本語教師の養成はまだ実施されていなかったため、国内のさまざまな機関で日本語教師としての職につくことができた。

なかでも、インターナショナル・スクール、アメリカン・スクール、聖ヨゼフ日本語学院の日本語教師として、ICUの卒業生が多く採用されている。ICUの卒業生は英語力があり、キリスト教系の高校の卒業生であったり、海外経験があったりすることも影響しているだろう。

聖ヨゼフ日本語学院の学習者は修道士で日本での伝道活動のために日本語の修得が重要でICUの教科書による日本語教育が行われた。レベルごとに少人数のクラスが編成され熱心な授業が行われた。

杉浦まそみ子は10年間聖ヨゼフ日本語学院で日本語を教えたが、日本への修道士派遣が減少し聖ヨゼフ日本語学院は閉校になった。ほかに9期生の下村彰子他も聖ヨゼフ日本語学院、上智大学での日本語教育に携わっていた。

一方で、インターナショナル・スクールの日本語教師は日本社会の国際化とともにますます求められてはいるが、年少者、中学生、高校生の日本語教育はますます困難な状況になっているとのことである。

学習者の日本語能力は年齢に関係なくさまざまであり、学習者の母語も多様であること、学習者に適した日本語教材を見つけにくいこと、日本語の必要度が個人によって異なることなどに加え、教室での学習態度をコントロールすることが日本人教師は苦手であることなどが挙げられている。

日本の学校に進学したいという学習者のニーズに対応するためには、日本語教師は、小・中学校の教員資格を持っていることが必要である。

小出先生は1987年にICUを定年退職なさって、同年4月に開学したばかりの姫路獨協大学に外国語学部教授として着任なさった。この大学では日本人学部学生は日本語教員養成プログラムの単位修得証明書のほか、国語科教員I種免許状の取得も可能であり、1991年に開設された大学院は夜間の言語教育研究科なので、現職の日本語教師、および国語教師が日本語教員養成プログラムの単位修得証明書、国語科教員専修免許状を取得することができる。公立小・中学校に在学する外国人子弟の日本語教育のための日本語教員養成が行われているということになる。

日本語教員養成プログラム修了者はオーストラリアの小学校・中学校に日本語教育の助手（ATJ Assistant Teacher of Japanese）として送り出されており、毎年オーストラリアのヴィクトリア州政府教育省から担当者が来日し、応募者の面接を行う。英語力・日本語教育についてだけではなく、オーストラリアの子どもたちを教える資質についても審査される。1996年2月から2008年2月までに43名が合格していると報告されている。なお、初年度に派遣されたうちの2名は1997年にヴィクトリア州の公立学校に正規教員として採用されているとのことである。

国際化が進むにつれて、日本語教育の多様性も広がっていることがわかる。これからも、さまざまな日本語学習者が増えていくものと思われるが、その流れに対応した日本語教材・日本語教授法の開発に力を入れることが重要であると考えられる。

### 謝辞

角谷明子さんには「アメリカの日本語教育現場と開拓」という未発表の原稿をお送りいただきながらも、それを十分に活かすことができずに申し訳ありませんでした。

足立健子さん、杉浦まそみ子さんにも情報を頂き、ありがとうございました。



## 第 7 章

---

# 小出詞子先生と日本語教育学会

上野 田 鶴子

**キーワード** 小出詞子 日本語教育学会 日本語教育学会理事  
「外国人のための日本語教育」 日本語教育学会編集委員会

---

### 1. 「外国人のための日本語教育学会」発足

「外国人のための日本語教育学会」（以下、学会）は1962年6月に設立されている。

同年5月3日～5日には国際基督教大学において「日本語教育セミナー」が開催され、これには日本語教育研究室のスタッフが総力を挙げ（文献2「小出詞子年譜」参照）、本セミナーが「外国人のための日本語教育学会」発足を促すこととなったと記録されている。（文献2「まえがき」参照）

学会創立総会は6月16日、17日の両日、慶応義塾大学で開催され、釘本久春日本語教育学会設立準備委員ほか発起人235名の中には、池田弥三郎、小川芳男、金田一京助、倉石武四郎、阪倉篤義、佐久間鼎、寿岳章子、鶴見和子、土居光知、時枝誠記、波多野完治、服部四郎、平山輝男、吉川幸次郎等、当時日本語教育に携わっていた方々以外の名前もあり、講堂を埋め尽くす参加者を得て、学会誕生となった（文献2「まえがき」参照）。

### 2. 日本語教育学会における小出先生の役割

小出詞子先生は「外国人のための日本語教育学会」創設より1977年2月まで理事として学会の運営に直接かかわられ、更に、学会が1977年3月に「社団法人日本語教育学会」として発足後も理事として1987年5月まで重責を担われた。通算25年、四半世紀にわたる日本語教育学会運営に直接貢献されたことになる。この間学会長には鳥養利三郎、小川芳男、林大の3氏が順に着任している。

学会は会誌『日本語教育』を学会発足年の1962年より刊行しているが、小出詞子先生は1971年4月から1985年6月まで14年にわたる編集委員会委員の役を担われた。この間、1981年4月より1985年6月の4年間は編集委員長として、会誌の順調な刊行に努力された。

会誌の編集に特集を掲げることは7号（1965）「は」と「が」にも用いられているが、17号（1972）以降は特集による各号の特徴が以下のように見られる。特集を設定することによって投稿原稿も集まり易くなったであろうが、特集のあり方が日本語教育の当時の問題を反映している。特集の選定には日本語教育の現場を永年経験し、また海外での日本

語教育事情にも視点をもつ小出詞子編集委員の存在は極めて大きかった。

45号～56号の特集は編集委員長としてとりまとめられた構成となる。

- 17号 (1972年9月) 語いの与え方、辞書の使い方
- 18号 (1973年3月) ローマ字使用について
- 19号 (1973年5月) 海外における日本語教育の問題点
- 20号 (1973年8月) 文法について
- 21号 (1973年9月) 導入期の問題
- 22号 (1973年12月) 日本語教育の最終目標
- 23号 (1974年3月) 進んだ段階における話し言葉の指導
- 24号 (1974年8月) 日系人のための日本語教育
- 25号 (1974年12月) 日本語教師論
- 26号 (1975年3月) 言語理論と日本語教育
- 27号 (1975年8月) 「日本語教育」と文化
- 28号 (1975年12月) 動いている日本語
- 29号 (1976年4月) 留学生の日本語教育以前の問題
- 30号 (1976年8月) 初等中等教育における日本語教育
- 31号 (1976年12月) 教師養成・研修・資格認定について
- 32号 (1977年4月) 評価と標準テスト
- 33号 (1977年7月) 日本語の表現 一慣用語句、特別な言いまわし
- 34号 (1978年2月) 文法上の誤用例から何を学ぶか
- 35号 (1978年9月) 敬語と敬語指導をめぐる問題
- 36号 (1979年2月) 文字を書く
- 37号 (1979年3月) 中級をめぐる諸問題
- 38号 (1979年7月) 日本語教育における視聴覚的方法
- 39号 (1979年10月) 国別の問題点 (1) ASEAN 諸国の日本語教育
- 40号 (1980年3月) 母語別教材とは何か 一その理想と現実一
- 41号 (1980年7月) 国別の問題点 (2) 中国における日本語教育
- 42号 (1980年10月) カタカナ書き
- 43号 (1981年2月) 表現の指導 一書くことを主として
- 44号 (1981年6月) 日本語教育への提言
- 45号 (1981年10月) 国別の問題点 (3) オーストラリア・ニュージーランドにおける日本語教育
- 46号 (1982年3月) 初級のカリキュラムとその教授法
- 47号 (1982年6月) 動詞の研究
- 48号 (1982年10月) 国別の問題点 (4) 韓国における日本語教育

- 49号（1983年2月） 言語行動
- 50号（1983年6月） 日本語教育の現状と今後の展望（創立20周年記念号）
- 51号（1983年10月） 専門別の日本語教育—科学・技術系学生にどう対応するか
- 52号（1984年2月） 動詞指導の問題点
- 53号（1984年6月） 中南米諸国における日本語教育
- 54号（1984年10月） コンピュータと日本語教育
- 55号（1985年3月） 日本語教育と外国語教育
- 56号（1985年7月） 接続の表現

編集委員に着任の1971年から編集委員長を終えられる1985年までには『日本語教育』16号～56号が発刊され、14年にわたる編集委員会における活動で学会誌刊行に力を注がれた。

この14年間の後半はインドシナ半島からの難民定住のための日本語教育、中国からの帰国者定着のための日本語教育も加わり、日本語教育界が大きく変化した時代である。学会誌も年3回の刊行を求め、その後は季刊へと変わった。日本語教育学会員の急増を見せた時代であり、学会発足当時は3桁の会員数が4桁となり、21世紀の4千人台に向かうこととなる。

学会誌16号～44号の28冊には編集委員としての11年（1971～1981）、45号～56号の12冊には編集委員長としての5年（1981～1985）を過ごされ、年2回の学会誌刊行を年3回の刊行にとリーダーシップを発揮された。諸事情で学会の会場には参加できない多くの会員にも学会活動が直接伝えられるのは学会誌であるとの信念に基づいた忍耐と努力の献身であった。

### 3. 学会における表彰

平成10（1998）年3月14日に学会功労者として表彰された。3月14日には日本語教育学会創立35周年・社団法人20周年記念式、学会功労者表彰及び国際シンポジウムが臨時総会に合わせ開催された。小出詞子先生他17名が表彰されている。<sup>(注1)</sup>

注1 日本語教育学会の記録を事務局大塚徹氏を通じて確認。

尚、四半世紀余を遡る1971年には文部大臣賞をNHK放送番組“Let's Learn Japanese”テキスト作成に受賞している。（「小出詞子年譜」文献2 参照）

### 参考文献

- 1 『日本語教育』1～56号
- 2 『日本語教育論文集』編集委員会（1997）『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』 凡人社



## 第 8 章

# 朝日カルチャーセンター日本語教師養成講座

佐々木 倫子

キーワード 朝日カルチャーセンター (ACC) 日本語教師養成講座  
修了生 キャリア 人づくり

### 1. 新宿住友ビルと朝日カルチャーセンター (ACC)

話を 2016 年に戻して始めることをお許しいただきたい。日本は地震国である。しかし、21 世紀の今、各地に高層ビルが建ち並び、現代建築の技術を誇示している。東京 23 区を中心である新宿にも、副都心と呼ばれる超高層ビル街がある。どのビルも自信をもってそびえたっているように見え、この姿は未来永劫に存続するかのようだ。しかし、そんな姿が副都心に出現してまだ半世紀に達していないのである。それは 1972 年の京王プラザホテルに始まった。

京王プラザホテルに続いて 1974 年に完成したのが新宿住友ビルである。完成時には日本一の高さを誇った別名三角ビルはあたりに輝いていた。ビルの最上階にあたる 49 階から 52 階までの 4 つのフロアには展望レストランが競うように並び、地下 1 階には住友三角街と呼ばれる商店街が多くの買い物客を集めていた。第 1 次石油危機から立ち直り、成長する日本経済を身をもって示すようなビルだった。そのビルの開館と同時に 4 階と 48 階でスタートしたのが、朝日カルチャーセンター (以下、ACC) である。朝日新聞の文化活動の一環として、一般の成人男女を対象に生涯学習を推進・普及する目的で作られた。

開設から 41 年後の 2015 年 4 月に、12 人の女性が新宿住友ビル 52 階のレストランに集まった。この日集まったのは 50 代から 80 代の、元気で、頭の回転の速い、洗練された女性たちであった。後述する「いろはの会」の会員たちである。レストランではいつものように話に花が咲いたが、同時に、久しぶりに訪れた新宿住友ビルの閑散とした雰囲気も誰もが感じずにはいられなかった。

「私たちが通っていたときはいい時代だったのね。」

のひとことが、皆の気持ちを代弁した。「私たちが通っていたとき」は、小出詞子先生が ACC で活躍していた時代である。

そして、2016 年 10 月現在も、新宿住友ビルはあいかわらず銀色の姿を輝かしている。しかし、ビルをとりまく空は、他の高層ビルによって小さく区切られている。レストラン街でも、開いている店は半分にも満たない。地下 1 階は内装解体中である。別館には日本

草分けのフィットネスクラブが誕生し多くの人で賑わったが、2008年に閉館した。空きビルのままの状態が続いたが、やっと2016年7月から内装解体が始まった。ACC日本語教師養成講座も変化を経た。本章では、まず小出先生が「民間初の本格的日本語教師養成講座」で何を目指し、どのような講座を展開し、どのような社会貢献を果たしたかをたどりたい。

## 2. 小出詞子先生のいた時代

### 2.1. ACC日本語教師養成講座とは

ACCは朝日新聞社の文化活動として、1964年に名古屋でオープンした。そして、10年後、満を持して始まったのが新宿のACC東京である。開設時は、大小15の教室で「広く老若男女を対象に教養、趣味、生活文化の向上、健康の増進、企業の研修を目指すものなど13コース、約140科目、240クラスを編成」し、開講時の1974年4月には受講者数が9,724人に達するという大盛況を見せた。(矢野 1984: 108) その後25階も加え、教室の増設が続く。そして時が移り、求められる講座を探りつつ、常に再編成がなされ、やがて2009年には会社の組織自体にも変更がなされた。ACC東京、名古屋、大阪、九州の4社が合併して一社化し、同時に旅行業の(株)JTBの資本参加を受けたのである。ホームページの会社概要には、2016年10月現在、全国13教室を拠点として展開中で、教養、語学、趣味、実益、健康などにかかわる講座を数多く設け、日本で最大級の生涯学習センターとなっているとある。

では、その中で日本語教師養成講座は、どのような位置づけをされてきたのだろうか。講座開設は、ACCの矢野俊一常務(当時)が小出詞子先生と米国留学の同期生だったという縁から始まった。始まりは矢野常務にあったが、あのような本格的な講座にしたのは小出先生の熱意である。「何年かかっても所定の10科目の講座を受け、全科目の試験に合格すれば修了証を差し上げるというものです。この受講者に限って資格を四年制大学の卒業者ということにし、毎年、5月、8月、11月、2月と年4回、作文と外国語の試験をして受講者を選抜することにしていきます」(矢野 1984: 117)と語られているように、おけいごとの、教養的な科目も多い中で、異色の存在であった。このような形で、向学心の強い社会人、特に女性と、ACC日本語教師養成講座とが繋がったのである。

ひとつの科目は毎回2時間1コマで週1回の授業が12週続くので、計24時間となる。必修10科目の総計は240時間となり、現在でこそ「420時間」は必要とされるが、1974年当時あっては他に類を見ない本格的教師養成講座と考えられた。「日本語概論」から始めて、1学期に3科目ずつ受講すれば、4学期、つまり、1年で全10科目を受講終了する計算になるが、「日本語概論」を受講済みでなければ、「日本語教授法Ⅰ」を受講することはできず、「日本語教授法Ⅱ」はⅠの修了後、ⅢはⅡの修了後という制約があるので、最短でも1年3か月程度はかかることになる。ただ、受講生が自身の生活パターンに合わせて選択できるように、同じ科目が1年に3回、朝、昼、夜と時間帯を変えて設けられる

ので、期間は長引くが、昼間仕事のある人は夜だけの受講で全コースを終えることができ、逆に昼間だけの受講でも全コース修了が可能である。社会人のために柔軟な受講体制を用意したのである。

最初の総合講座案内の情報は以下のとおりであるが、日本語教師養成講座の受講生には、より詳細な受講案内が配布された。

表1 最初の講座案内

(1974年4月) (一部字句を調整)

日本語教育—外国人に教えるために		
外国人に対する優秀な日本語教師養成が、国の内外で強く要請されているのにこたえた、一流講師陣による本格的な常設講座。各コースとも試験を行い、全コースを終了した方には修了証をお渡す。10のコースのほかに、月1回程度の公開特別コースを開く予定。		
講座名	講師	内容
日本語概論	東大教授 柴田 武	日本語はむずかしいか、非論理的かなど日本語の音韻、構文、語い、文体などについての一般的概論。
日本語教授法Ⅰ	ICU 準教授 小出 詞子	キリシタンものにさかのぼる日本語学研究、日本語教育の歴史、現状での問題点解明などが講座の中心。
日本語と日本文化	慶応大学言語文化研 教授 鈴木 孝夫	他国の言語、文化を対照しながら、日本語および日本文化の特殊性を明確化。
日本語の音声	国立国語研第一研究部 部長 野元 菊雄	日本語の単音、モーラの教え方、アクセントなどを概括、外国語との対照を試みる。
日本語教授法Ⅱ	ICU 準教授 小出 詞子	日本語教授法Ⅰに続くコース。代表的な教材をとりあげての研究。
日本語教授法Ⅲ	ICU 準教授 小出 詞子	日本語教授法Ⅱに続くコース。日本語教授を実地に見学。実習も行う。
日本語の構文	早大講師 池田 摩耶子	日本語の基礎構文、その変形、特に助詞の使い方などに重点を置く。
表現と語彙	国立国語研究所 書きことば室長 西尾 寅弥	日本語の表記（ローマ字・かな・漢字）の問題点を考慮し、同時に単語の意味論的考察を行う。
日本語の歴史	上智大教授 森岡 健二	日本語の変遷をたどる。特に近代以後から現代語に至る過程を解明する。
日本の方言	都立大講師 W. A. グロータース	外国人の見た日本の方言研究。日本の方言の発生、構造、変化を解明、比較を行い、標準語との関係を考察する。

各講座の担当講師は、それぞれの分野で誰もが第一人者と認める方々である。開設当初は、まだ大学の社会貢献などということは普及していなかった時代で、民間の生涯教育の重要性は浸透しておらず、国立の大学、研究機関はこのような場での講義担当を快く許す時代ではなかった。しかし、小出先生の「ひとつの大学院よりも大学院にふさわしい、大学組織を超えて、一流の先生方を集めて受講生に提供したい」という熱意が各講師を動かし、出講を可能にした。小出先生の人柄と、ごく自然に新しいことをやってしまう天真爛漫さと日本語教育にかける情熱のたまものと言えよう。

小出先生自身も民間の組織で複数の講座を担当するということに対して、本務の大学で必ずしも好感ばかり持たれていたとは思えない。しかし、日本語教育の世界が優秀な社会人の養成と活躍を待っていると確信していた先生は、狭いアカデミズムにはこだわらなかった。そして、小出先生には不動の目標があった。次の世代を育て、日本語教育を常に前進させることである。自分が先頭に立って道を切り開いても、自分が目立ち続けることには関心がない。次の世代を育てることに徹した結果、最初はともかく自分が始めるということになったというほうが当てはまる。その証拠に卑近な例をあげると、1978年から「日本語教授法Ⅱ」はまだ30代半ばだった筆者との共同担当となり、1981年からは筆者の単独担当に移行し、1991年から次の講師に引き継がれるというふうに、常に新陳代謝が図られた。

増加する受講生にあわせ、開設10年後には、1学期に8講座程度、さらに、20年後には、16講座プラス公開講座といった形にまで広がった。文化庁（2000）の日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議による「日本語教員養成における標準的な教育内容」の報告を受け、2002年には必修17科目の制度となった。必修講座修了までの受講時間は408時間となり、さらに日本語・日本語教育関係の公開講座が設けられ、合計420時間を超えるプログラムとなったのである。

また、開設当初から外国人のための日本語講座も設けられ、常任講師が担当して、授業見学のための配慮もなされた。それは1974年秋学期には4クラス、1年後には6クラスと順調にレベルをふやしている。2年後には9クラスにふえて、集中コースのレベルも初級から上級まで6コースそろい、充実ぶりをうかがわせる。講師陣は「指導・国際基督教大（ICU）準教授 小出詞子 ICUの日本語教授法コース出身者による講師グループ」であったが、後にはACC日本語教師養成講座修了生がかかわっていく。

日本語教育という分野はグローバリズムの波の中で確実に成長を続けてきた。文化庁文化庁国語課による国内の日本語教育の実態調査も、国際交流基金による海外の日本語教育機関調査も、それを物語っている。2016年現在、大学、大学院の日本語教育関係の課程による教員養成と、民間の420時間単位を満たす日本語教師養成講座が、驚くほど多数存在する。質より量の時代の様相を呈しているかもしれない。そのような中で、2015年5月にACCから日本語教師養成講座に関わる講師に対して、1通の手紙が発送された。そこには、近年、ACCの日本語教師養成講座の受講者数が低迷を続けてきたこと、40年続い



た伝統を守るべく努力を重ねてきたが、ここに来て存続を断念せざるを得ない状況に立ち至ったことが書かれていた。40年余のACC日本語教師養成講座の歴史は、十分な社会貢献を果たした上で、2018年6月にその幕を静かに閉じる予定である。(注：予定通りに閉講され、全修了生は2,945人に達した。)

### 3. ACC修了生が示す社会貢献

#### 3.1. ゆとりある層の社会貢献

筆者が南米に日本語教育事情の調査に出張した時のことだった。その地の日本国総領事の夫人がACCの修了生であった。夫人は日本へ留学を希望する若者たちに、ボランティアで日本語を教えていた。レセプションで、夫である総領事は筆者に対して、夫人が授業の前日の夜中までかかって教材準備をすることに言及し、「1時間か2時間の授業のために、真夜中まで準備をしている。日本語教育ほどコスト・パフォーマンスが低い仕事は見ることがない」とひとこと発された。このきつい冗談には、日本語教育界の課題として、小出先生も気かけられた、ひとつの限界が示されている。冒頭で触れた「いろはの会」のかなりのメンバーも、高い学歴と安定した収入のある家庭を持っている。それは日本語教育分野の仕事につくとき、経済的にはこだわらない選択ができるということを意味する。こだわるとすれば、2016年10月現在「103万円の壁」などと論議を呼ぶ配偶者控除のうちにとどまるか出るかという点であり、明日のパンのために収入をどう得るかという点ではない。

「いろはの会」のような修了生の会は、同期に修了する人たちによって自主的に結成されていた。ACCも小出先生もOB会を奨励はしても、一切手は出さない。1978年冬学期の修了生のうちの12名によって結成された「いろはの会」は、その中でも最長の会である。「中級文型」「副詞」といったテーマを決めた勉強会には、のちに加わった会員も含む、常時20名程度の出席者がいた。2004年には成立25周年記念パーティーを持ったが、「何よりも小出先生、そして、「いろはの会」のメンバーとの出会いはかけがえのない宝物だと思っています」と、メンバーの林さんは言う。会は37年間続き、2014年の解散後も食事会が折りにふれ行われている。2016年10月にも行われ、ACCで培われたネットワークが今も続いていることを示している。

「いろはの会」の複数のメンバーが、この40年近く行ってきたものに、ヨーロッパやアセアンからの農業研修生に対する日本語研修プログラムがある。全く日本語を知らないゼロスタートの研修生に与えられた日本語研修時間はわずか1週間。研修後には個別に日本の農家や庭師の家庭に入り、自分の意思を伝え、相手の言うことを理解しなくてはならない。長期間担当した牧野さんによると、一日の生活を共にしながら目に入る物の名前を教え、研修生が必要とする専門用語を優先し、文法はあまり複雑でなく、最低限意思が伝えられるものに限ったという。片仮名も作物名や「トラクター」などの専門用語で教え、日本語母語対訳の、作業場にも持って行けるポケットサイズのテキストも作った。そして、

どうしても言っていることが通じない時には、テキストに書いてある母語を指してその横の日本語を見てもらう。逆に、相手の言っていることがわからない時には、テキストのどこかを指してもらって母語訳を見る、という方法を教えた。どのようにして周囲の日本人から、知らない漢字や語彙を聞き出すか、どのように自分で日本語力をつけていくかを共に考えて送り出すという、ストラテジー重視のカリキュラムを組んだのである。このような教育実践は、小出先生をはじめとするACC講師が教師養成講座で提供した知識から開放されたものである。小出先生も多くの「いろはの会」の会員のように、社会的にも経済的にも恵まれた階層に生まれたが、その階層が持ちがちな保守性から解き放たれた人であった。それをACC修了生の中にも見出すことが出来る。

近年、国内の日本語教育界では、外国人就労者とその家族の増加にあわせ、地域日本語教室が多く開設されている。日本語ボランティアの活躍が見られ、その中には学習者支援を続けている中で生じた課題や日本語教育への関心から、民間の日本語教師養成講座を受講する人々もいるし、逆に、日本語教師養成講座を修了してから外国人の支援につく人々もいる。教師養成講座の受講料はそれなりの金額を要するが、年配者の場合、修了後日本語教育機関へ就職することは少ない。経済的見返りを得るわけではないが、高い水準を持つ講義がなされる場合、純粋に知的に触発されることもあり、さらに、修了後のボランティア支援についた場合、より自信の持てる、より楽しい活動となる。このようにして、退職後の男性も含めたゆとりある層が、有償・無償のボランティアとして日本語教室を支えてきた。

教師養成講座の比較的若い修了生は、日本への留学生の最初の受け入れ窓口となる日本語学校で教師になる人々も少なくない。しかし、謝金は総じて高くはない。経済的にゆとりのある階層の人々がしっかりした専門的な仕事を低い謝金ですることにより、日本語教育の分野が寄りかかってきてしまったのである。小出先生は当時、ネイティブというだけでそれなりの謝金が得られた英語教育に比して、日本語教育では仕事の質に見合う収入が得られないという状況を憂いていらっしやう。そして今も、これから家庭も家も持ちたいという、若い有能な人材が、経済的理由で他の分野の仕事を選ぶ状況が見られる。私たちはいつまでこの状況が続けるのだろうか。

### 3.2. キャリアを築いた修了生たち

ACC修了生の中には、「配偶者の壁」ととらわれず、結果として、専門性が経済的にも見合うキャリアを築いた人々もいる。以下に、5人の修了生のキャリアと小出詞子像を紹介したい。

#### 3.2.1. 文野さんの場合

文野さんの受講開始は、1977年秋学期である。1970年代当時は、社会で活躍している女性はまだまだ少なく、女性が社会に出るための情報も限られていた。身近なロールモデルといえば、高校の英語教師くらいで、女子大の英文科出身の文野さんは「日本語教師」とい

う専門職があることすら知らなかったという。大学卒業直前に結婚し、3人の子の母となり、育児と家事に追われる生活が約10年続いたとき、母親が亡くなった。その死をきっかけに自身の将来を考え始めたとき、たまたま目にとまったのがACCの案内だった。文野さんは、「大学院レベルの勉強ができます」というフレーズに知的好奇心を刺激され、子育てで真最中であったにもかかわらず迷わず日本語教育の世界に飛び込んだという。

ACC 修了後、日本語教師となった文野さんは、キャリアを積みながら、勉学を継続する。国立国語研究所長期専門研修、ご主人の赴任とともに渡った米国のコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ修士課程、そして、名古屋大学博士後期課程を修了し博士号を取得、それぞれが新たなキャリアにもつながっていく。日本語教育の分野では、民間日本語学校を皮切りに、米国のC大学、日本のK大学、W大学、N大学など、本務校での教授職のほかに、非常勤を含めて8大学で教えた。また、難民定住促進センター、国際交流基金日本語国際センターなどの機関でも教えている。さらに、日本語教師養成の分野で、2つの機関、2つの法人、5大学と、実に多様な場で、教授法、実習コースなどを中心に教師養成も担当してきた。文野さんの軽やかな多彩な活躍は、まさに小出先生を思わせる。

文野さんにとって小出先生とは、日本語教師人生の「原点でありロールモデル」だという。「小出先生がACCを民間人に開設してくださらなければ、私は日本語教育とは無縁の人生を送っただろうし、小出先生の教育理念とその実現に向けた情熱・実践力を目の当たりにせずして、私の教育観も教師キャリアもなかった」と言い切るのである。

### 3.2.2. 石橋さんの場合

石橋さんの受講開始は、1980年夏学期である。石橋さんはアメリカ滞在中に初めて日本語指導をした。その際、日本語を母語としない人に指導をするには、外から客観的に見た日本語を学び直す必要があると痛感した。が、1976年に帰国後住んだ大阪では日本語教師養成講座はなかった。3年後に東京に転勤し、ACCを知った。

石橋さんもまたACC受講の大きな動機は、大学院レベルの授業を開講していることにあったという。大学で教育心理学を専攻した石橋さんは、言語についてはほとんど知識がなかった。そのため「日本語教育の指導のノウハウよりも、日本語そのものを深く知りたいという気持ちが強かったのではないか」と自身を分析する。そして、当時のACCの授業は期待を裏切らない講義が多く、専門外の石橋さんは国会図書館に通いづめで文献を読みあさったという。

ACC 修了後は民間の日本語学校の教務主任を経て、2つの大学で副専攻の日本語教育関連の授業を受け持ちつつ、T大学で予備教育の日本語に携わった。教育に携わっている中で様々な疑問が生じ、それを明らかにする研究に取り組みたいと考えようになった石橋さんは、お茶の水女子大学大学院修士課程に合格、そのまま、博士課程まで進み、博士号を取得した。その後は国立大学の留学生センター設置に教授として関わり、定年退職後はタイ初の日本語教育専攻の大学院を設置するためタイに出向き、4年を過ごした。そこで修士課程の3期生までを輩出させ、タイの大学の教師育成、研究者育成に貢献している。

帰国後もS大学大学院で特任教授として5年間勤務した。

国立大学の留学生センターに在職時に、留学生センターの教員が必ずしも高く評価されていなかったことを感じた石橋さんは、大学内でも、語学教師という位置づけでなく、研究者として位置づけられるように、毎年必ず新しい研究をして発表することを自分にもセンターの教員にも義務づけたという。学問としての専門性を確立することが日本語教師の地位向上につながるという思いは、常に日本語教育のレベルアップに貢献された小出先生の姿を見て学んだと石橋さんは言う。

小出先生の影響として石橋さんが挙げたのは、小出記念日本語教育研究会での出会이었다。第1回から先生とお話する機会もあり、研究と教育の両面から専門性を高めたいという強い意志と行動力を感じた。石橋さんもまた、先生をロールモデルとして仕事をしてきたように思うと言う。

### 3.2.3. 柏崎さんの場合

柏崎さんの受講開始は、1982年夏学期である。前年に「中国残留孤児」第一次集団訪日調査が開始され、肉親が判明した帰国者が近隣の東京都特別区の住宅に入居してきた。そこではACCの修了生たちが日本語教室を立ち上げた。柏崎さんも何か手伝えることはないかと教室に参加し、日本語を教えるうちに、しっかりと日本語教育について学ばなければと考えてACCに通うようになったという。

ACC修了後は、大学の付属日本語学校その他で教える中で、更に日本語教育研究を深めたいと考え、東京外国語大学大学院に入学した。そして、修士号取得後は、東京外国語大学留学生日本語教育センターに勤め、最後は教授として退職した。

小出先生が話された日本語の世界は、目から鱗が落ちるような内容で、毎回、一言一句も聞き逃すまいと集中していたと、柏崎さんは言う。帰宅すると必ずノートを復習して、分からないことがあれば、次の回に先生に質問することを繰り返した。先生はいつも、にこやかに、丁寧にご教授くださった。そして、何といっても印象に残っているのは、小出先生が前の方の席の受講生を学習者に見立てて、モデル授業を示してくださったことだという。ソフトな雰囲気先生から、ポンポンと、エネルギーで、テンポの速いキューが出されるのを見て、感動したのを覚えているという。現在、様々な場所で日本語教師養成に関わっている柏崎さんにとって、この時の先生のモデル授業は原点にある。初めて日本語教育の門戸を開こうとしている受講生には、日本語教育を具体的にイメージできるように、自身モデル授業をしているという。ただ、現在は、教授法のひとつとしての紹介にとどめるが、柏崎さんのライフワークとも言える日本語教育のスタートはACCにあり、その講座を率いていらした小出先生にあるとする。

以上、3人のキャリアを築いた修了生を紹介した。3人に共通しているのは、ACCとの出会い、小出先生との出会いが、日本語教師としてのキャリアの出発点だったことである。ACCの「大学院なみ」の講座受講後、3人はさらに「大学院」に進む。大学教授としてアカデミックな世界での活動を終えたのち、現在も研究会を中心に活発な研究・教育活動を

行っている。

### 3.2.4. 康さんの場合

康さんの受講開始は、1977年冬学期である。康さんは、同じ日本語教育の世界でも、上記3人とは少し異なるキャリアを築いた。20代でACCの受講を開始し、当時若手だった康さんも今や60代前半である。受講のきっかけは、大学卒業後に留学した韓国での出来事にある。日本語を教えてほしいと頼まれ、気軽に応じてはみたものの、それが間違っていた思い込みだったことにすぐに気付かされた。日韓両国の交流に役立ちたいという思いが強かった康さんは、帰国後、ACCに通うことにした。しかし、このことが自分の生涯の職業になるとは、当時夢にも思っていなかったという。

ACC修了後、プライベート授業などを経験したうえで、康さんは日本語学校を立ち上げ、現在に至っている。教師として、また、経営者として、日韓関係の難しさ、東日本大震災と福島原発事故による生徒減少も、すべて「ピンチはチャンス」と難局を切りぬけてきた。現在は、東京・新宿で定員880名の各種学校である日本語学校と、評価の高い日本語教師養成講座を運営している。

康さんにとっての小出先生の第一印象は「厳しい先生」というものだった。が、そのうち、先生の広く深い学識と包容力のある人間的魅力に引き付けられるようになったという。小出先生の「日本語の表面的な技術を教えるだけでなく、その国の国民性や思考方式、さらには文化的な背景等を深く学んでおかないと、相手にとって分り易く正しい日本語の授業はできませんよ。」という言葉はもっとも印象的だった。これは、日本人と似て非なる部分がある韓国人に日本語を教える時、いつも心の隅の何処かに置いている先生の教えだという。現在、学校には十数か国から学生が来ているが、どの国の学生にも臆せず、広い心で接することが出来るようになったのは小出先生のおかげであると康さんは言う。

### 3.2.5. 濱屋さんの場合

濱屋さんの受講開始は、1979年冬学期である。1973年から公立高校の国語教師をしていた濱屋さんは、「現代文」の教育方法に数年間悩んでいた。「現代文」とはどういう教科なのか、どういう力を生徒に育てたいのか。悩んだとき考えたのは、一度外からの日本語を見てみることにした。日本語教師養成講座はいくつかあったが、濱屋さんの選択基準は、まず、高校教師の仕事の続けながら受講ができる夜間の講座であることだった。すでに社会学と文学の2つの修士号を持っていた濱屋さんにとって、「大学院なみ」というフレーズには関心はなかったが、講師のすばらしい顔ぶれには魅力を感じたという。修了後の1985年に、濱屋さんは県の教育委員会から中国のN大学に日本語教師として2年間派遣される道を選択した。学生たちはきわめて優秀で、同僚の中国人の先生方も優秀、かつ、国文法にも精通しており、非常に働きやすい環境だったという。帰国後は2003年まで、中国派遣前後合わせて実質28年間の高校教師を続けた。高校を定年退職後、濱屋さんが選んだのは台湾の大学での日本語教育だった。台湾のG大学に5年、現在のS大学が9年目となる。濱屋さんは28年間の日本の高校教師生活と、15年間の中国と台湾におけ

る日本語教師生活を過ごしている。笑顔とゆったりとした話し方、誰の話に対しても関心を持ち真摯に向き合う濱屋さんは高校教師としても生徒に慕われたに違いない。しかし、中国と台湾の学生たちは、教師に対する敬意、信頼、親愛をストレートに表現し、彼らを教え子として持ったことは教師冥利に尽きると濱屋さんは言うのである。

### 3.2.6. おわりに

2,945人にのぼるACC日本語教師養成講座の修了生の中から、5人を紹介した。たった5人の修了生もそれぞれに多くの教え子を育てている。ここに、人づくりの天才だった小出先生の大きさを改めて感じる。持ち前の人柄と行動力で軽やかに大きな人づくりを達成した姿は色あせない。

### 謝辞

筆者の問い合わせに快く協力してくださった、朝日カルチャーセンター日本語教師養成講座の担当者の皆さま、および、修了生の皆さまに心から感謝いたします。

### 追記

以上の文章の大半は2016年10月にまとめたものである。あれから4年近くの歳月が流れた2020年7月に新宿住友ビルはリニューアルを経て、最大2千人収容可能なイベントスペース「三角広場」が誕生した。ウィズコロナ時代に適したにぎわいの創出の場として位置づけられ、災害時には帰宅困難者受け入れスペースともなるという。

話を伺った修了生のひとりの濱屋さんは、台湾で客死をなされた。死を覚悟しながらも、学期を教え切りたいという熱意で台湾に留まり、力尽きた濱屋さんのご冥福を祈りたい。

### 参考文献

- 朝日カルチャーセンター（1974）『総合講座案内』朝日カルチャーセンター  
独立行政法人 国際交流基金（編）（2012）『日本語教育機関調査 結果概要 抜粋』くろしお出版（[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2012/2012\\_s\\_excerpt\\_j.pdf](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2012/2012_s_excerpt_j.pdf)）  
日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議（2000）『日本語教育のための教員養成について』文化庁  
文化庁文化語課（2014）『国内の日本語教育の概要』文化庁文化語課（[http://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku\\_jittai/h26/pdf/h26\\_zenbun.pdf](http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h26/pdf/h26_zenbun.pdf)）  
矢野俊一（1984）『私のカルチャー考 一矢野俊一遺稿集一』矢野俊一遺稿集刊行委員会

# 姫路獨協大学外国語学部日本語学科

古藤友子・福岡寿美子・金澤協子

**キーワード** 外国語学部日本語学科 初級留学生教育 日本語教師養成  
インターンシップ・プログラム 言語教育研究科日本語教育専攻

### 1. はじめに

小出詞子先生は、1987年3月国際基督教大学（ICU）を定年退職ののち、翌4月には、65歳にて姫路獨協大学外国語学部教授に就任され、日本語学科長も併任された。先生は開学設立準備室の時代から、理想的な日本語教育の追究に情熱を注いでこられた。外国語としての日本語教育の専門課程は、私立大学初の設置であり、文部省（現文部科学省）の設置基準をクリアした初めての大学でもある。また、姫路獨協大学は、姫路市が誘致を切望し、日本初の公私協力方式で開学に至ったことも、大学の大きな特色となった。

姫路獨協大学は、開学当初から留学生教育にも重点をおき、4月入学に加えて10月入学制度も導入した。そして、10月入学の留学生は、日本語能力がゼロでも入学可能とした<sup>1)</sup>。

草創期には、韓国・中国・米国・ドイツからの留学生も迎え、開学2年目の1988年フィリピンからの留学生2名、ヘンリー・A・タバオ（Henry A. Tabao）、マリアーリン・Q・ダタン（Maria Lynn Q. Datan）が正規留学生として入学した。小出先生は、この二人に姫路獨協大学から奨学金が出されるよう尽力なされた。小出先生が、開学当初から一貫して掲げられていた通り、4年間で日本語学科の課程を修了し、卒業できるようにした。このフィリピンからの留学生二人は、4年間明るく日本人学生と接し、姫路の社会文化にもよく馴染んだ。また、日本人学生の模範となり、姫路獨協大学全体の国際化にも貢献した。

二人は4年の課程を終え卒業し、日本語の能力を生かした職に就き活躍している。タバオ氏は、大阪外国語大学（現大阪大学）大学院修士課程を修了し、在大阪フィリピン共和国総領事館領事補佐として就職し、日本語を使って任務をこなした。その後、アメリカ・ヒューストンの領事館に勤務した。また、ダタン氏は、日本航空フィリピン・バタンガス支社に就職し、職務はもちろんのこと、日本人スタッフとも日本語での意思疎通を図った。そして、その後日本企業である第一精工株式会社に勤務している。二人とも父となり母となり平和な家庭を築き、日本・日本語との関わり合いを持ち続けている。

開学当初の姫路獨協大学は、日本語学科の定員が50名で、その半数まで留学生が入学できることになっていた。その定員の半数程度の留学生を入学させるのは、至難の業で

あったはずだが、タバオ氏・ダタン氏両名は、前述のように、実質的にはその半数を上回る存在であった。また最初に、奨学金を出して受け入れた留学生が、フィリピンからの留学生であったのは、小出先生が、戦時下フィリピンで日本語教育を始められたので、その思い入れが強かったのではないかと推察できる。

1989年には、大学内に姫路市海外姉妹都市留学生奨学金が準備され、姉妹都市であるオーストラリア：アデレード、ブラジル：クリチーバ、アメリカ：フェニックス、ベルギー：シャルルロア、中国：太原から、姫路市委託留学生としての受け入れも開始された。また、シンガポール国立大学からも短期間の留学生を受け入れ始めた。

マラ財団からの奨学金を得て、姫路獨協大学では初めての公費留学生として、財団法人国際学友会（現独立行政法人日本学生支援機構：JASSO）での日本語基礎教育を受けたマレーシアからの学生の受け入れも開始された。年々短期留学を受け入れる体制も整い、着実に交換留学生の在籍者数も増加した。さらに、小出先生は私財を投じて奨学金制度（小出詞子外国人留学生奨学金）を開設し、また短期留学生の受け入れにも尽力なされた。

## 2. 初級からの留学生教育

小出先生が姫路獨協大学において実践されたのは、初級教育を特に重視し、ゼロ初級からの日本語学習者であっても4年間で大学卒業が可能になるような日本語教育であった。

大学で初級からの日本語教育をする利点は、次の通りである。

- (1) 留学生にとっては、語学校などで予備教育を受ける必要がなく、日本での学習期間が短くて済むのみならず、基礎をしっかりと身につけることができる。
- (2) 日本語教師養成プログラム受講生（主専攻学部学生、大学院生）が、初級クラスを見学することができ、さらに大学院生が実習の場を得ることができる。

姫路獨協大学での日本語教師養成プログラムでは、初級クラスが見学でき、しかもクラスにいる留学生には、見られていることが邪魔にならないミラールームが開学当初から設置されていた。留学生には諒解を得て使用した。

このミラールームは、効果的に活用されてきた。そこでは、先輩教師の通常の授業も見られるし、日本語教師をめざす大学院生の授業も互いに見学し批評することができた。ミラールームは客観的な講評の得られる良き自己研鑽の場を提供した。

教室には教師の動きを追うカメラだけではなく、学習者の反応を追うカメラも設置されているので、ミラールーム内での操作により、多角的な画面設定も可能であった。また、録画が可能となっているので、全体を通して、後で改めて批評することも可能であり、有意義な利用ができた。

このミラールームについて、大学院修了生の黒川（出野）晃子氏が、その貴重な体験を次のように語っている<sup>2)</sup>。

私は、姫路獨協大学大学院で日本語教育を教わりました。はじめて教室で模擬授業



を経験したのもここです。教室にはビデオカメラが前後に二台設置され、後で見ることが出来ます。ビデオの中には、自分が気づいていなかった失敗や欠点が凝縮されていました。また、先生方やクラスメートから、率直で適切なコメントを頂き、多くのことに気づくことができました。この恵まれた環境が私の出発点です。

初級の教科書は、小出先生著『日本語（にほんご/にっぽんご）』（開拓社刊）を使用していた。それはまず、LL教室にて音声と文字を一致させることに始まり、語彙・文法・パターンプラクティスへと展開していき、口頭練習を徹底させることを明確に打ち出した教科書であり、教授プランであった。教科書には、アクセント核が付けられているので、初級の段階から日本語（共通語）らしさを追求した練習を進めることになり、日常生活での日本語使用を見込んだものであった。

また、小出先生は日本語教育実践のみに力を注がれたのではなく、日本文化の体験についても心配りをなさっていた。それは、課外活動を通してなされたり、時には、姫路のご自宅に留学生を招き、異国で独り暮らしの留学生活に潤いを与え、その招きは分け隔てない愛に満ちたものであり、留学を終え帰国した留学生が、小出先生の思い出を語る一つのエピソードともなっている。

小出先生はかねがね初級教育の重要性を謳っておられ、初級教育である基礎の徹底が、将来の中級・上級学習へのスムーズな移行となるとされていた。そのため、日本語能力ゼロ学習者の入学を可能にしたこと、また、ミラールームでの初級レベルの見学を可能にしたことに関しても、小出先生の首尾一貫した精神が連綿と引き継がれている。

このような小出先生の初級教育への情熱について、姫路獨協大学の初期の日本語教育に参加された尾崎明人先生が、次のように述べられている<sup>3)</sup>。

小出先生のお仕事の中で忘れられないことの一つは、日本語が分からない外国人留学生を10月に受け入れて、4年半で学部を卒業させるという構想を実現させたことです。今でも多くの留学生は、1年ないし1年半日本語学校などで予備教育を受けてから大学に入学しますが、20年も前に小出先生は日本語教育と学部教育を一体化するという革新的なアイデアを持っていらっしたのです。(中略) 小出先生の日本語教育に対する情熱、行動力、そして何事に対しても前向きな姿勢は忘れることができません。

### 3. 日本語教師養成

日本語教師養成プログラム主専攻の日本語学科学生は、日々留学生と接することにより、また、日本語教授法などのクラスを受講することによって、日本語教師としての自覚と責任を深く感じるようになった。

日本語教授法を担当した古藤友子が、日本語教育ボランティアグループを立ち上げた時の学生たちについて、次のように語っている<sup>4)</sup>。

阪神淡路大震災後に、姫路獨協大学日本語教育ボランティアグループを学生さんたちと始めました。姫路在住ベトナムやラオスの方々の日本語学習支援活動を呼びかけると、多くの学生さんたちが積極的に参加してくださいました。この活動を通じて、教室以外の、地域での学びの新鮮さと喜びを皆さんと共有することができました。また、ベトナムやラオスの方々とのふれあいのなかで、効果・効率では量ることができない大切なことを学べたと思います。

小出先生の個人的なお考えで、インターンシップ・プログラムが1990年3月から始まりました。これは日本語教師志望の学生をそれぞれ2～3名ずつ、アジア・北米・大洋州をはじめとする諸国の日本語教育機関（主として大学）に毎年10名前後を派遣するものであった。このプログラムは、1990年から1996年春までに約80名を20機関に送った。派遣された学生のその後の成長は目覚ましく、現在その多くが国の内外で日本語教育に携わっている。

小出先生は『インターンシップ・プログラム報告書—1990年から現在までの活動報告—』（1996）に、次のように書かれている。

1990年春、本学外国語学部日本語学科の一期生が4年次になるのにあわせて、本プログラムが発足した。本学は留学生が少ないため、日本人学生（以下、学生）と留学生との接触が少なく、また、当時「日本語教師になる」という学生の自覚も足りなかった。

その様子を見て、私、小出は、将来日本語教師を志望している学生のために、学外のいろいろな日本語教育の場に触れさせることが必要ではないかと考えた。しかし、国内での日本語教育の場には限りがある。海外の日本語教育の現場に派遣し、現状に触れさせ、学生自身が「日本語教育とはどのようなものであるのか」ということを理解し、見聞を広める。これが、本プログラムの経緯および趣旨である。

これに先立ち、1989年3月には、オーストラリアのニューカッスル大学に3名が派遣されている。このパイロット版プログラムに参加した金澤（児島）協子は、受け入れ機関の配慮によりワーキング・ホリデーを取得しての参加となり、大学のアシスタントとしての活躍の場が用意された高待遇での受け入れであった。このプログラムへの参加が、その後の日本語教師人生の大きな糧となっている。

以降、日本語教師を目指す多くの学生が、春休み・夏休みを利用して、このプログラムに参加した。その派遣機関は、主として以下の海外（国・地域）の大学である。

オーストラリア：ニューカッスル大学、モナシュ大学、ヴィクトリア大学、クイーンズランド大学、マッシー大学、マードック大学、グリフィス大学、カーティン工業大学、ニューサウスウェールズ大学、スウィンバーン工業大学、ラトロープ大学／シンガポー

ル：シンガポール国立大学／アメリカ：ワシントン大学、カリフォルニア大学／カナダ：ヨーク大学／中国：香港中文大学／台湾：東呉大学／ニュージーランド：ワイカト大学などである。

今日、多くの日本の大学でインターンシップ制度が採用されているが、歴史の浅い地方都市の大学が、時代に先んじてインターンシップ制度を取り入れたのは、小出先生の「教育と実践を結びつけてこそ成果があがる」とのお考えに基づくものである。小出先生の紹介されたインターンシップ先で、最新の日本語教育現場を体験・体感し、その経験を基に、その後の日本語教師生活を充実させた者は数知れない。

インターンシップ・プログラムを継承するために、小出先生のご退職後は、茅野友子先生がその任務を引き継がれシステムを確立された。そのアシスタントを学部卒業および大学院修了生の野村由香里氏が務め、その後も、大学院生がサポートをしていた。事前準備におけるインターンシップ先との折衝はもちろんのこと、参加者への情報提供や送り出しに始まり、プログラムの報告会の設定や報告書の作成など、次の世代へ有益な情報を引き継ぐための対応がなされていった。

主専攻としての日本語教師養成プログラムで、小出先生と同僚として仕事をなさった木川行央先生が、日本語学科の学生たちおよびそのネットワークについて、次のように述べられている<sup>5)</sup>。

日本語学科の学生の特徴として感じるのは、自分から世界を切り開いていく力の旺盛さです。日本語教師になると決めたら、それに向かって邁進する姿勢は、他ではなかなか見られるものではありません。日本語教師になりたいという希望を持っている人はたくさんいますが、それを実現するために何をするか、一歩前へ進むには大変な決断が必要なきがかり、それが出来るか出来ないかが大きな違いとなります。その決断の出来る人が、少なからずいたように思います。(中略) 上級生がそのような姿を見せると、下級生もそれを見習って続いていきます。この連続を作って来られたこと、また大学を中心としたネットワークがあるということ、これは一朝一夕に出来ることではありません。それだけに、この伝統、そしてネットワークがずっと続いていってほしいと思っています。

日本語教師養成プログラムにおいて、小出先生の下で学んだ学生の声を挙げる。韓国の大学で日本語教師をしていた濱田有紀子氏は、授業中の小出先生のお話について、次のように語っている<sup>6)</sup>。

私が大学一年生の時、小出詞子先生が「日本語 I-B」の授業で話されたことを思い出します。戦時下、フィリピンの小学校へ日本語教師として派遣され、日に三校以上もの小学校を転々としながら日本語教育を行っていたこと。戦局がいよいよ悪化し

てきたため、軍の命令により帰国したことなど。そうしたことを踏まえた上で、先生は静かにそして力強くお話をくださいました。「私が日本語教育を行っていた頃は、日本の国家が強制的に、その国の人々に対して日本語教育を推進していました。〔そこに住む人々の言語というアイデンティティを奪って。〕そして現在、あなたたちは日本語教師を目指しています。今は、あの当時の日本語教育ではありません。全く違うのです。強制するのではなく、その国の人々から来てくださると、請われて行くのです。求められれば、どこへでも行きますという姿勢が大切です。また、日本語教育の主体はあくまで学習者にあるのです。この意味を噛みしめてほしい」とおっしゃった。

この先生のお話に感銘を受けた学生は多い。20数年前に日本語教育の主体は学習者であると断言された小出先生のお話は、先生の教育理念の発露そのものであった。

中国の大学で日本語教師をしている張文碧氏は、日本語学科への思いを、次のように語っている<sup>7)</sup>。

小出詞子先生、山田幸宏先生、茅野友子先生、蓮沼昭子先生、古藤友子先生との出会いや教えは、私の日本語教育や日本文化への理解を深め、日本語教師になりたいという思いを強くさせました。今、教壇に立ち、困難にぶつかり時々挫けそうになる度に、姫路獨協大学の日本語学科で過ごした四年間を思い出します。

さらに、学部卒業および大学院修了生の小野崎亮氏は、夢への第一歩であった、小出先生のお言葉について、次のように述べている<sup>8)</sup>。

学部の頃、授業で「夢は叶うんですよ」と言ってくださったのは小出詞子先生でした。ただ、「あきらめなければ」という条件つき。でも「日本語教育に携わるものは他の職種に比べて圧倒的にその夢を現実にすることができる」と保証もしてくださいました。

この小出先生の魔法のお言葉には、多くの学生が魅了され、日本語教育の世界につきつぎと入っていった。筆者三人もそれぞれがそのうちの一人なのである。

#### 4. 大学院言語教育研究科言語教育（日本語教育）専攻

1991年4月、小出先生は大学院開講にあたり言語教育研究科兼任となり、日本語教育科目を担当された。長年に亘る念願の大学院設置が叶い、毎年多数の受験者が殺到した。山田（2008a）によると、大学院入学者の出身大学は、姫路獨協大学をはじめ、神戸大学、京都大学、愛知教育大学、都留文科大学、広島大学、金沢大学、慶応義塾大学、早稲田大学、国際基督教大学、関西学院大学等々で、全国的な広がりを見せているという。また、

夜間の大学院のため、現職の日本語教師や日本語教育を目指す人の研鑽の場となった。

修了生とその勤務先については、2016年度現在として以下に挙げ、代表的な機関（機関名は、その当時およびその後のもの）にとどめた。敬称は略す。

学部1期生がそのまま大学院1期生として、小出先生の下で研鑽を積もうと引き続き大学院へ進学した者は、次の4名であった。金澤（児島）協子（姫路獨協大学非常勤講師）、瀬古悦世（神戸国際大学経済学部准教授）、福岡寿美子（流通科学大学商学部教授）、尾仲（井上）智恵（姫路獨協大学職員）である。また大学院は現職の日本語教師や、他言語の語学教師の研鑽の場であり、浅田まり（NPO 法人実用日本語教育推進協会理事長）、野口雅司（元姫路獨協大学外国語学部日本語常勤教師）、白井智子（元姫路獨協大学外国語学部准教授）が入学することにより、相互に自己研鑽を積む場であることを小出先生は喜ばれていた。

大学院2期生としては、安島めぐみ（元デュイスブルグ大学専任講師）、田中信之（富山大学国際交流センター准教授）、福田（安邊）証子（元九州英数学館国際言語学院日本語学校専任講師）、吉田晃高（姫路大学教育学部准教授）が学部より引き続いて大学院に進学した。そして、幅広い経歴を持つ現職の日本語教師である金澤眞智子（京都外国語大学非常勤講師）、佐藤結（元北陸大学留学生別科専任講師）、横島邦子（元拓植大学非常勤講師）らも入学し、その後も現職日本語教師の大学院入学者が絶えなかった。

3期生は学部より、文春琴（姫路獨協大学外国語学部教授）、北直美（元北陸大学留学生別科専任講師）が入学し、勝田順子（大阪大学国際教育交流センター特任講師）、道広有美子（元萩国際大学専任講師）、石井秀幸（英数学館教務主任）の日本語教師も入学した。

また、4期生には、上仲淳（元台湾：銘傳大学助理教授）、黒川（出野）晃子（元京都産業大学外国語学部非常勤講師）、山崎達郎（弘前大学非常勤講師）、山本さゆみ（元タイ商工会議所大学専任講師）、山本（青山）眞子（元国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員）がいる。

5期生には、山本卓司（台湾：實踐大學助理教授）、松田真希子（金沢大学国際機構留学生センター・大学院人間社会環境研究科・大学院自然科学研究科准教授）、6期生には、武芳子（元岡山大学留学生（現言語教育）センター非常勤講師）、中尾桂子（大妻女子大学短期大学部准教授）、7期生には、横山菜穂子（韓国：聖公会大学校専任講師）、加藤豊二（名古屋教育学院教務主任）、名嶋義直（琉球大学グローバル教育支援機構教授）等と続き、国の内外で多数活躍している。

そして、その種は小出先生が蒔かれたものであることは言うまでもない。

## 5. おわりに

小出先生は姫路獨協大学での10年間、初級からの留学生教育・日本語教師養成・大学院言語教育研究科言語教育（日本語教育）に全身全霊を捧げられた。

初級からの留学生教育では、ゼロ初級からの日本語学習者であっても、4年間で大学卒業が可能になる日本語教育を実践なさった。また、ミラールームの設置およびその有効的活用を実施された。日本語教師養成では、主専攻としての日本語教師養成プログラムを実践され、多くの日本語教師を輩出された。また、インターンシップ・プログラムを発足させ、多数の学生を世界各国の大学へ派遣し、制度として確立された。大学院言語教育研究科言語教育（日本語教育）専攻では、長年に亘る念願の大学院設置を叶え、多くの高等教育機関で教える日本語教師を輩出された。小出先生に教えを乞おうと全国各地から多数の受験者が集まった。

これについて、大学院修了生の上仲淳氏が、次のように語っている<sup>9)</sup>。

姫路獨協大学の図書館を利用させてもらっていました。そのとき本棚に小出先生の本を見つけて、日本語教育のパイオニアといわれている先生がICUからいらっしゃっていることを知り、大学院に入学を考えるようになりました。

これらに関連して、山田（2008b）に「入学者については、学部・大学院共に全国区で、北は北海道から南は沖縄県にまでまたがっており、また、多くの国・地域からも留学生が入学する。就職の場も日本国内はもちろん、海外はヨーロッパ、アメリカ両大陸、ロシア、アジア、オセアニア、アフリカと全世界に広がっている。」そして、「姫路獨協大学外国語学部日本語学科は世界に活動範囲を広げた学科であり、そこで育った卒業生・修了生の多くを教育現場の第一線に送り出してきた学科でもある。」とある。

そして、山田幸宏先生は、小出先生について「実行価値のあることは実行するという先生の真っ直ぐな性格、学生に対する行き届いた世話、仕事仲間に対する思いやりなどは、先生の研究と教育の裾野を広く豊かなものにしてきたと思われる。」と述べられている<sup>10)</sup>。

また、姫路獨協大学での10年間の小出先生のお働きについて、茅野友子先生が、次のように述べられている<sup>11)</sup>。

私がお仕えしたのは晩年の小出先生であったが、東京姫路間を往復して学部・大学院の授業を、ノルマ以上にこなされるだけでも超人的なお働きと思われた。その上日本語学科長や大学院の日本語教育コースの代表者をつとめられ、東京では日本語教育学会や朝日カルチャーセンターでも責任を負われていた。お若い日、ミシガン大学に留学され、修士号を取得された学究であったが、先生のご勉強は、常に実践に裏打ちされた手堅いものであり、またその教育活動の基にあるのは、学生達への信頼と愛であった。このような無私の教育者に触発されない学生がいるだろうか。

小出先生が10年間激務の中、東京と姫路を往復なさっていたことに、今さらながら感心する。そして、先生の無私の精神に学生たちは大いに触発されたのである。

1991年6月に、小出先生は古希をお迎えになり、東京六本木の国際文化会館で、お祝いの会が開かれ、それが「小出記念日本語教育研究会」の発足のきっかけとなった。

小出先生の唯一の願いは、高級料理を食べるのでもなく、きらびやかな宝飾で身を飾るのでもなく、ひたすら日本語教師の若手の活躍の場を提供することであった。そこは互いに研鑽し合い、忌憚なき意見交換のできる場であり、皆が身を置ける場所であった。

ご在職中の1993年11月に、日本語教育における小出先生の永年の功績に対し、勲四等瑞宝章が授与されることになった。この叙勲に関しては、姫路獨協大学名誉教授山田幸宏先生の献身的なご対応があつてのことである。

1997年1月、小出詞子先生退職記念講演会「日本語教育と私」が開催された。この講演会について『姫路獨協大学学報』（1997）に、蓮沼昭子先生が、次のように書かれている。

1月8日（水）午後3時より、この3月末日をもって退職なさる、小出詞子先生の最終講演会が開催された。

（中略）講演会に引き続いて軽食パーティが開かれた。

（中略）パーティで印象に残っているのは、海外で日本語教師としての経験を積み一回り大きく成長した卒業生の姿である。（中略）小出先生の教育者としての最も大きな功績は、こうした人材を育てたことにあるといえるのではないだろうか。日本語教育という仕事にかける先生の情熱、開拓者的な精神に直に触れることによって、この仕事の面白さや可能性に目を開かれ、この道を選ぶ学生は少なくないと思う。講演会の質疑応答で小出先生がおっしゃっていたことだが、姫路に来て一番うれしかったことは、学生と親密な交流がもてたことだという。先生は誰よりも学生達を愛し、その学生達も先生のことが大好きなのである。パーティで教え子達に取り囲まれお幸せそうな小出先生の姿がそれを物語っていた。

1997年4月、小出先生は姫路獨協大学名誉教授の称号を受けられた。

最後に、先生方や卒業生・修了生のどのメッセージにも、小出先生の日本語教育に対する情熱、行動力、そして学生たちへの「愛」というキーワードがあふれていた（日本語学科20周年記念冊子編集委員会 2008）。

小出先生からの情熱に感化され、国内外で日本語教育関係の職に就いている教え子は数多い。その小出先生から受けた愛情を胸に、今、なお、日本語教育の最前線で頑張ることができるのである。

小出詞子先生の教えを受けることができたことに感謝の意を表したいと思う。

## 注

- 1) 『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』編集委員会（1997）小出詞子年譜p.22から引用。

- 2) 日本語学科 20 周年記念冊子編集委員会 (2008) 『姫路獨協大学日本語教育の歩み—日本語学科 20 周年を記念して—』 p.103 から引用。一部改変。
- 3) 注 2) の文献、p.28 から引用。
- 4) 注 2) の文献、p.21 から引用。一部改変。
- 5) 注 2) の文献、p.30 から引用。一部改変。
- 6) 注 2) の文献、p.72 から引用。
- 7) 注 2) の文献、p.74 から引用。
- 8) 注 2) の文献、p.78 から引用。一部改変。
- 9) 注 2) の文献、p.104 から引用。一部改変。
- 10) 注 1) の文献、p.3 から引用。
- 11) 注 2) の文献、p.38 から引用。

## 参考文献

- 小出詞子 (1996) 「経緯と趣旨」『インターンシップ・プログラム報告書—1990 年から現在までの活動報告—』 姫路獨協大学外国語学部日本語学科、1
- 日本語学科 20 周年記念冊子編集委員会 (2008) 『姫路獨協大学日本語教育の歩み—日本語学科 20 周年を記念して—』 姫路獨協大学外国語学部日本語学科
- 『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』 編集委員会 (1997) 『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』 凡人社
- 蓮沼昭子 (1997) 「小出詞子先生退職記念講演会」『姫路獨協大学学報』 姫路獨協大学総務部総務課、66、4
- 山田幸宏 (2008a) 「Ⅲ. 日本語学科案内」日本語学科 20 周年記念冊子編集委員会 (編) 『姫路獨協大学日本語教育の歩み—日本語学科 20 周年を記念して—』 姫路獨協大学外国語学部日本語学科、128
- 山田幸宏 (2008b) 「Ⅱ. 資料作成の主旨・方針・謝辞」日本語学科 20 周年記念冊子編集委員会 (編) 『姫路獨協大学日本語教育の歩み—日本語学科 20 周年を記念して—』 姫路獨協大学外国語学部日本語学科、119-120

## 謝辞

本稿執筆において、山田幸宏先生が尽力なされた『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』および『姫路獨協大学日本語教育の歩み—日本語学科 20 周年を記念して—』の年譜や資料などを参考にさせていただいた。ここに記して感謝申し上げます。



# 小出記念日本語教育研究会

西原 鈴子

キーワード 小出詞子先生 日本語教育研究会 論文集 研究・実践

---

### 1. はじめに

「小出記念日本語教育研究会」は2016年7月に第25回目となる会を開催した。1992年に発足して以来、小出詞子先生ゆかりの研究会として、発足当初の目標を掲げ続け、年々充実した運営を重ねてきたことは、先生が残された遺産を継承する大きな業績であると思う。発足から今日までの道筋を振り返って、これからも長く続く発展の一里塚としたい。

### 2. 発足の経緯

1921年に誕生された小出詞子先生が古希を迎えられた1991年の祝会の際に、「どのようなお祝いをお望みですか」という教え子の問いに対して、「研究会を作りたい」とお答えになったのが、小出記念日本語教育研究会設立の出発点となった。「私が期待していることは、血が通い合う研究会を作ることです」と論文集1の冒頭におっしゃっているように、教育実践と研究が表裏一体となり、実践者と研究者が相互交流することによって実践と研究がともに進展する自己研鑽の場とすること、新しく実践・研究に参加する会員の成長を支え、見守る組織とすること、研究会の開催のほか、論文集の刊行も行うことを目指して、発足の準備が始まった。

研究会の基盤としては、小出先生がそれまで御指導された、国際基督教大学、朝日カルチャーセンター、姫路獨協大学の関係者を中核として出発することが自然発生的にまとまった。小出先生のお考えによって作るのであるから、先生のお名前を冠した会にしようということで意見は一致したものの、具体的な名称となると意見がさまざまに分かれた。最終的に「小出記念日本語教育研究会」とすることになったが、「〇〇記念」というのは物故された方を「記念」して名付けるのが原則であるから、「生前付与」というのは失礼ではないかという批判の声も寄せられた。しかし、先生の大らかで温かいお人柄を反映し、その精神を継承する意味で一番ふさわしい名称であるとの観点から、最終的な成案となったのである。

研究会の運営を担う世話人（以下敬称略）は、上野田鶴子、今田滋子、中村妙子、佐々木倫子、西原鈴子の5名、事務局は世話人のほか、大浦明、村野良子を加え、計7名で構

成された。具体的な計画立案の過程で、開催の場所は小出先生が長くご勤務なさった国際基督教大学キャンパスが適当であること、開催日は、小出先生のお誕生日である6月23日になるべく近い週末とすることが決定された。

### 3. 研究会開催と論文集の発行

第1回研究会は、1992年6月28日13時から16時30分に、国際基督教大学本館を会場にして開催された。開会后、小出詞子先生がご挨拶に立たれ、続く基調講演には、柴田武先生が「外来語と日本語教育」という演題でお話をしてくださった。続いて、(1) 言語学・日本語学、(2) CAI教材、(3) 教授法という3つの分科会が開かれ、合計7つの論題で発表があった。

翌年、1993年1月には、『第1回小出記念日本語教育研究会論文集』が刊行された。発足当初のこの時点では、論文集は研究会の報告書という位置付けであり、研究会当日のご挨拶、基調講演とその英語訳、および当日の発表を論文の形にまとめたものとその英語要約が掲載された。編集委員には世話人があたり、英語への翻訳者としてマリー・ベデル氏の協力を得た。

この形式、すなわち、論文集が研究会の内容を原則そのまま反映し、研究会報告書として、基調（特別）講演、ワークショップ等の企画、および発表論文のまとめで構成されるかたちは、第5回研究論文集まで継続された。特別講演者は、J. V. ネウストプニー、(第2回：「日本語文法論の創造性：ICU教科書に寄せて」、久野暲（第3回：「照応名詞句制約について」、梅田博之（第4回：「韓国語の述語の構造」、角田太作（第5回：「所有傾斜—日本語の敬語などに見られる所有の表現—」）と続き、口さがない教え子たちが「小出先生のボーイ・フレンドたち」と不謹慎にも口走ってしまった、錚々たる碩学の方々が名を連ねて下さった。

小出先生からのリクエストであった「血が通い合う研究会」は、さまざまな「手づくり感」満載の形でも実現した。会場には、設営担当者が手折って来た季節の花が楚々とした風情で飾られ、和やかな雰囲気の中で講演や発表が進行した。また、会の最後にはお茶の会が設けられ、会員の手作りケーキが差し入れられるなど、小出先生を囲む会に相応しい盛り上がりを見せた。また、若手研究者・教育実践者支援のためにという目的で、会員有志の蔵書をどんなものでも1冊100円で提供し、売り上げを研究会の運営費に加える「ブックバザール」もこの趣旨にそった企画として始められた。このような会の雰囲気は途切れずに継承され、今日に至っている。

### 4. 研究会組織の発展と論文集の編集方針変更

第2回研究会（1993年7月3日）からは、研究会の企画・運営を担当する「研究委員会」が設けられた。研究委員は、古藤友子、谷口総人、辻村まち子、浜田盛男の4名であった。第3回研究会（1994年6月25日）論文集からは、第1・2回までは世話人が兼任

していた編集委員会が別枠で構成されるようになり、佐々木倫子、谷口総人、辻村まち子、中村一郎、西原鈴子、横山杉子の6名が委員となって編集に当たった。第5回研究会（1996年6月22日）の論文集の編集に当たっては、編集委員のほかに編集助手が任命され、宇佐美洋、笹原健、篠崎佳子、横島邦子はその任に当たった。その後、「研究委員会」、「編集委員会」の委員は次第に増員され、順次交代していくようになって行った。

1998年1月に刊行された『小出記念日本語教育研究会論文集 6』からは、第1回から第5回までの研究会報告書としての論文集という位置付けから、査読を経た論文を掲載する論文集へと性格を変えた。研究会の報告は、論文集の巻末に載せられるかたちに変更された。

投稿される原稿のカテゴリーは、「研究論文」のほか、「教材紹介」、「実践報告」、「調査報告」、「研究ノート」へと拡大して行った。若手研究者を支援する目的で、採択区分も、(1) 採用、(2) 条件採用（一部修正のうえで採用）、(3) 今号再投稿（修正期間内に投稿したのと同じ号に再投稿し、採否の判断を受ける）、(4) 今号には掲載しない、の4区分となっていった。

研究会の組織は年を追って充実して行った。第4回研究会において、小出記念日本語教育研究会会則が承認され、組織としての基本的なかたちが整えられた。論文集6および論文集7には論文集への「論文投稿案内」が記載され、論文集8には「投稿規定」となって記載された。

研究会の会場は、以下のように巡って開催された。

- ・国際基督教大学：第1回～第3回、第5回、第19回以降現在まで
- ・姫路獨協大学：第4回、第13回
- ・国際文化会館：第6回、第7回
- ・東京女子大学、第8回～12回、第14回～17回
- ・名古屋外国語大学：第18回

事務局は、東京女子大学現代文化学部上野研究室（2004年まで）から、同大学・同学部西原研究室（2005年から2008年まで）、国際基督教大学日本語教育課程小澤研究室（2009年から2016年6月まで）、同大学同課程桜木研究室（2016年7月から）に受け継がれている。

2008年には研究会のウェブサイトが国際基督教大学のサブサイトとして発足し、その後2015年以降は独自のサイトとなった。また、ウェブサイトの一部として、「小出記念日本語教育研究会論文集アーカイブ」が併設されており、冊子体の論文集から1年おけてこのサイトにアップロードされていくこととされている。

## 5. 小出詞子先生のご逝去

2002年3月1日、小出詞子先生は80年の生涯を終えられた。晩年にご病気がちで、研究会へのご出席は不可能であったが、2002年3月31日刊行の論文集10の編集委員会には

まだ先生のお名前が記載されている。この号は、冒頭に追悼のことばと小出詞子先生の年譜を掲載して、事実上、先生の追悼号となった。お亡くなりになって後、改めて小出詞子先生の存在の大きさに想いを馳せ、会員一同悲嘆にくれたことであった。

小出先生ご逝去の後には、「小出記念日本語教育研究会」は文字通り、小出詞子先生を「記念」して集う研究会と、投稿論文を審査して刊行する論文集の二つの事業を展開する組織として引き続き発展を続け、現在に至っている。

## 6. 研究会プログラムの変遷

小出詞子先生のお誕生日であった6月23日に近い週末に開催されてきた年1度の研究会は、ポスターの広域配布、ウェブサイトによる広報の充実等によって開催情報が広く伝わり、2016年7月2日には参加者が220人を超える規模となった。

発足当初の研究会は、基調（特別）講演と研究発表の組み合わせという、当時の研究会として典型的な形式で行われた。その後、すでに第2回研究会から、ワークショップが行われ、小出詞子先生のご要望であった「血の通った」研究会の形式を模索する試みがなされた。研究会に参集する者全員が参加者意識を共有できるプログラムとして第6回以降は以下のように展開された。

- ・パネルディスカッション：第6回、第7回、第8回
- ・シンポジウム：第9回、第10回、第11回、第12回、第13回、第20回、第21回
- ・ワークショップ：第14回、第15回、第17回、第22回、第23回
- ・シンポジウム・ワークショップ：第16回、第18回
- ・講演：第19回、第24回、第25回

各回のテーマは、日本語教育の研究・実践の最新動向を反映する内容が厳選され、それぞれの年度において参加者から「初めて知る実践形式だった」、「多くを学んだ」などという高い評価を得ている。

## 7. 論文集に見る研究タイプの変遷

前述のように第1回から第5回までは、論文集は研究会の報告書としての位置づけで刊行された。第6回からは編集委員会が査読し採択した論文および報告が掲載されるようになった。以下の表は、第6回から第24回論文集に掲載された研究のタイプを示している。数字は採択された件数である。

表1 論文集6～24号に採択された研究タイプ

号数	論文	教材紹介	実践報告	調査報告	研究ノート
6	6				
7	5	1	1		
8	5		1		
9	4			1	
10	4		3	1	
11	3			1	
12	4		1	1	
13	2			1	
14	3		1	1	
15	6				
16	4			2	
17	4				
18	3			3	
19	5		1		
20	4			1	
21	6				
22	1			2	
23	2		1		
24	3		1	1	1

このジャーナルの特筆すべき性格は、第9回から24回までの19号に採択された「論文」74本のうち、「言語研究」（学習・教育の側面を含まないタイトル）の数が8本（9.25%）に留まっていることにある。これは、「投稿規定」において、「特に日本語教育の現場に基づいた研究の成果、および、現場と理論がどうつながるのかを問う内容などを歓迎する」（22号まで）と書かれてきたことに大きく依存している。23号からは原稿カテゴリーの定義が整えられ、「研究論文」カテゴリーの定義は次のように書かれている。

日本語教育および関連領域について、先行研究に加えるオリジナリティーのある研究成果が、具体的なデータを用いて明確に述べられているもの。研究課題が明確に設定されており、データの分析を通して課題への解答が示されていることが必要です。教育実践の結果としてまとめられた論文もここに含まれます。研究論文では、オリジナリティー、実証性、論理性を特に重視して査読が行われます。

これは「小出記念日本語教育研究会」が当初から目指してきた、研究と実践の不可分性を裏書きする優れた定義である。

## 8. 2016年7月現在の研究会概要

### 8.1. 研究会の性格

2016年3月に刊行された『小出記念日本語教育研究会 論文集16』には最新の研究会情報が掲載されている。「規約」に示されている「研究会の性格」は以下の4点である。

- (1) この会は、日本語教育界で教育・研究に携わっている者が、自分達の研鑽を発表する場、また、学問上・教育上の蓄積に触れる場として発足した。
- (2) 「現場と研究が一体となってこそ日本語教育の進展がある」との考えに基づき、現場からの研究の成果を発表する場、および、理論を追究する研究者が現場とどうつながるのかを会員に問うなどの発表の場として考えられている。
- (3) 日本から世界に向けて発信する情報のひとつと位置づけ、論文集は日本語と英語の両語で発表する形をとっている。
- (4) 日本語教育に興味・関心を持つ方は、どなたでも年会費を納めることで会員になれる。特定の機関での勉学・教育経験などは問わない。

### 8.2. 研究会の組織

2016年7月現在、研究会は以下のような組織図で示されている。さらに、役員名も併せて記載する。研究会発足当時の会員基盤であった、国際基督教大学、朝日カルチャーセンター、姫路獨協大学の関係者が多い傾向は続いているが、そのような枠組みを離れ、会員及び役員に全国規模の拡がりが見られることがよくわかる名簿となっている。

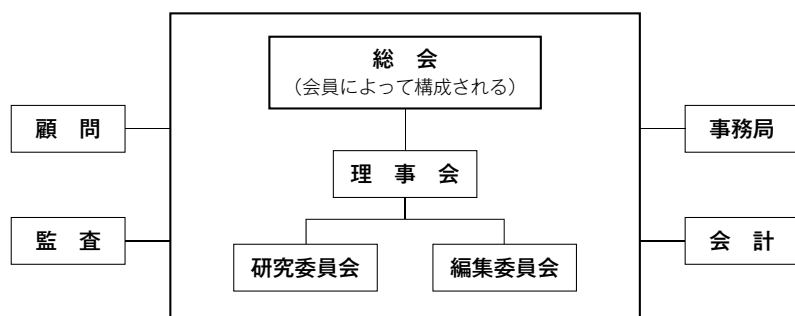


図1 小出記念日本語教育研究会組織図

#### 理 事

才田いずみ (東北大学大学院文学研究科教授)

砂川有里子 (筑波大学名誉教授)

玉岡賀津雄 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授)

辻村まち子 (早稲田大学日本語教育研究センター非常勤講師)

蓮沼 昭子 (創価大学文学部教授)

ペレラ柴田奈津子（国際基督教大学・上智大学大学院非常勤講師）

### 研究委員

小林ひとみ（神田外語大学留学生別科講師）

嶋原 耕一（立教大学兼任講師）

原田三千代（三重大学教育学部特任講師）

福岡寿美子（流通科学大学商学部教授）

### 編集委員

柏崎 雅世（元東京外国語大学留学生日本語教育センター教授）

鈴木 美加（東京外国語大学大学院国際日本学研究院准教授）

石橋 玲子（元昭和女子大学大学院特任教授）

大場美和子（昭和女子大学人間文化学部准教授）

小河原義朗（北海道大学グローバル教育推進センター准教授）

萩原稚佳子（明海大学外国語学部准教授）

斉藤 信浩（九州大学留学生センター准教授）

田中 和美（国際基督教大学教授）

田中 信之（富山大学国際交流センター准教授）

中井 陽子（東京外国語大学大学院国際日本学研究院准教授）

早川 杏子（関西学院大学日本語教育センター講師）

藤森 弘子（東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授）

保坂 敏子（日本大学大学院総合社会情報研究科教授）

丸山 千歌（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）

大和 祐子（大阪大学日本語日本文化教育センター講師）

### 事務局

桜木ともみ（国際基督教大学講師）

武田 知子（国際基督教大学講師）

### 会 計

金澤 協子（徳島文理大学・姫路獨協大学非常勤講師）

根本 愛子（国際基督教大学特任講師）

### 監 査

鮎澤 孝子（元国際教養大学専門職大学院特任教授）

小川早百合（聖心女子大学文学部教授）

## 顧 問

今田 滋子（広島大学名誉教授）

上野田鶴子（特定非営利活動法人日本語教育研究所理事長）

佐々木倫子（桜美林大学名誉教授）

中村 妙子（元国際基督教大学教授）

西原 鈴子（国際交流基金日本語国際センター所長）

## 9. おわりに

小出詞子先生の古希にあたってのご希望によって発足し、「心の通い合う研究会」を目指して歩んできた「小出記念日本語教育研究会」は、2002年3月1日に先生がご逝去になり、この世では研究会をご覧いただくことが叶わなくなってから既に15回の開催を重ねてきた。当初のご希望通りに発展しているのかお尋ねすることはできない。しかし、発足当初、「自分は何も手を下さないのに生まれてしまった」と嬉しそうにおっしゃったことを覚えている者たちは、今日の隆盛をやはり嬉しそうに天国から見てくださると確信している。

先生から直接教えを受けた者の中には、先生が地上の歩みを止められた年齢を超えている者もある。また、孫弟子にあたる者、小出先生のお姿を見たことのない者、「小出記念」の意味が分からない者も研究会に参集するようになっていく。大らかな先生のことゆえ、「それでいいのよ」と言ってくださるに違いない。しかし、「小出詞子」という一人の女性研究者が精魂傾けて築いていった日本語教育の世界に、先生の歩みを記念塔として記憶にとどめ、長く語り継いでいくことが、先生に教えを受けた世代の務めであると信じ、この文書も後に続く世代への贈り物の一つとして列に加えたい。

## 参考資料

小出記念日本語教育研究会（編）（1993～2016）『小出記念日本語教育研究会論文集』1-24号

小出記念日本語教育研究会ウェブサイト

〈<http://koidekinen.org/>〉（2016年10月1日 アクセス）

小出記念日本語教育研究会論文集アーカイブ

〈<http://www.koidekinen.com>〉（2016年10月1日 アクセス）



鮎澤 孝子 (あゆさわ たかこ)

▶▶第1章・第2章・第6章

## 学歴：

- 1964年 国際基督教大学教養学部語学科卒業
- 1969年 国際基督教大学大学院教育学専攻修士号取得
- 1973年 アイオワ大学言語病理学聴覚学部修士号取得
- 1979年 アイオワ大学言語病理学聴覚学部博士号（音声科学）取得

## 職歴：

- 1964年～1966年 海外技術協力事業団青年技術者・日本語教師（マレーシア）
- 1966年～1970年 国際基督教大学教養学部語学科非常勤日本語助手・助手
- 1970年～1974年 アイオワ大学中国東洋学研究科日本語非常勤講師・講師
- 1974年～1977年 アイオワ大学言語病理学聴覚学部非常勤助手
- 1977年～1981年 ハワイ大学東亜言語学科客員助教授・助教授
- 1981年～1987年 鹿児島大学教養部助教授
- 1985年～1986年 国際交流基金派遣インドネシア大学日本研究科客員教授
- 1987年～1991年 国立国語研究所日本語教育センター第一研究室室長
- 1991年～1997年 国立国語研究所言語教育部部長
- 1997年～2004年 東京外国語大学外国語学部日本課程教授
- 2004年～2008年 国際教養大学教授
- 2008年9月～2014年3月 国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践  
研究科日本語教育実践領域教授・領域長
- 2014年9月～2016年3月 国際教養大学特任教授
- 2016年3月 国際教養大学名誉教授

## —— 小出詞子先生の思い出 ——

高校時代は国語教師を目指していたのでICUでは専攻を決めかねていた。そのときに小出先生から今年度から日本語教育専攻が可能になったと伺いほっとした。

日本語教育を専攻した同期生8名は卒業後全員海外に送り出された。私ともう一人はマレーシア・クアラルンプールに派遣され、楽しい2年間を過ごした。

それ以来、ICU、Iowa大学、Hawaii大学で日本語教育に携わり、帰国して鹿児島大学で留学生対象の日本語教育と日本人学生対象の英語教育を担当していたころ、小出詞子先生がはるばる鹿児島市での日本語教育研究会の講演会に来て下さった。

詞子先生は、お父様が鹿児島大学の前身・鹿児島高等農林学校の教授兼学長だったころ鹿児島で誕生なさっている。ご自身の誕生の地を訪ねて鹿児島までお出で下さったのだ。それを歓迎するかのようにはるばる鹿児島湾対岸の桜島が噴煙を上げていたのを思い出す。

## 北條 淳子 (きたじょう じゅんこ)

## ▶▶第3章

## 学歴：

- 1955年 早稲田大学第二文学部英米文学専修科卒業  
 1958年 早稲田大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程修了

## 職歴：

- 1957年～1958年 国際基督教大学語学科非常勤助手  
 1958年～1968年 国際基督教大学語学科常勤助手  
 1966年～1968年 早稲田大学語学教育研究所非常勤講師  
 1968年～1971年 早稲田大学語学教育研究所常勤講師  
 1970年～1971年 パリ第七大学東洋語学科非常勤講師  
 1972年～1978年 早稲田大学語学教育研究所助教授  
 1976年～1977年 米国アーラム大学語学科非常勤講師  
 1978年～2002年 早稲田大学教授  
 1982年 米国ミドルベリー大学夏期日本語講座非常勤講師  
 1988年～1990年 日本語教育学会評議委員  
 1993年～1998年 日本語教育学会常任理事  
 2002年 早稲田大学名誉教授  
 2005年～2007年 パリ日本文化会館日本語教育シニアアドバイザー（日本国際交流基金派遣）

## —— 小出詞子先生の思い出 ——

小出先生といえば、よく晴れた朝ICU 食堂の方から本館への白い道を、教科書を小脇に抱え、うつむきがちに足早に歩いておられるお姿が目につく。ある時は、バレリーナのように桜色のドレスのスカートをひるがえしながら、教壇に立たれていた。

早大3年生の折「東京日本語学校」の日本語教師養成夏期講座を受け、その後「日本語教師連盟」発刊の『たより』の編集や発行の手伝いをしていた私は、それがきっかけで、当時教員探しをしていらした小出先生に出会い、設立当初のICUの語学科の非常勤助手として日本語を教えることになった。それから11年間小出先生のもと、若手の日本語教師の自由な雰囲気の中で、日本語教科書や教材の作成などにたずさわって、実際に教育する場を与えられ、日本語教授法を学習する貴重な機会に恵まれた。小出先生の自由なふるまいや仕事へのひたむきさ、周りの人を巻き込む大きさ、決断の速さ、そして時に顔をみせる可愛らしさは、いつもまわりの人に、勇気と親しみを与えた。私もそう思った一人であった。

## 中村 妙子 (なかむら たえこ)

## ▶▶第4章

## 学歴：

- 1959年 国際基督教大学教養学部英語学科卒業
- 1962年 国際基督教大学大学院教育研究科入学
- 1965年 同上修了 教育学修士

## 職歴：

- 1959年～1960年 国際基督教大学宗教部
- 1960年～1962年 国際基督教大学英語学科日本語専任助手
- 1962年～1965年 同上 非常勤助手
- 1965年～1982年 国際基督教大学語学科日本語専任助手
- 1982年～1984年 国際基督教大学語学科 講師
- 1984年～1990年 同上 助教授
- 1990年～1994年 同上 準教授
- 1994年～2002年 同上 教授

1991年から複数回、日本語教育プログラムの主任、副主任を務めた。

## —— 小出詞子先生の思い出 ——

小出先生がICUの定年1987年3月をむかえられるころ、日本語課の会議の席で、先生に退職の記念樹を植えたいが、ご希望の木はなんでしょうかと伺った。先生はひめりんごが希望とおっしゃった。かわいい木の名前に驚いた者も、少なからずいたようだ。先生のお弟子さんが、ひめりんごのようにたくさん増えるようにと、秘書の方が段取りをしてくれた。先生の送別会の日に無事、植樹がなされた。

幾年かたって風が強く吹いた日に、ひめりんごの木が倒れたという知らせを受けた。駆けつけてみると、2メートルぐらいに育っていた木は、根元から倒れ復旧の策はなかった。

その後、植える場所をどこにするか、他の木に変更するかを検討していて数年が過ぎた。木は、やはりひめりんごとなった。2012年2月2日に総合学習センター南側に、ひめりんごは植えられた。今度こそよく育ち、たくさんのひめりんごの実を見たい。

## 上野 田 鶴 子 (うへの たづこ)

▶▶第5章・第7章

## 学歴：

- 1958年 国際基督教大学教養学部（語学科）卒業 BA  
 1960年 国際基督教大学大学院教育研究科修士課程修了 MA  
 1961年 米国ミシガン大学大学院言語学修士課程修了 MA  
 1971年 米国ミシガン大学大学院言語学博士課程修了 Ph.D.

## 職歴：

- 1963年～1968年 国際基督教大学語学科専任助手  
 1968年～1971年 米国ミシガン大学極東言語文学科専任講師  
 1971年～1972年 国際基督教大学語学科専任助手  
 1972年～1973年 東京大学医学部音声言語医学研究施設専任助手  
 1973年～1976年 米国ミドルベリー大学夏期日本語学校  
 1973～75年 教授、1976年 Acting Director  
 1973年～1977年 東京大学医学部音声言語医学研究施設専任講師  
 1977年～1985年 国立国語研究所日本語教育センター第二研究室長  
 1985年～1990年 国立国語研究所日本語教育センター指導普及部長  
 1990年～2004年 東京女子大学現代文化学部教授  
 2005年～2018年 特定非営利活動法人日本語教育研究所理事長

## —— 小出詞子先生の思い出

国際基督教大学には入学直後に各学生にアドバイザーを指定し、毎年の登録課目や進路相談のアドバイスを受ける仕組みがある。小出詞子先生は二期生である私の大学1年次から4年次までアドバイザーである。先生は外国人留学生の日本語教育主任の役を担われ、受講可能な授業は2年次以降であったが、夏休みには先生のご自宅に他のアドバイザーと招かれ、泊めていただき、楽しいひと時を過ごした記憶がある。2年次以降には日本語教師養成関連課目も開講され、4年次にシニア・フェローとして教壇に立ったことがその後の進路、専攻決定に影響し、修士課程の2年は院生助手として初級から上級の授業を担当することができた。この経験が留学先のミシガン大学で評価され、フルブライト奨学金は初年度のみであったが、院生助手として教壇に立ち、博士課程の継続ができ、授業料免除も受けた。

海外留学は1960年当時は「夢のまた夢」であったが、先生のさり気なく言われた「次は留学ね」、「試験を受けるのよ」でまさかの機会が与えられた。更に、留学先が丁度小出先生が直前までの一年留学なさったミシガン大学に決まったので、先生がアパートを予約しておいてくださり、寝具にいたるまでの生活用品が備えてあった。振返ってみればみる程、小出詞子先生は惜しみなく与えてる方であったことに気づく。

## 佐々木 倫子 (ささき みちこ)

## ▶▶第8章

## 学歴：

- 1968年 国際基督教大学教養学部語学科卒業。  
1973年 米国アメリカン大学大学院より M.A. in Linguistics 取得。

## 職歴：

- 1968年～1969年 国際基督教大学非常勤助手  
1969年～1975年 米国ジョージタウン大学、アメリカン大学、ジョージ・ワシントン大学  
助手、のちに、講師  
1976年～1985年 朝日カルチャーセンター講座第Ⅲ部日本語科 講師、のちに、主任  
1985年～1991年 静岡大学教養部助教授  
1991年～2001年 国立国語研究所日本語教育センター第二研究室長、のちに、日本語教育  
指導普及部長  
2001年～2015年 桜美林大学大学院言語教育研究科教授  
2015年～ 桜美林大学名誉教授

## —— 小出詞子先生の思い出 ——

大学3年の学期開始時に私は専攻で悩んでいた。その時通りかかった友達についていって出席したのが小出先生の授業だった。そして授業の終わりには、語学科に転科し日本語教育に進むことを決めていた。その時から、私にとっては幸運な、小出先生との長いつながりが始まった。

大学を卒業し、1年の助手生活を経て渡米することになったとき、小出先生は羽田空港まで送ってくださるとおっしゃった。先生の運転技術を知る私は必死で辞退したが、「いえ、羽田は慣れているから絶対大丈夫」と押し切られた。が、狭い道で対向車とすれ違えない。三鷹市を出る前に、先生の車のサイドミラーはこわれ、たどり着いた空港には、見送りの家族たちが待ちくたびれた顔で心配そうに固まっていた。

先生は、6年近くの米国滞在から帰国した私を、朝日カルチャーセンターに押し込み、色々な機会を与えてくださった。外国人対象の日本語授業は無論だが、日本語教師養成講座の運営、また、オーストラリアのモナシュ大学日本センターの事務など、民間のカルチャーセンターで取り扱うには荷が勝ったものだったと思う。しかし、小出先生の、さらっと新しいことを試みられる姿勢を受けて、怖いもの知らずで従った30代だった。たいした能力もない人間から、力を引き出してくださった先生に心から感謝したい。

古藤 友子 (ことう ともこ)

▶▶第9章

学歴：

- 1974年 国際基督教大学教養学部人文科学科卒業
- 1977年 東京大学文学部中国哲学専攻卒業
- 1980年 東京大学大学院人文科学研究科修士課程中国哲学専攻修了：文学修士
- 1985年 同大学院人文科学研究科博士課程中国哲学専攻単位取得退学

職歴：

- 1987年～1999年 姫路獨協大学
  - 1987年 一般教育部助教授、1997年 外国語学部教授、日本語学科長
- 1999年～2016年 国際基督教大学
  - 1999年 教養学部アーツ・サイエンス学科人文科学デパートメント哲学・宗教学メジャー 教授
  - 2001年～2003年・2015年～2016年 アジア文化研究所所長
  - 2003年 北京日本学研究センター客員教授、2004年～2005年 教養学部副部長
  - 2006年～2007年 語学科科長、2008年～2012年 大学院副部長
- 2016年～2018年 NHK 文化センター講師、国際基督教大学大学院非常勤講師

—— 小出詞子先生の思い出 ——

小出詞子先生とは、朝日カルチャーセンターで教わったのが最初の出会いである。

当方が35歳になった時、就職のお願いに伺ったところ、「姫路に一緒に行かない？」と仰ってくださった。ただし、「今晚中に、電話をくれるなら…」という小出方式の洗礼を受け、「行きます！」とお電話したのであった。そして、姫路獨協大学に着任し、私大初の外国語学部日本語学科で、正規留学のみならず、幅広いタイプの留学生の受け入れを御一緒した。全てが初めてで、全てが新しい試みだった。

その頃の先生は、姫路城を見下ろす地に住まわれていた。東京⇄姫路間の新幹線通勤では、道中、デッキに立ったままのこともあったそう。また、姫路競馬場の近くで、スピード違反で警察に捕まったことがあったが、その後は、慎重な運転を心掛けられ、一度も、違反切符を切られていないとのことだった。そして、姫路在任中は、二度の骨折も経験なさり、皆でお支えしたが、御自身は平然となさっていた。

先生は何よりも私達を可愛がってくださった。東京から、お手伝いさんと呼ばせてまで、何度も御馳走くださり、私達を信頼して大きな仕事を与えてくださった。

特に、忘れられないのは、先生が亡くなられた後、いつもの袖無しワンピース姿で、嬉しそうに、楽しそうに、森の中を飛び回っていらっしゃる先生の夢を見たことだ。亡くなった自分の親の夢も見ないのに、先生が夢に出ていらっしゃるのは不思議だったが、それは、先生が私達を可愛がってくださったからに違いない。

## 福岡 寿美子 (ふくおか すみこ)

## ▶▶第9章

## 学歴：

- 1991年 姫路獨協大学外国語学部日本語学科卒業  
 1993年 姫路獨協大学大学院言語教育研究科言語教育専攻修了

## 職歴：

- 1991年～1996年 姫路獨協大学言語研究所日本語講座講師  
 1993年～1998年 神戸松陰女子学院大学非常勤講師  
 1994年～2019年 神戸学院大学非常勤講師  
 1994年～2001年 姫路獨協大学非常勤講師  
 1995年～2000年 流通科学大学非常勤講師  
 2000年～2004年 流通科学大学情報学部専任講師  
 2004年～2008年 流通科学大学情報学部助教授（後准教授）  
 2008年～2011年 流通科学大学情報学部教授  
 2011年～2019年 流通科学大学商学部教授  
 2019年～ 流通科学大学人間社会学部教授

## —— 小出詞子先生の思い出 ——

1987年4月姫路獨協大学外国語学部日本語学科（主専攻）に1期生として入学し小出詞子先生と出会う。小出詞子ゼミ1期生となる。大学4年の夏休みにシンガポール国立大学のインターンシップ・プログラムに参加する。日本語学科総代となる。大学院進学の際、他大学院も受けたいと先生に言ったら、先生の表情が一変し、丁寧な口調ながら「顔を洗って出直してらっしゃい」と言われた。その時の小出先生のお顔とその場の緊張した空気を今でもはっきりと覚えている。姫路獨協大学大学院言語教育研究科言語教育（日本語教育）専攻へ進む。大学院1年の春休みにカナダのヨーク大学のインターンシップ・プログラムに参加する。小出先生主査の下、修士論文を執筆し大学院を修了する。小出記念日本語教育研究会、日本語教育学会等で研究発表をする。小出先生の勲四等瑞宝章の叙勲祝賀会の際、花束贈呈を仰せつかる。先生が骨折され初めての入院生活を送られたとき、修了生でローテーションを組んで病院に泊まり込む。そのあと夏休みに、河口湖近くの富士桜高原の別荘で療養される際お伴する。別荘で妹の啓子さまが焼いてくださったホットケーキの味が今でも忘れられない。小出先生の退職記念の日本語教育論文集に執筆する。編集委員を務める。第25回小出記念日本語教育研究会の研究委員を務める。このように日本語教育の世界へ次々と導いてくださった小出先生に心から感謝を申し上げる。

## 金澤 協子 (かなざわ きょうこ)

## ▶▶第9章

## 学歴：

- 1991年 姫路獨協大学外国語学部日本語学科卒業  
 1993年 姫路獨協大学院言語教育研究科（日本語教育コース）修了：修士（言語教育）

## 職歴：

- 1991年～1997年 岡山外語学院非常勤講師  
 1993年～2007年 岡山大学留学生センター非常勤講師  
 1995年～2012年 四国学院大学日本語教員養成課程非常勤講師  
 1997年～現在に至る 姫路獨協大学外国語学部・人間社会学群非常勤講師  
 2001年～2004年 徳島大学総合科学部日本語教師養成課程非常勤講師  
 2001年～現在に至る 神戸学院大学共通教育機構非常勤講師  
 2003年～2016年 徳島文理大学文学部日本語教員養成課程非常勤講師

## —— 小出詞子先生の思い出 ——

当方にも、「明日、行って！」とのお電話を抜きにしては語れない思い出がある。

大学2年次が終わろうとする頃、日本語教師を本格的に目指す者に対して、オリエンテーションが開催された。専門科目が多くなる3年次生からは、大学院を視野に入れ、受講するのが良い事、また、少しでも早く、教える現場に足を踏み入れたほうが良い旨のお話だった。その時、海外での教育現場を体験し、採点等のお手伝い程度は可能となるインターンシップ・プログラムがあり、参加希望者は、氏名と連絡先（当時は、携帯電話もなく、固定電話）を記すよう言われた。それは、教授法の段階が進んでからだとのお話だったので、学年が進めば、機会が与えられると思った。

しかし、その用紙に記入して程ない金曜日の夜、突然、先生から、お電話を頂いた。父が、電話を取ったのであるが、金曜日の23時頃、しかも、大学の先生から直接お電話を頂くような酷い事をしたのかと、心配した面持ちだった。

電話を代わると、間髪を入れず、「明日、オーストラリアに行って！」との事。何が何だか解らず、「無理です！」と返答した私に、「パスポートも持ってないの？ 持っているなら、行けるでしょ？」と仰った小出先生は、その時から、大きな試練と大きな愛情で、導いてくださっているのだと確信する。

オーストラリア以外にも、「来週、マレーシアに行きなさい！」と言う土曜日の夜に頂いたお電話もあった。結局、オーストラリアは、受け入れ機関の計らいで、無事、インターンシップを修了出来たが、マレーシアは、残念な事に、勤務が叶わなかった。

先生は、ゼミ生でもない私にも御配慮くださり、事ある毎に、先生の元に呼び戻して下さっている。それは、小出先生の愛情以外の「詞」が見付からない縁である。



## 西原 鈴子 (にしはら すずこ)

## ▶▶第10章

## 学歴：

1963年3月	国際基督教大学教養学部語学科卒業
同年9月	米国ミシガン大学ラッカム大学院言語学専攻入学
1970年8月	同大学院より Ph.D. in Linguistics 取得

## 職歴：

1967年～1970年	ミシガン大学LSA 学部極東言語文学科常勤講師
1971年～1972年	インドネシア大学文学部日本語科常勤講師
1979年	オーストラリア国立大学アジア学部日本語科常勤講師
1986年～1990年	国立国語研究所日本語教育センター第二研究室長
1990年～1998年	同センター日本語教育指導普及部長
1998年～2009年	東京女子大学現代文化学部言語文化学科教授
2012年～2017年	独立行政法人国際交流基金日本語国際センター所長
2018年～現在	特定非営利活動法人日本語教育研究所理事長

## —— 小出詞子先生の思い出 ——

私が日本語教育に関わるきっかけとなったのは、国際基督教大学4年次に、シニア・フェローとして英語の手伝いをしていた私のところに先生が来られて「今日からあなたは日本語の仕事をするのよ」とおっしゃったことだった。それから卒業までの間、インテンシブ・ジャパニーズのクイズの採点などを手伝いながら、先生のお仕事ぶりに触れ、日本語教育の現場を垣間見る機会を与えられたのだった。

ミシガン大学に留学中、先生が研究のためMITに滞在なさった折にボストンをお訪ねし、先生のお車（死ぬほど怖い運転！）で市内をご案内いただいたこと、その後アンアーバーで結婚することになった折に、式にご出席くださり、親族席に座って、いわば「母親がわり」を務めてくださったことを今でも鮮明に記憶している。

先生は、インドネシア、ジャカルタ滞在中にも拙宅にお寄り下さった。その時初めて、先生が水泳を趣味となさり、ホテルでいつも「ひと泳ぎ」なさるのを楽しんでおられると知り、ご健康とスタミナの源として納得したことだった。

先生は、恐れを知らないかのようにいつもまっすぐ前を向いて人生を駆け抜けていかれた。信仰に支えられてのことだったと思う。いつまでも背中を追いかけてみたい先達として、今でも「先生だったらどうなさるだろうか」と自分に問うことがあるし、あの笑顔で「大丈夫よ」と言ってほしい時がある。



## おわりに

小出詞子先生のご逝去の2002年から18年が過ぎました。先生の教え子も歳を重ね、これからは直接ご指導を受けた者も少なくなっていくと思います。

今回、先生のご生涯を振り返り、日本語教育界へのご貢献を書き記すべく、『小出詞子先生と日本語教育・教員養成』の各章で執筆者がそれぞれの経験をもとに日本語教育界の開拓者であるお姿を述べました。

『日本語教育とともに—小出詞子著作集』（凡人社 1991）と『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』（凡人社 1997）は刊行されていますが、先生のご活躍の具体的な記録はありません。小出先生に直接教えを受け、また、職場や学会活動を長く共にしたものが各章を担当しました。日本語教育界の進展も読みとれる内容であることを願っています。

何章かは本計画の始まったのち間もなく原稿ができあがりしましたが、残りの数章にはかなりの時間を要し、全体をまとめるのに数年を要したことを記しておきます。

今回、「小出記念日本語教育研究会」設立30周年のおはからいで、皆様にお届けできることを幸いに思っております。『小出詞子先生と日本語教育・教員養成』が日本語教育の今日に寄与する一助となることを願いつつ。

上野田鶴子

2022年3月20日

小出記念日本語教育研究会 会員の皆様

論文集29号「30周年記念特集記事：小出詞子先生と日本語教育・教員養成」において、以下の通り、誤記がございましたので、訂正申し上げます。

論文集29号正誤表

頁	行	誤	正
151	19	英語研修所	語学研修所
165	15		
173	24		
195	1		
198	11	国際教養学部	国際部
198	13		
198	19	十日市健介	十日市健助

また、第9章「姫路獨協大学外国語学部日本語学科」を執筆なさいました古藤友子先生が去る2022年2月5日に御逝去なさいました。謹みてお悔やみ申し上げます。

つきましては、第9章に関する問い合わせは、共同執筆者までお願い申し上げます。

特集担当理事：金澤協子